
魔法使いのToLOVEる

T&G

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いのT O L O V E r

【Nコード】

N 9 0 4 7 R

【作者名】

T & a m p ; G

【あらすじ】

世界の『歪み』を修正するため敷島トシアキと鷹見ゲンジが色々な世界を渡り歩く。

その途中のトラブルによって二人はそれぞれ別世界へ。

そして、本作品の主人公である敷島トシアキは気が付くと別人へ！？
迎えが来るまで別世界をのんびりと楽しもうとするトシアキだが、
面倒事に巻き込まれていつもと同じく忙しい毎日になってしまう。
彼に平穏な日がくるのだろうか？

本作品の読み方は『まほうつかいのとらぶる』です。
主人公である魔法使いが色々なトラブルに巻き込まれてしまう、と
いう意味でつけました。

プロローグ（前書き）

この作品は『TOLOVEる』をもとに書かれています。

オリジナル主人公が出てきますので、原作の主人公は登場しません。

原作がお好きな方は読まない方がよろしいかと思われます。

（作者の考え、思い、願いなどが含まれていますので、原作とは違った展開になる可能性があるからです）

それでも構わないかたはご覧になり、意見や誤字、脱字などを書いてくれると嬉しいです。

プロローグ

窓から差し込む日の光を受け、今まで眠りについてた俺は顔を顰めた。

「んっ、眩しい……………」

今日から高校生活が始まるという大切な日だとは理解しているのだが、身体は居心地がいい布団から出ようとはしない。

「まあ、いいか……………」

始業式という行事よりも自分の欲求に素直に従うことにした俺は日の光を浴びないよう布団を深くかぶる。

「トシ兄い、早くしないと学校に遅れるよ?」

部屋の扉を開けて、そう言ったのは妹の美柑。

現在、小学五年生で11歳の少女である。

「……………サボる」

わざわざ起こしに来てくれた美柑には悪いが、今日はそんな気分ではない。

なにが悲しくてもう一度高校へと行かなければならないのか、そんなことを考えながら一言だけ口にする。

「サボるって、そんなのダメに決まってるでしょ！　ほら、早く起きる！！」

こちらの言い分を聞いてくれない美柑は俺が頭までかぶっていた布団を引きはがして、呆れた様子でため息を吐く。

「もう、いつもはしっかりしてるのに、たまにそういうこと言うよね、トシ兄って」

布団を引きはがされた俺は不機嫌な表情で美柑を無言で見つめる。

「・・・・・・・・」

「な、なに？」

不機嫌な表情をしている俺を見て怒られると思ったのか、怯えた様子でこちらを窺う美柑。

「・・・・・・・・ぐう、ぐう」

「ね、寝るなあ！！」

俺が美柑に怒鳴られて色々と準備をしているうちに自己紹介をしておこうと思う。

俺の本名は敷島トシアキ、現在18歳で異世界では王子をやっていたことがある。

ちなみに今の名前は結城トシアキだ。

王子をやっていたということであれは今、王子ではない。

詳しい内容は別の物語で語らせてもらうから省略するが、簡単に言うとうれはここだけではない。

別の世界であれは王子で次期後継者となっていたが、ある日突然現れた――今となつては相棒の――鷹見ゲンジという青年に色々と教えて貰つたのだ。

「世界はここだけじゃないんだよ。 僕は別の世界から『歪み』を調整しに来たのさ」

その言葉に俺は興味を持ち、無理矢理付いていく形でゲンジと一緒に世界を渡り歩いてきた。

その途中でゲンジと生き別れになってしまい、気が付いたらここで寝ていたというわけである。

「ほら、パンは焼けてるから学校へ行きながら食べてね」

俺が着替えて、寝癖を直している間に美柑がパンを焼いていてくれたらしい。

「おう、サンキュー。 美柑、いいお嫁さんになれるな」

丁寧にバターを塗ってくれたパンを受け取り、リビングから出て行くときに美柑のあまりの手際の良さに思ったことが口に出てしまっていた。

「なっ!？」

チラッとしか確認できなかったが、今頃顔を赤くしていることだろう。

こういう反応をしてくれるから、美柑は可愛いのだ。

学校へと向かいつつ、先ほどの『歪み』について簡単に説明しておく。

『歪み』とはこの世界では本来、あり得ない現象によって現れるものなのだ。

世界はそれぞれ異なる秩序を持ち、世界の中に存在するものはその世界固有の秩序から作られている。

ある世界から別の世界へと物体が移動し、異なる秩序にさらされると一種の反応を起こす。

それは違う秩序で作られた存在を異なる秩序に対応させる。

つまり、周囲の秩序を歪ませるものなのだ。

それらを称して『歪み』と呼ぶ。

『歪み』の大きさは物体の大きさや常識によって異なり、大きな物体や非常識であるほどその世界の『歪み』も大きくなる。

また、『歪み』は時間の経過と共にその度合いを大きくし、最終的には世界の崩壊が予測されている。

それを防ぐために俺とゲンジが世界を渡り歩き、『歪み』を調整していたのだ。

調整していた世界でのアクシデントで気が付いたらここにいた俺だが、この世界での記憶が全くない。

目が覚めたら中学を卒業し、高校生になるための準備をしていたのであろう部屋のベッドで寝ていたのだ。

もともと存在していた人間と俺が入れ替わったのか、普通の生活をしていたこの世界の俺に意識だけ入りこんだのか全くわからない。

「まあ、それで『歪み』が出来てるはずだからゲンジと会えると思うんだがなあ」

「トシ兄い、どうかしたの？」

始業式も無事終了し、リビングでのんびりしながら言った俺の独り言に風呂から上がったのであろう、美柑が首を傾げながら反応した。

「いや、なんでもない。　　というか美柑、髪を乾かせ。　　そのままだと傷むだろ」

「後ですよ、先にアイス食べたい」

タオルを首にかけ、髪でパジャマが濡れないようにしているようである。

そのまま俺の前を通過して冷蔵庫に向かおうとする美柑を俺はソファに座りながら力強く引き寄せた。

「きゃっ!？　ちょ、ちょっと、トシ兄い。　ビックリするじゃない」

少し驚いた表情を見せた美柑だが、特に抵抗することなく俺に背を向けた状態でペタンと床に座り込む。

「ほら、拭いてやるからジツとしてろ」

「もう、乱暴なんだから・・・」

特に乱暴に扱った意識は無いのだが、18歳が11歳を力強く引き寄せると確かにそう感じるかもしれない。

「んっ、く、くすぐったいよお・・・」

髪をタオルで優しく拭きながら、俺特有の方法で髪を乾かしていく。

その途中で、身をよじりながら微笑む美柑を見て、こんな世界も悪くないと感じてしまった。

「ほら、終わったぞ。　アイス食べて良し」

「うん、ありがと。　トシ兄い」

笑顔を見せた美柑は俺からタオルを受け取って冷蔵庫へと向かって行った。

最初にこの世界に来て美柑に会ったときに思わず

【お前、誰だ？】

と言ってしまった時の本気の悲しそうな表情はもう二度と見たくないと思う。

その時は寝ぼけていたということにして、一人になったときに持ち物を調べて美柑という名の妹がいると確認出来たのだ。

「しかし、俺の言葉遣いや性格はもともとこんな感じだったのか？」

俺の今の意識はゲンジと色々な世界を渡り歩いていた時の物だ。

しかし、もともとこの世界にいた今の俺のポジションの人間は本当にこんな性格だったのだろうかと疑問に思う。

「まあ、『歪み』が原因で周りも影響されていると考えた方が無難だな」

とりあえずの結論を出した俺はさっさと風呂に入って寝ることに決めた。

ゲンジが迎えに来れば俺という『歪み』を調整して、また世界を渡り歩く。

それまでの休息と思ってこの世界を結城トシアキとして、せいぜい楽しんでおくとするかな。

プロローグ（後書き）

勢いで書いてしまった。

けど、後悔はしていません。

更新は不定期、一応、原作に沿って書いていきます。

第一話

「面倒だなあ……………」

始業式が終わり、高校一年生として彩南高校に入学した俺だが、早速帰りたくなってきた。

一応、意識では18歳なので高校を卒業しているのだが、この世界での俺はまだ高校一年生らしい。

窓側の自分の席に座り、教師の話を聞き流しながら下校の時間まで外を眺めて過ごしている俺であった。

「トシアキ！　一緒にゲーセン行こうぜ！！」

「悪い、今日は帰るわ」

猿のような顔をした奴に名前を呼ばれ返事をした俺だが、誰か全く分らない。

中学からの同級生か、入学までに知り合った奴だろうと思った俺は下の名前を呼んでいるところを考えて前者と判断する。

だけど、俺には名前がわからないので、とりあえず返事だけして自宅へ向かうことにした。

「ただいま……」

「お帰りい、トシ兄い。　お父さん、今日も帰り遅くなるってさ」

「そうか。　とりあえず着替えて来るわ」

高校より早く終わっていた小学校に通う美柑の言葉に返事をした俺だが、ここでも問題が出てくる。

「親父のことがわかんねえ・・・・・・・・」

階段をのぼり、自室へ向かいながら俺は思いっきり深いため息を吐いた。

アルバムを探せば顔くらいわかるだろうが、今更アルバムを探して美柑に不信がられるのも勘弁してほしいところだ。

「帰りが遅くなるらしいし、顔を合わす前に寝てしまえばいいか」

そう考えた俺は素早く制服から着替え、風呂場へと向かった。

「ふう、風呂はいいねえ。　人間が生み出した文化の極みだ」

口にだして言ったのはいいが、頭の中は全然違うことを考えていた。

今はまだいいが、いずれ父親と顔を合わすことになるだろう。

さっきの美柑の言葉に母親のことが出てなかったのも気になる。

「どうすればいいか・・・・・・・・」

浴槽に背を預け、天井を見つめながら考えていると目の前に人の気配を感じた。

「っ!？ 人？ いや、これは……………」

この感じはゲンジの能力の一つである世界を渡るためのゲートを開いたときと同じであった。

風呂に入っているときに迎えにくるなよ、と俺は思っていたが、目の前に現れたのは桃色の綺麗な髪に付いた水気を払っている少女であった。

「ふう、脱出成功!」

まだ幼さが顔に残っている彼女であるが、身体の方は立派に大人な女性が俺の目の前でそう言って微笑んでいた。

「……………」

「ん?」

俺の無言の視線を感じたのか、首を傾げて俺を見つめる彼女。

「……………とりあえず、前を隠そうな」

浴槽から立ち上がり、脱衣所まで彼女の身体を隠すためのタオルを取りに行った俺。

「きゃっ!？ トシ兄い、出て来るなら出て来るって言ってよ!」

脱衣所に出ると、洗濯機を動かそうと洗剤を手に行っている美柑が驚いた様子で俺を見つめる。

「いや、浴槽に突然、裸の女が出てきてな。俺も少し驚いてタオルを取りに来たんだが」

「は？」

俺の言葉が通じなかったのか、美柑は素っ頓狂な声を出して洗剤を取り落とす。

「いや、だから裸の女が・・・・・・・・」

「私の目の前には裸の男が出てきたように見えるんだけど」

ジト目で俺のことを見つめる美柑に俺は説明するより見て貰った方が早いと判断した。

「・・・・・・・・とりあえず、風呂場を見てみるよ」

「何もいないんだけど？」

「なに？」

美柑の言葉に今度こそ驚きを表情に出してしまった俺は美柑の後ろから風呂場を覗く。

「いなくなってる。一体、なんだったんだ・・・・・・・・」

深く考え込む俺の肩をポンッと叩いて美柑は小悪魔的な笑みを浮かべる。

「トシ兄い、年頃なのはわかってるけど、現実と妄想の区別はつけないよ……痛っ!？」

とりあえず、美柑の言葉を全部聞かずに、額にデコピンを放って俺は浴槽へ戻った。

「さて、どうしたものか……」

風呂から上がった俺は二階にある自室の前でそう呟く。

自分の部屋の中から人の気配がするため、どのように対処するかを考えていたのだ。

「美柑は下にいたし、父親は遅くなる。母親が窓から入るような変質者じゃないだろうし」

親族の可能性はまずない。

俺のことを襲おうとしている奴なら気配を消すようにして身を潜めているはずだ。

「……もういいか」

考えていても時間の無駄だと思うようになったので、気にせずドア

を開けることにした。

「あっ、タオル借りてるよ」

「タオルの前に服を着ろ。 年頃の女の子が何やってんだ」

先ほど裸で浴槽に現れた女の子がタオルを身体に巻きつけて、俺のベッドに座っていたのだ。

「服はペケがまだ来てないから着れないの」

そう言った彼女の言葉に首を傾げながら、俺はまだ名前を聞いてないことに気が付いた。

「そういや、名前。 なんていうんだ？」

「私？ 私、ララ」

ララと名乗った彼女を見つめ、日本人ではないと判断した俺はさらに質問を続ける。

「じゃあ、ララ。 お前はどこから、何を目的に来たんだ？」

俺の質問にララは笑顔のまま自分の事情を話してくれた。

デビルーク星という場所からやってきたこと。

自分の発明品であるワープができる機械で俺の家の風呂場へ出てきたこと。

追手に連れ戻されそうになって逃げてきたことを俺は静かに聞いた。

「追手ねえ・・・・・・・・この世界でも平和に生きていけないのかね」

ララの事情を聞き終えた俺はそう言って苦笑いを浮かべてしまう。

また何かに巻き込まれてしまう気がする。

どうやら俺には休まる日がないらしい。

「？」

俺の呟きが聞えなかったのか、ララは笑顔のまま首を傾げている。

そんなララをジッと見つめていると、窓の外からこの部屋に向かってくる何かに気付いた。

「ん？ 何か来た・・・・・・・・」

「ご無事でしたか、ララ様！」

翼を生やし、自らで飛んできた物体はその言葉と共にララのもとへ向かって行く。

「ペケ！」

ララも飛んできたものに気付いたのか、嬉しそうに微笑みながらペケと呼んだものを静かに受け止める。

「よかった！ ペケも無事に脱出できたのね！」

「ハイ！ 船がまだ地球の大気圏を出ていなくて幸いでした」

二人（？）で仲良く話していると、ペケと呼ばれた翼を生やした小さいやつが俺の存在に気が付いたらしい。

「ララ様、あの目つきの悪い地球人は？」

始めて会って、言葉も交わしていないので第一印象はどうしても見た目で判断になってしまうのは仕方ないと思うが、突然そんなことを言うのは失礼だとは思わないのだろうか。

「この家の住人だよ。　そういえばまだ名前、聞いてないね」

「ん？　トシアキ、結城トシアキだ」

そう言えば自分の名前を言って無かったか。

色々と尋ねておいて、自分のことは一切話していなかったことに少し反省する。

「この子はペケ。　私が造った万能コスチュームロボットなんだよ」

「ハジメマシテ」

なるほど、あの小さいやつはロボットだったのか。

納得出来る事実には俺は一人、頷いていた。

「じゃ、ペケ。　よろしく」

「了解！」

ララは自分の身体に巻いていたタオルを放り投げ、宙に浮かぶペケに話しかける。

というか、ララの尻あたりに黒い尻尾が見えた気がしたんだが、アレが宇宙人の印なのだろうか。

「じゃーん！」

自分で効果音を付けたララの姿は真っ裸から変わった衣装に変化していた。

「どう？ 素敵でしょ、トシアキ」

「まあ、いいんじゃないの？」

日本ではありえない服装なので変だと俺は思うが、本人がそう思っているならわざわざ否定することもないだろう。

「ときにララ様、これからどうなさるおつもりで？」

ペケというロボットは自分が服になっても話せるようで、ララの頭のあたり——ちょうど帽子になっているところ——から声が聞えてくる。

「それなんだけど、私に考えがあるんだ。 実は——」

「っ!？」

ペケの言葉に答えているララだが、俺は高速で近づいてくるものに気が向いていてララの言葉は聞えていなかった。

「全く、困ったお方だ」

「地球を出るまでは手足を縛ってでもあなたの自由を封じておくべきだった」

ペケに続いて今度は黒服にサングラスを装備した男二人が窓から俺の部屋へと入って来たのであった。

「ペケ・・・・・・・・・・」

「はっ、ハイ！」

「私、言ったよね？　くれぐれも尾行には気を付けてって」

「ハイ・・・・・・・・・・」

そんな会話をしている二人を余所に俺は侵入してきた男たちを観察する。

一般人じゃ勝てそうにないが、特別な能力とかを持っているわけでもなさそうだな。

さて、この世界でも俺の『魔法』は使えますかね。

「あっ！」

ララの腕を一人の男が掴み、無理矢理連れて行こうと力強く引っ張る。

「イヤッ！ 離してよ！！」

「我儘を言わずに、早くお父上のところへっ！？」

男は最後まで言い続けることが出来ず、開け放たれていた窓の外へ身体が吹き飛んで行った。

「ふむ、問題ないようだな」

俺は自分の右手から放たれた風の威力に今までと変わらないことを理解した。

「な、何をした！ 地球人！！」

残っていたもう一人の男が俺の方へ身体を向け、大声で怒鳴りつける。

だが、俺も重なる出来事にストレスが溜まっているのだ。

「何をしただと？ 敵にそんなことを教える馬鹿がいるか」

「くっ！ ララ様、お下がってください。この者はタダものではありません」

俺の殺気を感じ取ったのか、黒服の男はララを庇うようにして立ち、俺と向かい合う。

「出ていけ。それと、これ以上関わるな」

「トシアキ……嬉しい、初めて会った私の為にそこまでしてくれるなんて」

俺は自分の向かい側にいる二人に言ったつもりだったが、ララはどうやら違った風に聞えたらしい。

目をキラキラさせ、頬を少し赤らめて俺の方を見つめてくる。

「ラ、ララ様、今回は引きますが次は隊長が直々に来られます。どうか、お考え直しを」

「イヤ！ トシアキがこう言ってるんだから早く帰ってよ」

いつの間にか黒服の男の後ろから俺の後ろへと移動してきたララはそう言って追い払う仕草をする。

「地球人！ 次は王室親衛隊隊長ザスティン様が来られる。それまで命乞いの練習でもしておくんだな！」

黒服の男はそれだけ言って、窓から出て行った。

俺が窓の傍まで行き、外を確認すると吹き飛ばされたもう一人と共に暗闇へと姿を消していった。

「トシアキ、ありがと！ それにしても地球人って強いんだね」

「いや、俺だけ特別なんだよ」

そう、俺が王子だった話は以前少ししたと思うが、実は『魔法の国』の王子だったのだ。

そんなわけで、俺は小さい頃から魔法を使い、魔法と共に生きてきた魔法使いなのだ。

「ふうん、そうなんだ」

俺の一言に納得したのか、それ以上ララは何も聞いてはこなかった。しかし、突然顔を赤らめたかと思うと、上目遣いに俺を見つめてきたのだ。

「私、パパが結婚させるための見合いに嫌気がさして家出てきたの」

先ほどの事情を聞いた時には追手がいるということだったが、なるほど。

父親がララを連れ戻すための人材だったのか。

「自分の好きなように、自由に生きたい」

どうやらララの父親は娘を溺愛しているらしい。

可愛がるあまりに自分が正しいと思ったことをずっとララに対して行ってきたのだろう。

「まだまだやりたいことも沢山あるし、結婚相手だって自分で決めたかったの」

「よかったじゃないか。　しばらくは自由に生きれるだろ」

「でも、私さっきのトシアキの言葉で気付いたの」

話の流れがいまいちど理解できないので、黙ってララの言葉の続きを待つ。

「初めて会った私の為に身の危険を顧みず、追手を追い払ってくれた」

それは俺の部屋に土足で入り込み、俺の存在を無視して色々やっていたこいつらに腹が立っていただけで特に深い意味は無かったりするんだが。

「私、トシアキとなら結婚してもいい。　ううん、トシアキと結婚したい！」

「・・・・・・は？」

突然の告白に流石の俺も思考が一時停止してしまった。

もともと俺の言葉を自分の都合のいいように聞き違えたララに問題があるんだが、それを訂正しなかった俺も悪いのか。

「これからよろしくね、トシアキ」

「・・・・・・」

ララの笑顔の言葉に返事が出来なかった俺は何も悪くないと思う。

異世界に来てまさかプロポーズされるとは思わなかった。

これからどうやってララの誤解を解いていこうか、考えるだけで頭が痛くなりそうであった。

くおまけく

トシ兄いがデコピンした部分がまだヒリヒリしている。

「もう、ちょっとからかっただけなのに怒らなくてもいいじゃん」

リビングにはいないトシ兄のことを思い浮かべ悪態を吐く私。

昔からお父さんとお母さんがあまり家にいなかったけれど、四つ離れているトシ兄いはしっかりしていた。

私が小さいときは家事も一人でやっていたし、雷が怖くて眠れなかったときは一緒に寝てくれたトシ兄い。

「カッコいいのに、やる気の無い態度が減点になってるんだよね」

基本的になんでも一人でこなせるトシ兄いだが、私が家事を手伝うようになってから段々と怠け始めた。

原因はわからないけど、聞いたら今の関係が壊れそうで聞けない。

トシ兄いはきつとここからいなくなってしまうような気がするから。

「今のままで大丈夫、トシ兄いは私が大好きなお兄ちゃんなんだから」

自分で口に出して言ったことを思い出して、傍にあったクッションを抱え込み、赤らんだ頬を隠すように顔をうずくめる。

そこまでして、先ほど風呂場でからかったのはトシ兄いに構って欲しかったのだと気付く。

「私、ブラコンなのかなあ……」

トシアキの部屋でドタバタと音が鳴り響く中、美柑の小さな独り言は誰にも聞かれることはなかった。

第二話

「ぐう．．．ぐう．．．」

現在、午前七時。

俺は未だに深い眠りに落ちていた。

しかし、もうすぐその平和な時間が終わりを告げるのだ。

そう、目覚まし時計という名の騒音をまき散らす悪の発明品が。

ピピピ．．．．．ピピピ．．．．．

「っ！？ んっ．．．．．」

そう思っている矢先に音が聞えてきた。

俺は仕方なく手を布団の中から出して目覚ましを止めようとする。

「．．．．．ん？」

しかし、動かそうとした右手が何故か動かない。

まさかこれが噂に聞く金縛りなのか、と思いつつ目をあけてみる。

「．．．．．」

「すう．．．すう．．．」

そこには俺の右腕をしっかりと抱きしめ、幸せそうに眠るララの姿があった。

「いや、なんでだよ」

寝ぼけていた思考が一気に目覚め、思わずツツコミをいれてしまった。

まさか、俺が寝ていたとはいえララの気配に気づかなかったとは、早くもこの争いのない世界に馴染んでいるのか。

「あ、トシアキ。 おはよ」

俺のツツコミで目が覚めたのか、ララが目を開けて俺に挨拶してきた。

「おはよ、じゃねえよ。 なんで俺のベッドにいるんだ、しかも裸で」

「だってトシアキと一緒に寝たかったし」

「いつもララ様のコスチュームでいるのは大変なのです!」

ララとペケがそう言って俺が聞いたことを答えてくれた。

「そんなもん、俺が知るか!」

答えてくれたが、俺にはそんなこと関係ないので、とりあえず偉そうに言い放ったペケには殺気を込めて睨みつけてやる。

すると、冷や汗をかいてララの後ろに隠れてしまった。

というか、ロボットも汗をかくのだろうか。

「トシ兄い、いつまで寝てるの？ 遅刻する……」

そこへいつも目覚ましでは起きない俺を起こしに来てくれたのか、美柑が扉を開けて部屋を覗きこんできた。

「「「……」」」

ベッドの上に座る俺とその傍に裸でいるララ。

ララの後ろに隠れていたペケと部屋を覗きこんだ美柑。

四人とも一瞬、沈黙してお互いの顔を見合す。

「お邪魔しました」

最初に動いたのは美柑で、それだけ言って扉を閉めてしまった。

「ヤバいな、美柑が変に誤解してるかもしれない……」

次に動いたのは俺で、頭を抱えて次から美柑に会ってなんて言おうか考える。

「今日は出かけなきゃ、ペケ」

「ハイ！」

最後はララで、いつもと同じようにペケにコスチュームチェンジをさせて窓から外へ出て行く。

「じゃ、トシアキ。わたしちよつと出かけてくるね」

外で浮かんたまま振り返り、俺にそれだけ言って飛び去ってしまった。

というか、出かけて来るってことは戻ってくるということ、つまりここに住むのか。

「冗談じゃねえ。ただでさえ父親は母親のことが分からないのに、これ以上わからない奴が増えてたまるか」

もつとも、これから会っていく奴は俺の意識がはっきりしているの
で覚えていけばいいだけなのだが。

「……………美柑に事情を説明して、学校に行くか」

俺は制服を着込み、美柑がいるであろうリビングへと向かうことにした。

「はあ……………」

俺は深いため息を吐きながら通学路を歩いている。

このため息の原因はもちろん、今朝のことだ。

あの後、美柑に事情を説明したのだが、

【宇宙人？ そんなのいるわけないじゃん】

【いや、けどな美柑……】

【私、もう学校行くから】

と話を聞かずに出て行ってしまった。

俺の分の朝食を準備してくれているあたりは流石と思ったのだが。

「今更、美柑に俺とお前の兄は別人だと言うわけにもいかねえし……」

教室にたどり着いた俺はそう呟きながら足を踏み入れる。

「ん？」

黒板の隅に自分の名前が書かれていて疑問に思ったが、学校には日直というものがあったことを思い出す。

「……面倒だな」

男子は俺で女子は西連寺という奴らしい。

昔の俺を知らない奴だといいな、と思いつつ気配がしたので振り返る。

「あ、結城君。 今日一緒に日直だね」

「あ、ああ」

学級日誌を持ち、俺にそう話し掛けてくる女の子。

話し方や態度を見て、この子が西連寺で、昔の俺のことを知っている奴らしい。

「高校に入って初めての日直が中学から一緒に結城君でよかった」

そう言って微笑む彼女であるが、俺は心の中でこの西連寺という女の子のことがまったくわからず困っていた。

話し掛けてくるくらいだから嫌ってはいないだろう。

しかし、中学時代に恋人だったというわけでもなさそうだ。

「俺も、とりあえず顔と名前が一致する西連寺でよかったぜ」

顔と名前も別に一致しているわけではないが、中学からの知り合いということだそう言うておく。

今までのことから結論で、比較的に仲のいい女友達だと俺の意識に叩きこんだ。

それから、授業が終わるたびに黒板を消し、必要な教材を教室まで運んだりと日直らしい仕事をして放課後になった。

「さて、これで終わりか」

教室の後ろの棚にあった花瓶の水を換え、教室に戻って来た俺。

俺が教室に戻ると西連寺は日誌を書き終え、開いていた窓を閉めているところであった。

「結城君ってさ、中学の頃もよく教室のお花の手入れしてたよね」

「ん？」

まさか教室に二人しかいない状況で日直の仕事の内容以外で話しかけられるとは思っていなかった。

「けっこう忘れちゃうんだよね、お花のお水換えるの。でも、結城君はいつもこまめに手入れしていた」

「ああ。　こう見えて俺は自然が好きなんだ」

昔の俺もこの作業をしていたらしいが、自然が好きという俺の言葉は本当のことである。

俺が使う『魔法』は自然にいてと言われている『精霊』に力を貸してもらっているのだ。

昨日、黒服の男を吹き飛ばした時も風の『精霊』に力を借りたからである。

「都会は確かに色々と便利だけど、やっぱ、海や川、木や日の光と
かも大切にしていかなくちゃいけないと思ってるからな」

そう言いながら俺は花瓶を置き、そこに入れられた花の傍にいた『
精霊』に微笑みかける。

「でもやっぱり、それを行動に現わせる優しい結城君はカッコいい
と思うよ」

「えっ？ 西連寺、それってどういう・・・」

まさか朝に、比較的仲のいい女友達っていう判断をしたのが間違
っていたのかと、少し心配になってしまう。

「な、なんでもない。ゴミ、捨ててくるね」

しかし、西連寺も予想外の言葉が出てしまったのか、慌てて窓を閉
め、ゴミ箱を持って立ち去ろうとする。

「あっ!？」

余程慌てていたのだろうか、扉のレールの部分に足を引っ掛けてゴ
ミ箱を抱えたまま倒れそうになる西連寺。

「危ないっ!」

先ほど微笑みかけた『精霊』に力をかりて、移動速度を通常の数倍
に上げ、一瞬で西連寺の傍により、身体が倒れないように後ろから
抱きとめる。

そして、手放されたゴミ箱だけが廊下に倒れ、俺と西連寺は無言でお互い見つめ合う。

「わ、悪い。 助けるためとはいえ、抱締める形になって」

しばらく見つめ合っていた俺だが、このままの状態は流石にマズイ
と思い、西連寺を解放してそう謝罪する。

「う、ううん。 その、助けてくれてありがとう」

西連寺も抱きしめられたことに照れているようであったが、特に怒
っている様子ではなく、助けた感謝までされてしまった。

「結城君、ゴミ捨て手伝ってくれる？」

「ああ。 これも日直の仕事だ。 最後まで二人でやろう」

二人で廊下に散らばってしまったゴミを拾い集め、二人で焼却炉ま
で足を運んだのであった。

帰り道で西連寺と別れた後、俺は川辺を歩いていた。

「やっぱ、自然はいいな。 今度の休みはここで昼寝しようかな」

「その時は私も一緒がいいな」

独り言に返事があると思っていなかった俺は驚いて身体を声のした方へ向ける。

「っ!？」

そこにはウラが出ていった時の服装で宙に浮かんでいたのだった。

「もう、探したんだよ? 家に行ってもトシアキいないし」

「俺は今日、日直だったからな。 少し帰りが遅くなったんだよ」

普通に返事をした俺だが、ウラの気配に気付けなかったことに内心驚いていた。

本当にこの世界は平和な世の中らしい。

いつもの俺なら、寝ていても空から話しかけられても近づいたら気付いていたのだが。

「とにかく、一緒に帰ろ?」

「いや、一緒について、やっぱり俺の家に住むのか?」

朝に考えていたことが現実になりそうになり俺はなんとかしようと思考をする。

「そうだよ、結婚する人たちは一緒に住むんだよね?」

「俺はまだ、結婚するなんて言ってねえだろ」

とりあえず、告白されたことを否定も肯定もしていないので、それを理由に俺の家から遠ざけよう考える。

「ララ様!!」

俺の思考を中断させるほどの大声でララの名前を呼んだ奇妙な人物。全身に鎧を着込み、黒いマントをなびかせて、腰に剣を付けた奇妙な人物。

とりあえず、この地球には絶対にいないであろう奇妙な人物だ。

大切なことなので三回言っておく。

「ザステイン！」

呼ばれたララは知り合いだったようで、彼の名前を呼ぶ。

というか、ザステインというのは昨日来た黒服の男が言っていた人物ではないだろうか。

「さあ！ 私とともにデビルーク星へ帰りましょう、ララ様！」

そういえば、ララは父親が勝手に決めたお見合いが嫌だって言っていたな。

それにザステインの役職は王室親衛隊隊長。

「嫌よ！ 私、帰りたくない理由が出来たんだから」

「帰りたくない理由？」

そして、王室親衛隊であるザステインが敬語を使って連れ戻そうとするララ。

「私、ここにいるトシアキのことが好きなの！ 結婚もトシアキ以外とはしないから！！」

今までずっと無言だった俺を余所にララとザステインで話を進めている。

そろそろ口を挟んでも問題ないだろう。

「ララ。 お前って、お姫様だったのか？」

「あれ？ 言ってなかったけ？ ララ・サタリン・デビルーク。
一応、第一王女なんだよ」

それで黒服の男たちや王室親衛隊隊長が来るはずだ。

「やっべ、俺、自分から喧嘩売っちゃったよ、デビルーク星の王女を誘拐したと思われても仕方ないかも」

「なるほど、そういうことですかララ様。 トシアキとやら、お前がララ様に相応しい男かどうか見極めてやる」

どうやら俺の言葉は聞えていなかったようで、喧嘩を売ったや誘拐

などの危ない単語は聞えて無かったようだ。

しかし、お姫様であるララの結婚相手に相応しいかどうかって、また姫様かよ。

「見極めてやる？ 貴様、何様のつもりだ」

「っ!？」

俺自身も王族として何年も生きてきたため、他国の姫様とのお見合いなど何度も経験している。

だが、俺自身を見下して上から目線で話す相手には正直、腹が立つ。

当時、7歳の俺が18歳の姫様とお見合いさせられたが、子どもを相手にしているような態度に俺が腹を立て、その国と全面戦争になったことすらある。

「俺を見極めるだど？ たかだか、護衛風情が偉そうなこと言ってるじゃねえよ!」

礼には礼を持って接するが、失礼無礼には勿論、失礼無礼で返すのが俺だ。

「覚悟は出来てるんだろうな？ デビルーク星王室親衛隊隊長ザステイン、お前、死んだぜ?」

「なに?」

ザステインが警戒して腰の剣に手を伸ばそうとした瞬間に俺は既に

彼の後ろへと回りこんでいた。

「くっ!？」

とっさに反応して剣で防いだようだが、俺の攻撃はまだまだ続く。

「ほらほら、守ってばかりで見極められんのか？」

「ば、馬鹿な！ このイマジンソードに対抗できる物質があるのか!？」

ザステインがなにやら驚いているようだが、俺自身が使っているのは氷の剣だ。

傍の川に流れている水を凍らせて剣にしているだけである。

もっとも、『精霊』の全面支援があるので折れないし、俺自身のスピードも上がっている。

「………興醒めだ」

俺は剣になっていた氷の『精霊』にお礼を言って水に戻し、ザステインに背を向けて歩き出す。

見極めると言いつつ、大した実力もなかったザステインに呆れて俺は家に帰ることにした。

「帰って王に伝えろ、見極めるなら自分で来やがれってな」

啞然とするザステインを放って、俺は美柑が待つ自分の家へ帰宅す

る。

しかし、この時の俺の言葉を聞いたラウが自分との結婚を決めてくれたのだと大喜びし、俺の後ろを付いてきているのに気付いたのが家の前であった。

くおまけく

「お邪魔しました」

それだけ言ってトシ兄いの部屋の扉を閉めた私は階段をトントンと降りる。

「トシ兄い、彼女いたんだ・・・・・・・・」

全くそんなことに気付けなかった私は妹としてダメなんだろうかと考える。

せっかく一緒に食べようと思って用意した朝ごはんが台無しだ。

「早く食べて学校に行こう」

学校に行っている間は家のことは忘れていられるから早く学校に行こうと思う。

自分の分だけを食べ終えて、リビングにおいてあったランドセルを背負う。

「あつ、美柑・・・・・・・・」

そこへ制服を着たトシ兄いが降りてきた。

だけど、トシ兄いに彼女がいたことに驚いて機嫌が悪かった私は返事もせずに玄関に向かう。

「実はあいつは宇宙人でな、追手に追われてるっていうから俺の部屋に」

「宇宙人？ そんなのいるわけないじゃん」

嘘をつくならもっとマシな嘘について欲しい。

けど、追手に追われている人を匿う優しさはトシ兄いだと、私は変なところで感心してしまった。

いや、宇宙人は信じてないんだけど。

「いや、けどな美柑――」

「私、もう学校行くから」

色々と頭の中で考えている内に靴を履き終えた私は、トシ兄いの言葉を最後まで聞かずに家から出ていった。

登校しながら自分の行動を振りかえり、なんでトシ兄いに彼女がいて私の機嫌が悪くなったのか考えながら今日一日を過ごしたのだった。

第三話

「今度は一体、何のようだ？」

俺は今、家の近くにある公園の茂みの奥にいる。

なぜ、こんなところにいるのかというと、つい先ほど学校帰りにザステインに声を掛けられたからだ。

「トシアキ殿。あなたにララ様のお父上、デビルーク王からのメッセージを持ってきました」

最初に会った時の攻撃的な態度とは違い、礼を持って接触してきたので俺は言われたままに付いてきたのだ。

「ララの父親？」

そして、付いてきてたどり着いたのが公園の茂みの奥だったというわけである。

「そう。 銀河を統一し、頂点にたった偉大なお方です」

「偉大な方ねえ……俺の言葉を伝えてくれたのか？」

昨日、ザステインに見極めると言われてカチンと頭にきた俺はつい自分で来いと言ってしまったのだ。

本当に来てしまったら来てしまったで色々と面倒なことになりそうなのだが、どうやらメッセージだけで済んだらしい。

「王もお忙しい方です。 あなたの言葉を伝えたところ、このメッセージを頂きました」

ザステインがそう言いながら、宝石が付いた不気味な置物を取り出す。

【よお、結城トシアキ。 ザステインから話は聞いたぜ】

そして、宝石の部分から声が聞えてくる。

どうやら、この世界で言う録音できる機械のようなものみたいだ。

【俺は色々と忙しくてそっちには行けねえから、とりあえずテメエをララの婚約者候補の一人として認めてやる】

顔を見えてない相手に好き勝手に言われて段々と不機嫌になってきた俺だが、録音した声なので文句を言っても仕方ない。

【地球人は貧弱らしいが、あのララが初めて好意を抱いたほどの男だ】

ララが初めて好意を抱いたと言っているが、お前が箱入り娘に育てた所為じゃないのか、という言葉は心の中だけで呟いておく。

【俺はお前の器に期待している。 つと、こんな上からものを言われるのが嫌いだったな】

どうやら俺のことをある程度ザステインが話しているらしい。

【いずれそっちに行くこともあるだろう。その時に話をするでしょうか】

その言葉を最後に今まで光っていた宝石が光を失っていく。

どうやら、俺はララの婚約者候補になったようだ。

「・・・・・・・・」

あの変な言い方をしなければこんなことにはならなかっただろうに、何やってるんだ、俺。

「以上で王からのメッセージは終了です」

ザステインはそう言って不気味な置物を懷にしまう。

それから俺の方へ向き直り静かに頭を下げてきた。

「先日は大変、失礼をしました。出過ぎた真似をしてしまい申し訳ありません」

さすがに跪くようなことはしなかったが、誠意を持って謝罪してくれたザステインに俺は笑みを浮かべる。

「わかってくれればそれでいい。とりあえず、メッセージは受け取った」

「それと先ほどは言ってませんでした、ララ様は今日からあなたの家でお世話になるとのことです」

浮かべていた笑みを一瞬で崩し、俺は眉を顰めてザステインの話に耳を傾ける。

ちなみに昨日は嬉しそうな顔で付いてきたララをキッチンと追い返したはずなのだが。

「昨日は地球の大気圏内にある船で過ごしましたが、王のメッセージを聞いて少し勘違いをされたようで」

「……勘違い？」

話しているザステインもララの行動に疑問を抱いているのか、呆れたような、諦めたような顔で話す。

「ララ様自身はお父上にトシアキ殿との結婚を認めて貰ったという風に言葉を受け取ったようでして……」

「なん、だと!？」

今のメッセージをどのように聞いたら俺と結婚することになる。

数いる中の一人として認められただけではないか。

「おそらく、どれだけの数の婚約者がいようとララ様自身が好きなのはトシアキ殿ただ一人なのでそのように解釈したのだと考えられます」

まるで俺の心の中を読んだかのように色々と説明してくれるザステイン。

だが、俺にとっては面倒事が増えたことには変わらない。

「では、私はこれで失礼します」

空気を読んでくれたのか、黙ったままの俺に一礼してその場から去ったザステイン。

取り残された形になった俺は頭を抱えてこれからのことに思いを馳せた。

いつまでもあの場所で悩んでいても意味はないので、俺は自宅へと帰ってきた。

「・・・・・・・・」

と言っても、玄関のドアになかなか行くことが出来ず、数分間立ち尽くしているのだが。

「はぁ、ララと一緒に住むだなんて・・・・・・・・父親と母親の顔すら知らないのに、勝手にそんなことになっても大丈夫なのか」

色々と考えを巡らしていると、上空から人の気配が近づいてくる。

この世界に人が個人で飛べる魔法や機械がないはずなので、おそらく

くララであらう。

「…………お前、今日からここに住むらしいな」

「きゃっ!? ビックリした。 トシアキ、私のことに気付いてたんだ」

ララに背を向けたまま声を出したところ、ララもまさか俺が気付いているとは思って無かったのか、驚きながらも俺の首に腕を絡めてくる。

「離れてたのに私のことに気付いてくれるなんて、なんか嬉しいな」それは色々な世界を渡り歩いているときに自分の周囲を警戒していないと死ぬようなことが何度もあったため、慣れていただけなのだが。

「いいから離れろ。 俺は今、どうやって家に入ろうかと考えているんだ」

この状態を美柑に見られたら昨日の朝同様、冷たい目で見られ、不機嫌な態度で接されるに違いない。

「? 普通に入ればいいじゃん。 ここトシアキの家でしょ?」

そうなのだが、色々と問題があるんだと心の中で呟いていると、ララが勝手に玄関を開けてしまった。

「おっじゃましーす!」

「あつ、おい！」

ララの声が聞えたのか、リビングの方からエプロンを付けた美柑がお玉を持って出てきた。

「はい？ あれ、トシ兄いの彼女・・・・・・・・」

「彼女じゃないよ、婚約者だよ」

美柑の言葉に訂正を入れるララ。

というか、婚約者というのも俺自身は了承した覚えがないのだが。

「こ、こん、やくしゃ？」

ララの訂正した言葉を真に受けたのか、美柑は持っていたお玉を落とし、啞然と立ち尽くしている。

「いや、だからなー」

「あと、私も今日からここに住むからよろしくね？」

立ち尽くしていた美柑に事情を説明しようとしたところ、ララが俺の言葉を遮ってそう言い放つ。

というか、先に事情を説明すればいいものの、どうして結論から話してしまうんだララ。

「ここに住む・・・・・・・・婚約者・・・・・・・・同棲っ!？」

先に結論を話してしまったためか、美柑の勘違いが激しく斜め上の方へ行ってる気がしてきた。

「それには理由が――」

「ダメだよ！ トシ兄い、エッチな本も持っていないのに!!」

キッチンと理由を説明しようとした俺の言葉を遮って今度は美柑が言い放った。

しかし何故美柑が、俺が所有していないことを把握しているのか。

というより、どこからそんな話に切り替わったんだ。

「えっ？ トシアキ、エッチな本持っていないの？」

そしてララよ、そんなところに反応しないでくれ。

俺はなんて答えればいいんだ。

「・・・・・・・・とりあえず落ち着け二人とも」

これ以上二人に会話させていたら色々な意味で危ない気がしたので、二人を黙らせたあとでリビングへと連行していった。

美柑が途中で落としたお玉もちゃんと拾っておいた。

その時に漂ってきた匂いで今日はしじみの味噌汁なのかと、どうでもいいことを思い浮かべてしまった。

「おいしー！ このスープ」

「しじみの味噌汁だよ」

あれからリビングで美柑にキッチンと事情を説明した。

横でウラが余計なことを言おうとするたびに口を塞ぐのに苦労はしたが。

「地球の食べ物って美味しいんだね、美柑！」

「ちっちちっ、甘いよウラさん。 作る人の腕ってヤツ？ でも、トシ兄いの方が美味しく作るんだけどね」

一応、ウラが宇宙人だということも伝え、昨日の出来事も理解はしてもらった。

もっとも俺のベッドで、裸で寝ていたことについてはかなりしつこく聞かれたが、何もなかったことを伝えたとホッと安心した様子を見せていた。

「はぁ・・・」

それから一緒に住むことといつの間にか婚約者候補になっていたこ

とも説明したため、美柑もララに普通に接している。

事情を説明する前までは敵に噛みつくような勢いだったので少し不安だったが、今のところ問題はなさそうだ。

「ね、ねえ、トシ兄い」

ため息を吐きながら色々と考えていると、食器を片づけていた美柑が声を掛けてきた。

しかし、どこか緊張した様子で、それでいて不安な様子を隠しているようにもみえる。

「ん?」

「ララさんとは、その……け、結婚、するの?」

なるほど、美柑は宇宙人という規格外な人と兄が結婚するのに不安を抱いているのだろう。

「今のところ、考えてはいない。まあ、これからの付き合いで変わるかもしれないが」

そう、今のところは結婚する気など全くないが、この世に絶対はない。

ゲンジが迎えに来なければ俺は一生ここにいないければならないのだ。

付き合い、好きになり、離れたくなくなればゲンジが迎えに来て一緒に行かない可能性もある。

「そ、そっか。 そうなんだ」

俺の返答に納得いったのか、安心した様子で食器の片付けに戻る。

ちなみに先ほどまで隣にいたララは晩御飯を食べてからどこかへ行ってしまった。

「トシアキー」

ララの行方を考えていると、その本人がタオルを持って走ってきた。

「ご飯も食べたことだし、一緒にお風呂に入ろうよ」

「はぁ？ 男の俺と入……」

俺の言葉は食器が割れて音でかき消されてしまった。

どうやら美柑が洗っていた食器を割ってしまったらしい。

「ご、ごめん、トシ兄い。 すぐ片付けるから……」

「片付けは俺がやる。 美柑はララと一緒に風呂に入ってやれ」

今まで美柑に任せっぱなしだったし、今日くらいは良いだろう。

割ってしまった食器で怪我をする可能性もあるしな。

「で、でも……」

どうやら、食器を割ってしまったことにかなり落ち込んでいるようだ。

まだ小学生なのにしっかりしている妹だ。

「気にするな。今日はいろんなことがあったからな、風呂に入っ
てゆっくり休め」

昔、妹にしていたように美柑の頭をポンツと撫でてやる。

「う、うん。　ありがと、トシ兄い」

美柑はそう言いながら少し俯いて頬を赤く染めていた。

もしかして、熱でもあったのだろうか。

「というわけだらう。　今日は美柑と入れ」

「うん、わかった。　美柑、行こ」

まだ頬が赤いままの美柑を連れて、ララは風呂場へと向かっていった。

誰もいなくなったのを確認した俺は、美柑が割ってしまった食器を片付ける。

「……………そろそろ俺も家事、するか」

今までは美柑に任せっぱなしだったが、いつまでも迷惑を掛けてられない。

別人になってしまった俺だが、もう兄妹間で特に不審がられることもないだろう。

「後は、父親と母親か・・・・・・・・」

まだ見ぬ二人のことを考え、会ったときにどう反応しようかと今から考えてしまう俺であった。

くおまけく

私が晩御飯の支度をしていると、綺麗な女の人の声が玄関から聞こえて来た。

トシ兄いが帰ってくると思って、鍵を開けていたのが原因みたいだ。

「セールスだったらどうしよう」

いつも頼りになるトシ兄がいなかったため、変な人が来てたら困るのだ。

とりあえず、武器になりそうなお玉を持って玄関に向かう。

ここで流石に包丁は持っていけない。

「はい？ あれ、トシ兄いの彼女・・・・・・・・」

玄関に行くところになっていたのは昨日、トシ兄いの部屋で裸になって寝ていた女の人がいたのだった。

「彼女じゃないよ、婚約者だよ」

トシ兄いの婚約者だと聞いた途端、身体に力が入らなくなり、持っていたお玉を落としてしまった。

「こ、こん、やくしゃ？」

なんとかそれだけを口にしてだったが、頭の中では色々な思考でいっぱいになっている。

「いや、だからな――」

「あと、私も今日からここに住むからよろしくね？」

そこに新たな情報としてトシ兄いの彼女、じゃなくて、婚約者が一緒に住むという情報が入ってくる。

『婚約者＋一緒に住む＝同棲』という式が頭に出てきたのだ。

「ここに住む・・・・・・・・婚約者・・・・・・・・同棲っ!？」

そのあとに『同棲＝一緒に寝る＝子どもが出来る』という式も出てきてしまい思わず大きな声を出してしまった。

「それには理由が――」

「ダメだよ！ トシ兄い、エッチな本も持ってないのに!!」

トシ兄い何か言ってたような気がしたが、私にとってはそれどころではない。

トシ兄いが、私のお兄ちゃんが、私だけのトシ兄いが、別の人のところへ行っちゃう。

そんな思考で頭の中が色々な考えでグチャグチャになってしまった。

結局、後で説明を受けて、一方的にそう言われたのだと聞いた。

それを聞いて安心したあと、私はトシ兄いのことが本当に好きなんだと、このときになって初めて自覚したのであった。

第四話

「よし、こんなもんか」

俺は目の前で美味しそうな匂いを漂わせている朝食を見て一人頷いた。

白いご飯、ワカメのお吸い物、ほうれん草の御浸し、焼き鮭、卵焼き、とこれくらいあればいいだろう。

「やべっ、腹減ってきた………」

作っているときには何とも思わなかったが、並べてみると早く食べたくなってきた。

「あ、れ？ トシ兄い起きてる………」

そこへ、可愛いパジャマを着た美柑が驚いた様子でこちらへやって来た。

「おう、美柑。おはよう」

「しかもご飯まで作ってるし、夢？ ひょっとして夢なの？？」

俺がせっかく早く起きて作った飯だというのに、美柑は自分が夢の中にいると思っているらしい。

そんな美柑にはいつものごとくデコピンをお見舞いしてやることにする。

「っ!？　い、痛いよ、トシ兄い……………」

「痛いってことは現実だろ？　ほら、さっさと着替えて来い」

涙目になりながら額を抑えている美柑をさっさと追い出し、俺はラウを起こしに向かうのであった。

「おい、ララ。　朝だ、起きろ」

ララの部屋になった元物置部屋にノックをする俺。

ちなみに置いていた物はこれを機会に殆どゴミ捨て場へ運び込んだ。

というか、父親や母親のだったらどうしよう。

「おい、ララ。　聞いてるか？」

一度目の声掛けで返事がなかったため、二度目の声掛けを行う俺。

しかし、やはり返事がないので俺はドアを開けてみる。

「……………いねえ」

用意していた布団の中身にララはおらず、ペケだけがそこで寝ていた。

ペケがここにいるということは、ララは服を着ていないということになる。

いくらなんでも裸で出て行っているわけではないと思いたい。

「でも、規格外の宇宙人だからなあ」

そう、ララは宇宙人なので俺には理解できないことを普通にしている可能性がある。

だが、裸で外に出ていたら今頃、騒ぎになっているはずだ。

「つていうことは……………」

あまり考えたくないのだが、一応確認することにした。

そう、俺が数時間前まで寝ていた自分の部屋のベッドだ。

ちなみにトイレは確認したが、誰もいなかった。

美柑の部屋も確認したが、いつもの癖で普通に開けてしまい、着替えていた美柑に目覚まし時計というお土産を頂いた。

「いってえ……………まさかの額にクリティカルヒットだぜ」

お土産の目覚まし時計を額に頂き、痛みで顔をしかめながらそう呟く。

まあ、ノックもせずに普通に開けてしまった俺が悪いのだが。

気を取り直して最後に自分の部屋へ向かう。

「……………マジか」

考えたくなかったが、ララは俺の枕を抱締め、幸せそうな表情で眠っていた。

かろうじて布団を来ているが、ペケがララの部屋にいたのでおそろく何も着てないだろう。

「俺だからいいものの、普通の男子高校生なら襲ってるぞ、絶対」
そう言いながら眠っているララの傍まで行き、肩を揺すりながら起こす。

「おい、ララ。 起きろ」

「んんんん？ トシアキい？」

目を開けたララは俺を確認したかと思うと、腕を取って布団に引き込もうとする。

だが、あらかじめ力を入れていた俺は布団に引き込まれることなくその場で立ち尽くす。

「早く起きろ、飯が冷めるだろ」

「むう、トシアキ意地悪だよ」

どうやら起きていたらしいララは可愛らしく頬を膨らませ、怒っていることをアピールしてくる。

「早く来いよ」

しかし俺はそんなララを構うことなく踵を返し、リビングへと向かうのであった。

飯を食い終わったあと、洗い物を美柑に任せて俺とララは通学するために一緒に歩いていった。

「お前も学校、通うんだな」

「うん！　だって、トシアキと一緒にいたかったし」

笑顔でそんなことを言うララに俺もつられて笑みを返す。

「けど、いつの間にそんな手続きしてたんだ？　試験とかあったんじゃない……」

「うん？　こないだ出かけたときにコーチョーって人をお願いしたら――」

【カワイイのでOK！】

「――って言うてくれたよ？」

俺は自分の学校の校長がどんな人物がわからなかったが、今のララ

の言葉を聞いてなんとなくわかってしまった。

「大丈夫か、彩南高校・・・・・・・・」

思わず自分が通っている高校の心配をしてしまう俺であった。

学校に到着し、職員室にララを案内した俺は自分の席へ向かう。

「おい、トシアキ。さっき一緒にいた可愛い子誰だよ!？」

その途中で、この前も声を掛けてきた猿のような顔をした奴が俺の前に立ちはだかる。

「ん？ ああ、俺ん家にホームステイしている外国人だ」

とりあえず、宇宙人と言っても信じそうにないので、ホームステイしている外国人ということにしておく。

「なあに!!？ なぜそんな大切なことを親友の俺に話してくれなかったんだ!!」

というか、お前誰だと聞きたかったが、そこは自重して苦笑いを浮かべておく。

「色々あったんだよ」

そこまで言ったときに背中に視線を感じたので、振り返ってみる。

が、特にこちらに視線を向けている者もいなかったもので、この男が騒いだ所為かと考え、今度こそ自分の席へ向かう。

「突然ですが、転校生を紹介します」

いつの間にかホームルームが始まっており、ララが教室に入っていた。

「ララ・サタリン・デビルークです。 よろしくね」

ララが自己紹介をしたあと、俺の方を見てウィンクしてきたので、俺も手を軽く振っておく。

「お、おい、転校生と結城がなんか親しげだぞ」

「くっ、結城の奴、すでに転校生まで毒牙に」

周りの男子生徒がうるさくなってきたので、とりあえず睨みつけて威嚇しておく。

「一時間目は体育か。 西連寺君、君は学級委員だったよね？ 更衣室へ連れて行ってあげなさい」

「あ、はい。 わかりました」

クラスの担任はそれだけ言って外へ出て行ってしまった。

それに合わせてクラスの女子たちも着替えの為に次々と教室から出ていく。

「ねっ、トシアキ。 体育ってなにをするの？」

その波に逆らって俺のもとまでやってきたウラだが、着替える場所が違うので体育の内容だけ簡単に話す。

「お前は西連寺と一緒に行って着替えて来い。ちなみに体育は身体を動かす授業だ」

「身体を動かす授業・・・・・・・・なんか楽しそうだね」

なかなか俺のもとから離れそうにないので、少し離れた位置で立ち尽くしている西連寺に声を掛けることにする。

「西連寺、頼んでいいか？」

「えっ、あ、うん。デビルークさん、行きましょ？」

俺が声を掛けたことに驚いたのか、慌てた様子でウラを連れて行ってくれた。

「体育か、めんどくせえ・・・・・・・・」

身体を動かすのは好きなのだが、授業で行うと自由に動かせないのが面倒なのだ。

これでは『精霊』たちと遊ぶことすらできない。

「・・・・・・・・まあ、仕方ねえな」

いつの間にか教室には俺しか残っていなかったので、体操服に着替えて教室に鍵を掛け、グラウンドに向かった。

「よし、そのまま行けえ！」

「抜かれるな！　ディフェンスなんとかしろ！」

体育の授業で男子はサッカー、女子は短距離走を行うようであった。俺は自分のチームのコートでゴールポストに寄りかかって試合を眺めていた。

「ふああ、眠い。　飯を作るために早く起きたのが原因か」

「おい、トシアキ。　もうちょっとやる気出せよ」

ゴールキーパー役の猿顔の自称俺の親友がそう言って話しかけてくる。

「うるさい、俺は眠いんだ。　先生に気付かれないようにディフェンスをしているフリをしているんだ」

「フリじゃなくて、ちゃんと動けよ……」

呆れた表情を見せる自称親友だが、ボールがこっちに迫ってきているので俺のことは気にしないことにしたらしい。

「猿山！　絶対に入れられるなよ！」

「おう、まかせとけ！！」

抜かれてしまったディフェンスがキーパー役の自称親友に声を掛ける。

というか、自称俺の親友、お前の名前は猿山だったのか。

「猿山、俺に任せろ」

ようやくこの男の名前がわかり、少しだけやる気が出た俺はゴールポストから離れてボールを持つクラスメイトを見据える。

「お、おい、トシアキ！ それじゃ、俺が見えないだろ！？」

猿山の正面に立った俺は素早く動いて、ボールを奪うことに成功する。

「あ、あれ？」

「えっ？ マジ？」

ボールを今までキープしていた敵チームのクラスメイトはいつの間にかボールが無くなっていることに気が付く。

猿山も俺の足の動きが見えなかったようで、ボールの位置が変わっていることに驚いているようだ。

「まあ、ズルしてんだけどな」

風の『精霊』たちに力を借りて、移動速度を上げた俺はそのまま相手チームのゴールへ向かう。

「させるか！」

「結城、覚悟!!」

何か俺に恨みでもあるのか、俺自身を狙ったスライディングをジャンプでかわしてそのまま付き進む。

「なっ!？」

「と、跳んだ!？」

敵も味方も俺がこんなに動けることに予想外だったようで、誰も近づいてこようとはしない。

「ほら、シュートだ!」

俺が蹴ったボールはゴールの右側へと吸い込まれていく。

キーパーも反応したが手が届かず、ボールはゴールネットへと突き刺さった。

それと同時に授業終了のチャイムが鳴り、結果的に俺たちのチームが勝った。

「ふむ、こんなもんか」

『精霊』の力で決めたゴールなので特に喜ぶこともなく、力を貸してくれた彼女たちにお礼を言いながら校舎へ向かって歩く。

ちなみに俺が見える『精霊』たちは皆、女の子の姿だ。

他の魔法使いによると、気配を感じるだけで姿を見たことは無いら

しいので、何とも言えないが。

「トシアキ！　よくやった！　これで俺たちのジュースは確保できたぜ！」

猿山が嬉しそうに俺の頭をガシガシと乱暴に撫でまわしてくる。

「やめろって！　って、ジュースだと？」

「ああ、このサッカーで負けたチームが勝ったチームに飲み物を奢ることになってたんだよ」

俺はそんな話聞いてない。

つまり、気まぐれでなにもせず、あのままシュートされていたら俺がジュースを買わなければならなかったのか。

「まあ、勝ったからいいか」

「そうだよな！　さすがはトシアキだぜ！」

タダでジュースを飲めることがそんなに嬉しいのか、猿山はご機嫌なまま校舎へ戻っていった。

そのあと、相手チームのキーパー役をしていた奴からカフェオレを貰い、それを飲みながら午前中を過ごしたのであった。

くおまけく

今日、登校しているときに久しぶりに結城君の姿を見つけた。

この前、日直の仕事を一緒にしたときに思わずあんなことを言ってしまったから顔を合わすのが恥ずかしく感じていたのだ。

「あの子、誰だろう……」

結城君の隣に桃色の綺麗な髪をした女の子が笑顔で歩いていた。

気になったけど、恥ずかしさもあって話しかけることも出来ず、そのまま教室へたどり着く。

「おい、トシアキ。さっき一緒にいた可愛い子誰だよ!？」

教室へ入っていきなり、猿山君の声が聞えて来た。

どうやら結城君にさっきの女の子のことを聞いているようだ。

「ん？ ああ、俺ん家にホームステイしている外国人だ」

留学生がいたなんて知らなかった。

ということは今、結城君と一緒に家に住んでいる。

なんだかそう考えると胸の中がモヤモヤしてきたのでとりあえずもつと話を聞くために結城君の方を見つめる。

「？」

すると、私の視線に気づいたのか結城君が振り返った。

私は慌てて視線を外し、見ていなかった風を装うる。

そのあと、転校生として先ほどの女の子が教室に入ってきた。

自己紹介をした後、結城君に合図を送っていたのを見て、私の胸がチクリと痛む。

「なんだろう、この気持ち」

始めて感じたこの痛みに不安を覚えながら、体育の授業を受ける。

私たち女子は短距離走なので、他の人がタイムを計っていると自然と暇な時間が出来てしまう。

「・・・・・・・・」

その時にチラリと男子のサッカーを見てみると、結城君が自分のゴールから相手のゴールへ向かって行くところだった。

「すごい・・・・・・・・」

思わずそう声に出してしまった私は周りに聞かれていないか不安になり周囲を窺う。

だけど、皆は転校生のタイムに驚いていて私の方を見ている人はいなかった。

まさか一人で相手ゴールまで向かって行くとは思わなかったのだ。

中学時代から結城君はあまり人と話さず、人を寄せ付けないような感じだった。

けれど勉強もスポーツも他の人以上に出できてカッコ良かったし、教室のお花の水を毎日換える優しいところもあり、そんな結城君を私は――。

「西連寺」

「は、はいっ!？」

そこまで考えていると、テニス部の顧問の佐清先生に声を掛けられた。

授業もいつの間にか終わっており、私は何を考えてたんだろ。

「今日の昼休みに部室まで来てくれるか？」

「は、はい。わかりました」

テニス部のことで話があるようなので、そう返事をして校舎へ向かう。

そのときには先ほどまで考えていたことは頭の中から消え去っていた。

第五話

昼休みになった後、俺は飯を買うために席を立つ。

「トシアキ！　一緒にお弁当食べよ？」

「悪いな、俺は買いにいかなくちゃいけないんだ」

そう、朝食を作った時に弁当も一緒に作ったのだが、材料がなかったためララと美柑の分しか作れなかったのだ。

朝食をもう少し減らせば何とかなかったかもしれないが、終わったことなので言っても仕方がない。

「と、いうわけで先に食べてろ」

「あつ、トシアキ」

ララを放って、俺は自分の昼食確保のため走り出す。

どこの学校でも同じだと思うが、購買の人気商品は急がないと買えないのだ。

校舎から飛び降りてショートカットしてやろうかと思い、開いている窓を見つけたとき、聞きなれた声が聞えた気がした。

「ん？」

走っているときに誰かが俺に声を掛けたのかと考えたが、新入生の

俺が他学年に知り合いなどいるわけがない。

同学年だとしても、今のところ同じクラスの奴しか知らないのが現状だ。

「気のせいかな？」

そう思い、傍に飛んでいた『精霊』に尋ねてみると、どうやら俺の名前を呼んだ奴がいるらしい。

普通は声が空気中に伝わり、耳へ聴こえて来る。

俺の場合は少々特殊で風の『精霊』たちが声を届けてくれるのだ。

つまり、望むなら遠方の音や声も聞くことが出来る。

まあ、普段からそんなことをしていると耳がおかしくなるのでやっていないのだが。

「悪いけど、その人のところまで案内してくれるか？」

俺の言葉にニツコリと微笑んでくれた彼女は廊下を進み、階段を下っていく。

俺もそのあとを追いかけて走る。

途中で先生に注意されたが、『精霊』のスピードが速いので止まっている暇などなかった。

「ここか」

案内に従ってやって来たのは校舎の外れにある部室棟の一つであった。

「テニス部の部室か？」

ドアの傍に置いてあったテニスボールの入った籠を確認しつつ、扉を開ける。

「西連寺？」

ドアを開けるとそこには気を失っている西連寺が触手で身体中を絡められていたのだった。

「ほお、もう気付いたのか。 結城トシアキ」

そして、西連寺の傍にいた男が振り返って俺にそう話しかける。

どこかで見た顔だと思えば、この学校の体育の教師だったはずだ。

「ん？ お前、人間じゃないな」

人間は昔から自然とともに生きてきた種族だ。

俺のように直接見えなくても、『精霊』は人間に近寄ってくる。

だが、コイツにはその『精霊』が寄りついていない、というより嫌っているようにも見える。

「オレの擬態を見破るとはなかなかやるな。 はあああああ！！！」

その言葉とともに体育の教師の顔が剥がれていき、舌の長い気味が悪い生物へと変化した。

「なるほど、ララと同じで宇宙人か」

ララにも『精霊』は近づかなかったが、嫌ってもいなかった。

『精霊』に嫌われているこいつは人として——いや、生物としてダメな存在なのだろう。

「そう、佐清の姿を借りてただけさ。　まったく、人間に化けるのは神経使うぜ」

「で？　俺に何か用があったのか？」

こいつが俺を呼んだのなら今すぐ踵を返して帰るところだが、おそらく俺を呼んだのは西連寺だろう。

「結城トシアキ、ララから手を引いてもらおう」

ララから手を引くもなにも、数いる婚約者候補の一人になったただけの俺にどうしろというのだ。

候補を辞退しろということなのだろうか。

「ララと結婚し、デビルーク王の後継者となるのはこのオレ、ギ・ブリーだ」

まあ、ララが誰と結婚して誰が後継者になろうと俺は構わないのだ

が。

クラスメイトが、俺の知り合いが関わっていると話が変わってくる。

「さあ、どうするんだ？ 結城トシアキ。 オレは気が短いんだぜ？」

「そりゃあ、奇遇だな。 俺も気が短いんだ」

俺は右手をギ・ブリーに向けると小さく『風刃』と言葉を呟く。

「ぎゃああああ！？」

俺の言葉通りに動いてくれた風の『精霊』たちは刃となり、ギ・ブリーの身体を切り刻んだ。

ちなみに俺には『精霊』が見えるため刃も見えるが、『精霊』が見えない奴からすると突然、切られたように感じるだろう。

「痛い、痛い！？ 死んじゃうう！！」

「は？」

宇宙人が相手だったので遠慮せずに『魔法』を放ったのだが、思った以上のリアクションに俺は啞然としてしまう。

「腕が！！ オレの腕がああああ！？」

残念なことにギ・ブリーの右腕は完璧に切断されており、切断面か

ら緑色の液体が飛び散っている。

宇宙人の血液の色は緑色なのか、もしかしてララもそうなのだろうか、と俺は場違いなことを考えていた。

「とりあえずうるさい」

まだ騒いでいたギ・ブリーを殴って気絶させ、これからについて考える。

「……………西連寺を先に助けてやるか」

触手に絡まっていた彼女を救出して、部室のベンチに寝かしてやる。

「やっと見つけた！　こんなところにいたんだ、トシアキ！」

そこへ俺のことを探していたらしい、ララが笑顔で部室へと入ってくる。

「おう、ララ。　こいつ知り合いか？」

入ってきたララに緑色の液体の中心で倒れているギ・ブリーを指して聞いてみる。

「ギ・ブリー？　　どうしてここに……………」

どうやら顔見知りだったようで、知っているらしい。

しかし、腕が片方無くなっていることや、血溜まりの中心で倒れているところに悲鳴を上げないのは流石だと思う。

「ああ、西連寺を人質に俺に婚約者候補を辞退しろって言ってきたんだよ」

「そうなの！？ そんな奴は地球外に追放しちゃおう」

何処から取りだしたのか、ララは洋式トイレのような入れ物を出したかと思うと、その中にギ・ブリーを押しこんだ。

「・・・・・・・・とりあえず、部室を掃除して西連寺を保健室にでも運ぶか」

「そだね。 あっ、掃除はザスティンたちをお願いしとくよ」

使える者は王室親衛隊長まで使うのか、さすが銀河を統一した王の娘だ。

ララの言葉を有りがたく受け取り、俺は西連寺を保健室まで連れていった。

部室の掃除をザスティンに任せ、西連寺の付き添いをララに頼んだ俺は購買へ向かっていた。

あれから時間が経っているし、売り切れになっている可能性が高い

のだが。

「腹が減って死にそうだぜ……」

部室棟から校舎の方へ歩いていると、正門のところに見たことある姿があった。

「あれ？」

そこには赤いランドセルを背負った美柑がいて、慣れない場所に不安を抱いている様子だった。

そして、不安そうな表情で学校内へ入ろうかどうか迷っているようであった。

「美柑、どうしたんだ？」

「あっ、トシ兄い！」

俺の声を聞いて、不安そうな表情から可愛い笑顔へと変わる。

そして、俺の傍まで来た美柑はランドセルの中から弁当を取り出し、俺へと渡して来た。

「はい、これ。 トシ兄い、お弁当持ってたでしよ？」

「ああ、だけどお前の分は？」

俺に弁当を渡してしまうと美柑の分がなくなってしまう。

まだまだ成長期の美柑を差し置いて俺が食うわけにもいかない。

「私、まだ短縮期間だから今から家に帰って自分で作るよ。だからトシ兄いはこれを食べて」

言われてもこの世界に一年もいないのでわからなかったが、どうやら学校は午前中で終わっているらしい。

「なら、問題ねえな」

「えっ？」

美柑に作った弁当を二人で分けて食えば問題ないだろう。

せっかく作った弁当なのだから、やはり美柑にも食べて貰いたい。

「ほら、こっち来い」

「ちょ、ちょっと、トシ兄い」

美柑に手を引き、学校内へ連れ込んだ俺は近くにあったベンチに腰を下ろす。

「ほら、美柑も座れ」

そう言いながら、俺は自分の隣をポンポンと叩いて、美柑を座らせる。

「もう、私も早く帰ってご飯食べたいんだけど？」

「ここで食えば問題ないだろ」

俺は美柑から受け取っていた弁当の包みを開け、蓋を開ける。

我ながらなかなか美味しそうな弁当を作ったものだと思ったところで、箸が一膳しかないことに気付く。

「ここでって、お弁当を二人で食べるの？」

「ああ、俺としては美柑に弁当食べて貰いたいからな。ほら、あーん」

一膳しかなくても兄妹だし、別に構わないかという結論に達した俺は、卵焼きを美柑の口元まで運ぶ。

「えっ！？　ちょ、ちょっと、トシ兄い！？」

俺に食べさせてもらうことが恥ずかしいのか、美柑は頬を赤く染めて慌てた様子で俺を見つめる。

「早く口を開けろ、ほら」

だが、俺としては早く食べて欲しいので口を開けるように再度要求する。

「うう………あ、あーん」

観念して口を小さく開けた美柑に俺は卵焼きを食べさす。

頬を赤く染めて、目を閉じたままモグモグと卵焼きを食べている美

柑。

「どうだ？　美味いか？」

久しぶりに作った朝食は美味しいと言ってくれた美柑だが、弁当にすると冷めてしまうのでもう一度確認の意味を込めて尋ねてみる。

「う、うん。　美味しいよ、トシ兄いのお弁当」

ゴクンと飲みこんだ美柑は閉じていた目を開け、美味しいと言ってくれた。

しかし、頬が赤い理由が今一つ理解できない。

やはり兄とはいえ、外で一緒にご飯を食べるのが恥ずかしいのだろうか。

「そりゃ、よかった。　んじゃ、俺も」

美柑の返事に満足した俺は次に自分が食べるため、ご飯を箸で掴む。

「ふえっ！？　と、トシ兄い、かんせ——」

なにやら慌てて手を上下にパタパタさせている美柑だが、俺は腹が減っていたので最後まで聞かずご飯を口へ運んだ。

「……………やっぱ、飯は温かい方が美味しいな」

自分で作ったので評価も適当に付ける俺。

そんな俺の横では顔を赤くしたり、手をパタパタさせたりと慌ただしい美柑。

「ほら、次はコレだ」

そんな美柑に次はアスパラをベーコンで巻いて焼いたおかずを差し出してやる。

「トシ兄い——かんせ——私も——」

小さな声だったため所々聞えなかったが、美柑は俺の差し出したおかずをジッと見つめている。

そんな美柑に口を開いてもらうため、俺も自分の口を開いてみる。

「美柑、あーん」

「あ、あーん」

しばらくジッと見つめていた美柑だが、ようやく口を開いてくれたので、俺が箸で掴んでいたおかずを食べてもらう。

そうして、昼休みが終わるまで俺と美柑で仲良くお弁当を分けて食べたのであった。

くおまけく

一時間目の体育の時間に言われたとおり、昼休みになってすぐにテニス部の部室に来た私。

確か、佐清先生に呼ばれていたはずなのだけど。

部室に入っても誰もいないので、私はどうすればいいのか分からなかった。

「なんの用事なんだろう」

昼食もクラスメイトである里沙と未央の誘いを断って早く来たのだ。早く用事を済ませて教室で皆とご飯は食べたいと考えていると、背後に気配を感じた。

「えっ？ きゃああああ！！？」

振り返ってみるとウネウネと不気味に動く触手が私の身体に巻き付いてきたのだ。

「っ！？」

抜け出そうと手足を動かすが、腕も足も絡め取られており力が入らない。

「た、助けて、結城くん……」

声を出して助けを呼ぶときに頭に浮かんだのは両親でも先生でもなく、何故かクラスメイトの結城君だった。

そのあと、触手は首や腰にも巻き付き、声が出せなくなったまま私は気を失った。

「うっ、んん・・・・・・・・」

私が次に目覚めたときに最初に目に入ったのは綺麗な白い天井であった。

「目が覚めた？ 春菜」

「デビルークさん？」

どうやらここは保健室のようで、私はベッドで眠っていたようだ。

隣には心配そうな表情で私を見つめる転校生のデビルークさんがいる。

「もう、私のことはララでいいって！ 私たち、もう友達でしょ？」

「う、うん、ララさん・・・・・・・・」

呼び方を改めたところで、どうして私はここにいいのか気になり、ララさんに尋ねることにした。

「私、どうしてここに？」

「春菜はテニス部の部室の近くで倒れてたんだよ、貧血ってヤツだっ
って」

「貧血？」

今まで貧血になったことがないため実感がないけど、最近は色々と考え事をしていたから頭がパンクしたのかな。

「その、ララさんが私を見つけてくれたの？」

そうだとしたら転校したてのララさんに申し訳ないことをしたことになってしまう。

転校していきなりクラスメイトが倒れていたなんて驚くに決まっている。

「ううん、春菜を助けてここまで運んだのはトシアキだよ」

「えっ・・・・・・・・」

結城君の名前を聞いてトクンと心臓が跳ねた気がした。

それに運んでくれたって、テニス部の部室からここまで距離があったはずだ。

「結城くんが・・・・・・・・」

普段から他人とあまり関わらないようにしているはずの結城君が私を助けてくれたことが嬉しくて、自然と笑みが浮かんでくる。

結城君には今度会ったときにお礼を言おうと私はそう心の中で決めた。

第六話

「暑い・・・・・・・・」

登校中のララは汗をかきながらトボトボと俺の隣を歩いていた。

「なんで朝からこんなに暑いのか？ トシアキ」

「そりゃ、夏だからな」

この世界にもキチンと四季があったようで、今は四季の中で一番暑い夏であった。

もつとも、俺自身はそんなに暑さを感じていない。

風の『精霊』たちが俺の周りをクルクルと飛んでくれているので心地いい風が終始吹いている状態なのだ。

「ちなみに午後からもっと暑くなるんだけどな」

「デビルークにはナツなんてないもん・・・・・・・・」

確かに俺が今まで行ったことある世界でも四季があるのは珍しいほうだった。

他の星にはもっと厳しい環境で生活している人たちがいるのだろうか。

「もう今日はずっと裸のまままで過ごそうかな」

暑さで頭がおかしくなったのか、ララがとんでもないことを言い始めた。

「ララがそうしたいなら別に止めはしないが、襲われてもしらねえぞ」

「冗談だよ、いくら私でも知らない人に裸を見せたりしないって」
笑顔でそう言ったララだが、俺と初めて会ったときは全裸だったよ
うな気がする。

それに宇宙人の考えなんて俺にはわからないので、もしかしたら全裸で過ごしている人もいるかもしれない。

「それにしても、なんでトシアキは涼しい顔してられるの？」

冗談を言った後、ララは俺の表情に変化がないことや、汗が出ていないことに気付いたのか、そう尋ねてくる。

「俺は別に暑くないからな」

「ええ！？ そんなのウソだよ。こんなに暑いのに……」

驚いた様子を見せたララはそう言って俺の身体に触れてくる。

「あれ？ トシアキの周り、なんだか涼しい」

俺と身体を引っ付けたことによって『精霊』たちが俺とララの周囲を回り出したのだ。

「あはっ、トシアキに引っ付いてると涼しいし、嬉しいし、いいかも」

「俺は歩きにくいし、暑苦しいから嫌だ」

そう言ってララを振りほどこうとするが、右手にギュッと抱き付いたララは離れようとはしない。

その時、電柱の後ろに怪しい人物がいるのを見つけた。

怪しい人物はこの暑いのに真っ黒なフード付きの服を着て、サングラスとマスクを装着しており、デジカメを持ってこちらの様子を窺っていたのだ。

「おい、お前。 なにしてんだ？」

カメラは俺に向いていたのかララに向いていたのかわからなかったが、友好的ではないと判断し、俺は怒気を含ませて声を掛ける。

「っ!？」

しかし、怪しい人物はすぐさま踵を返し、俺たちに背を向けて走り去っていった。

俺も追いかけようとしたが、ララに腕をしっかりと掴まれていたので走ることが出来ず、結局見失う形になってしまった。

学校に着いて授業を受けているときに、再びその怪しい人物が現れた。

「今度は逃がすか！」

俺の言葉に驚いたのか、怪しい人物は素早く反転して廊下を走り去る。

だが、先ほどとは違い自由になった俺は授業中であるにも関わらず、席を立て廊下に飛び出し、奴の背中を追いかけた。

途中、授業終了のチャイムが鳴ったため、他の生徒も出てきたのでなかなか追いつけなかった。

『魔法』でスピードが上がった俺はようやく階段付近で奴に追いつき始めた。

「あっ!？」

ところが、階段を上っていった奴が上から下りて来ていた一般生徒を吐き落としたのだ。

「流石に無視は出来ないな」

落ちて来る一般生徒を風の『精霊』に力を借りて受け止め、時間をロスした俺も階段を上って追いかける。

「チッ、見失ったか。仕方ない、また『精霊』に力を借りて――」

「ふっふっふっ、全く、素晴らしい女だ」

この前の西連寺を探した時のように『精霊』に力を借りようと考え

ていた俺の耳に怪しげな男の声が聴こえてきた。

「見てるだけで胸が高鳴ってくるぜ」

どうやら今朝の登校時に撮っていたのは俺ではなく、ララの方であつたらしい。

俺自身じゃなければ別に構わないか、と考えたのだが、先ほどから聴こえてくる言葉を聞いていると放っておくわけにはいかないようだ。

「趣味は人それぞれだが、キチンと相手の許可は取ろうな！」

そう言いながら、声が聴こえてきた部屋の扉を開けた俺。

予想では隠し撮りした写真を眺めながら不穏な言葉発している男がいると思っていたのだが。

「へっ？」

そこにいたのは派手な服を着て、ニヤニヤと笑みを浮かべながらエロ本を読んでいるおじさんであった。

「・・・・・・・・」

しかもおじさんが座っている椅子は見るからに立派な造りで、机には校長というネームプレートが見える。

「イヤン」

「イヤンじゃねえよ!!」

ドアを開けた俺に対する言葉が思ってもいなかった発言だったので、つい俺も突っ込みを入れてドアを閉めてしまった。

というか、アレがウチの学校の校長なのか。

「やっぱ、心配した通りだったぜ……」

ララの転校を許可した理由もそうだが、本当にあんなのが校長でいいのだろうか。

「もう、仕方ない。屋上にでも行くか」

『精霊』に尋ねてもよかったが、怪しい人物を見失い、走ったり怒鳴ったりで疲れた俺はもう怪しい男を探すのは諦めて後の授業をサボることにした。

校長があんな奴なら大抵のことをしても退学や停学にはならないだろう。

「さすがセンパイ！ 女子更衣室だけじゃなく水中にカメラを仕掛けるあたりがマニアックだぜ！」

屋上へ出る扉を俺が開くと同時にそんな複数の声が聴こえてきた。

俺が屋上へ出てみると先ほどまで追いかけていた怪しい男が他の男子生徒たちの先頭に立って、何やら言っているようだった。

「お前らも欲しけりゃ売ってやるぜ？ 何なら——」

「へえ、何を売ってくれるって？」

今まで散々振り回された相手を見つけて俺は嬉しくなり、相手の言葉を遮って話しに入っていた。

「ん？ 何だ、お前は」

「あっ！？ 弄光先輩！ ソイツ、一年の結城です」

怪しい男の正体は弄光という先輩だったらしい。

俺のことを一年と呼び、弄光のことを先輩と呼んだ男子生徒は二年なのだろう。

つまり弄光は必然的に三年になり、年齢は俺と同じというわけだ。

「なるほど、お前があの結城か」

そして、一年として彩南高校に入っただけの俺が何故か二年と三年に顔が広まっているようだった。

「『あの』が『どの』かはわからないが、俺は結城だが？」

俺が結城であると言った途端、集まっていた二年の男子生徒たちがザワザワと騒ぎ出した。

「あいつが、最近入った――」

「一年のくせに態度が――」

「女子からの人気が――」

小さい声で殆ど聞き取れなかったが、俺の頭の中では振り回してくれた弄光をどう処理するかを考えていて特に気にはしなかった。

「ふっ、お前もこの写真が欲しくて俺を追ってたんだろ？」

そう言って懷から数枚の写真を取りだす弄光。

そこには女子更衣室の盗撮写真や階段下から撮影したであろう写真があった。

「いや、俺はお前にO・H A・N A・S H Iをしに来たんだが？」

以前別の世界で出会い、世話になった白い悪魔のように感情を込めて言ってみた。

「お話？ ふん、なんとわれようと安くはしないぞ」

どうやら俺の感情は弄光には伝わらなかったらしい。

こうなったら実力行使をするかと考え、弄光に近づいていく。

「一枚三千円で………な、なにをっ!？」

ごちゃごちゃとうるさい弄光を掴み上げた俺はそのまま女子が楽しそうに遊んでいるプールへ投げ飛ばしてやった。

「そんなに好きなら直接見て来い！」

「う、うわああああ!!?」

「「セ、センパイッ!?」」

投げ飛ばした後は『精霊』に乱暴でも構わないので死なないように着地させてくれと頼んだ。

そして、二年の男子生徒がいる屋上でサボる気にはなれなかった俺はその場を立ち去る。

その後、弄光の盗撮事件が発覚して二週間の停学になったらしいが、俺は特に気にはしなかった。

俺は非常に困っている。

何を困っているかというと、ララが俺の部屋で荷物の準備をしているからだ。

「.....」

明日から臨海学校という行事があり、その準備を何故だかララが俺の部屋でしているのだ。

別に準備するのは悪くないが、こんなに散らかして誰が片付けるというのだ。

「まあ、俺か美柑だよな」

ララはなんでもかんでも持って行こうとしているらしく、旅行鞆が既に膨れあがっているのに、まだ入れようと頑張っている。

それと大変言い辛いのだが、明日辺りに台風が直撃しそうなのだ。そんなことになれば臨海学校は延期か中止になる。

「俺はどっちでもいいんだけどな……」

俺は別にそんな行事あってもなくても構わないのだが、ララはあつて欲しいのだろう。

しかし、こんなに楽しみにしているララにそんなことを言えるわけがない。

まあ、方法は一応考えてはいるのだが。

「ララさん、楽しみにしているところ悪いんだけど、中止になるかもよ？ 臨海学校」

俺の代わりに大好きなアイスを食べながらそう言ったのは美柑であった。

というか美柑よ、暑いのはわかるが男の俺の前でそんな格好はやめろ。

美柑は膝上までしかないズボンとブカブカのランニングシャツを着ていたのだ。

「へっ？」

まさかの中止発言に素っ頓狂な声を出したララ。

俺は最初から知っていたので特に驚きはしなかったが。

「台風が近づいてるんだって。しかも、明日辺り直撃って言ってるよ？」

俺の部屋からリビングに移動した三人でテレビの前へ集まる。

そこでは丁度天気予報が映し出されており、台風が直撃すると言っていた。

「えー！？　そんなのヤダよ！　せつかく色々準備したのに」

「私としては中止の方がいいかな、トシ兄いが家にいるし」

美柑の眩きはララの大声でかき消され、ララには聴こえていなかったようだが、近くにいた俺には聴こえていた。

そんな美柑には悪いがあんなに楽しみにしているララの為に俺は『魔法』を使っているのだった。

「ってなわけで、頼むな」

俺が事前に台風が来るとわかっていたのも『精霊』から聞いていたからだ。

そしてそのときからお願ひして、当日までに台風を日本から逸らしてもらおうように言っていたのだ。

今、言ったのも最終確認であり、このまま朝になれば台風は日本を逸れていることだろう。

「心配するな、ララ。寝て起きたら行けるようになってるから」

「ホントに？」

美柑の中止発言が効いたのか、目に涙を浮かべ俺にそう尋ねてくるララ。

そんなララの表情に一瞬ドキリとしたが、俺は顔には出さず頷いてやる。

「ああ、大丈夫だ。俺を信じろ」

俺はララの目を見つめて、真剣な表情でそう言ってやる。

もっとも、絶対に台風が逸れるという自信があったから言えたのだ。

「……………うん、わかった。トシアキのこと信じる」

そして、俺の言葉を信じてくれたのか、涙を拭き取ってしっかり頷いたララ。

「それじゃあ、風呂に入って早く寝ろ。明日は早いんだから」

「うん、わかった！ それじゃ、行ってくるね！」

元気になったララは俺の言った通り、明日に備えて早く風呂に入
て、寝るようだ。

まだ昼間なのだが、ララには丁度いいだろう。

どうせ、興奮して早く寝られないだろうから。

「・・・・・・・・いいの？ トシ兄い。 あんなこと言って」

アイスを食べ終えた美柑はそう言いながら俺を見つめてくる。

どうやら俺が根拠のないことを言ったのが気になっているらしい。

「いいんだよ。 どうせ台風は逸れる、美柑には悪いけどな」

「私？」

「さっき言ってたろ？ しばらく一人になるけど泣くなよ」

俺の言葉を聞いてキョトンとしていた表情が、俺に聴こえていたと
いう驚きに変わる。

そして恥ずかしくなってきたのか、顔を赤らめてそっぽを向く。

「な、泣かないよ、トシ兄いのバカ」

そんな様子を見せる美柑が可愛く思えてきたので、ポンポンと頭を撫でて笑う。

「寂しくないように今日はなんでも一つだけ、望みを叶えてやるよ」
ララにばかりでは流石にズルいので、美柑も一つ願いを叶えてやることにする。

もつとも、お金が欲しいとか、家が欲しいとかは流石に無理だが。

「・・・・・・・・じゃあ、一緒にお風呂に入る？」

「なん、だどっ!？」

まさかの願い事に俺は驚いてしまった。

確かにまだ小学生な美柑だが、そろそろ男という存在が気になり始め、たとえば兄でも一緒に行動したく無くなる歳だと思っていたのだが。

「・・・・・・・・ダメ？」

顔を赤くしながらも俺から視線を外さず、答えが返ってくるのを待つ美柑。

「わかったよ。　けど、美柑もそろそろ兄から卒業しような？」

「・・・・・・・・うん、わかった」

俺は美柑の願いを叶えてやるために今日は一緒に風呂に入ることになった。

ちなみに、裸で入ろうとしていたのでマナー違反だがタオルを付けさせた。

もちろん、俺もタオルを付けていたのは言うまでもない。

くおまけく

私はお風呂に入りながら、つい先ほどの真剣な表情をしたトシアキを思い出していた。

「トシアキ・・・・・・・・」

始めて通った学校という場所の友達と一緒に泊りが出来る臨海学校。

どうしても行きたかったけど、タイフウとかいうのに邪魔されて行けなくなるところだった。

でも、トシアキが俺を信じろって言ってくれて、その時のトシアキの表情が。

「カッコ良かったなあ・・・・・・・・」

今まで人を好きになったことがなかったので、色々と戸惑うことも

多いけど、これが人を好きになること。

ドキドキして、楽しくて、でも不安で寂しく感じるときもあるけど、初めて好きになったのがトシアキでよかった。

私は明日の臨海学校を楽しみにしながら、大好きなトシアキのことを思いお風呂から出て、明日に備えて早くベッドで横になった。

外伝（前書き）

第六話の外伝です。

外伝なので少し短めですがご了承ください。

外伝

最近は毎日、暑い日が続いている。

あまりにも暑いので私は短いズボンに大きめのランニングシャツを着ている。

汗で肌についたら気持ち悪いし。

ウチの家ではあまり冷房を付けない。

お父さんやお母さんがいれば話が変わるけど、トシ兄が人工的な風を凄く嫌うのである。

冷房が効いている部屋には入りたくないというほど嫌いなのだ。

だから私も基本的に冷房は使用せず、大好きなアイスを食べ過ぎて過ごしている。

そんな今日も大好きなアイスを食べながらリビングでテレビを見ていた。

「今頃、トシ兄いとララさんは臨海学校の準備か……………」

そう言葉にしてみると、この家で数日間は一人でいることになる実感出来た。

「お父さんは最近帰ってこないし、お母さんも相変わらず海外にいるんだろうし」

いつもはトシ兄いってくれるけど、学校の行事なので仕方がない。多分、優しいトシ兄いのことだからお願いしたら普通に家に居てくれると思うけど。

「……言えないよね、そんなこと」

トシ兄いにはトシ兄いの都合がある。

いくら私でもそこまで我儘なんて言えない。

そんなことを考えながらテレビを見てみると、天気予報で台風が近づいていると言っている。

「……伝えた方がいいよね。　ララさん、楽しみにしてたし」

つい先日から一緒に住むことになった宇宙人で自称トシ兄いの婚約者。

ララ・サタリン・デビルーク——ララさんの顔を思い浮かべる。

可愛いらしい顔にスタイルもよくて宇宙のお姫様、きっと世の中の男の人の理想に違いない。

それに比べて私は。

「なに考えてんだろ、私」

首を振って、先ほどまで考えていた思考を打ち払いトシ兄いの部屋にたどり着く。

トシ兄いの部屋ではウラさんが笑顔で鞆に荷物を積めていた。

けど、そんなにたくさん入らないと思うのだけど。

「ウラさん、楽しみにしているところ悪いんだけど、中止になるかもよ？ 臨海学校」

「へっ？」

私の言葉に素っ頓狂な声を出してこっちを見たウラさん。

トシ兄いは最初から知っていたみたいで、特に驚いた様子はなかった。

「台風が近づいてるんだって。しかも、明日辺り直撃って言うてるよ？」

それから三人でリビングへ向かい、天気予報が映し出されているテレビを見る。

「えー！？ そんなのヤダよ！ せっかく色々準備したのに」

宇宙人のウラさんにとって、学校の行事である臨海学校は余程楽しみだったようだ。

でも、私としては中止の方が嬉しい。

「私としては中止のほうがいいかな、トシ兄いが家にいるし」

思ったことが口に出てしまい、慌てて口を塞いで二人を見る。

ララさんはテレビに向かって台風を何とかしてとお願いしていて聴こえてなかったようだ。

「――頼むな」

肝心のトシ兄いを見ると、誰もいない空間に話しかけていた。

時々思うのだけど、トシ兄いのアレって変な病気とかじゃないよね。

でも、そのおかげでトシ兄いにも聴こえていなかったみたいで私はホッと胸を撫で下ろした。

「心配するな、ララ。寝て起きたら行けるようになってるから」

もし、トシ兄いに聴こえていたら本当に学校を休んで家に居てくれるだろう。

昔から私の為に学校を休んだり、家事を色々と頑張ってくれているのを知っている。

「ホントに？」

それだけにトシ兄いにはなるべく学校行事や友達との遊びを楽しんで欲しいと思う。

「ああ、大丈夫だ。俺を信じろ」

というか、トシ兄いの真剣な表情で言った言葉は私も頷いてしまうと思う。

それを見ているララさんの顔も真っ赤だし。

「……………うん、わかった。トシアキのこと信じる」

「それじゃあ、風呂に入って早く寝ろ。明日は早いんだから」
いくらなんでも寝るには早すぎると思う、まだお昼だし。

「うん、わかった！ それじゃ、行ってくるね！」

しかし、ララさんはそんなことを気にせず、トシ兄いに言われた通りに風呂場へと向かって行った。

「……………いいの？ トシ兄い。あんなこと言って」

丁度食べていたアイスを食べ終えたので、棒を咥えたままそう尋ねてみる。

いくら真剣な表情で言ったとしても台風は自然現象だ。

トシ兄い個人の力でどうにかなるとは思えない。

「いいんだよ。どうせ台風は逸れる、美柑には悪いけどな」

このまま行けば明日には直撃の台風が逸れるらしい。

でも不思議とトシ兄いがそう言うならそんな気がしてくる。

「私？」

だけど、どうして私に悪いのかわからず、首を傾げてトシ兄いを見つめる。

「さっき言ってたろ？　しばらく一人になるけど泣くなよ」

まさかさっきの言葉が聴こえていたとは思わなかったので、慌ててそっぽを向いた。

私の表情を見て臨海学校に行かないと言われないようにするために。

「な、泣かないよ、トシ兄いのバカ」

けれど、私の行動が照れ隠しだと勘違いしたのか、トシ兄いは私の頭をポンポンと撫でてくる。

頭を撫でて貰うのは恥ずかしいけど、同時に嬉しさも感じられるので私は結構気に入っていたりする。

「寂しくないように今日はなんでも一つだけ、望みを叶えてやるよ」

微笑みながら私にそう言ってくれたトシ兄い。

きっとここで、臨海学校に行かないでと言えば本当にいかないうな気がする。

なので、先ほどの仕返しも込めて前から言いたかったことを言って

みた。

「・・・・・・・・じゃあ、一緒にお風呂に入る？」

今までは兄妹でも男と女だからダメだと思っていたけれど、最近ではララさんがいる。

このままじゃ、ララさんにトシ兄いを取られそうな気がするので、私も負けるわけにはいかない。

「なん、だどっ!？」

普段は出さないような声色で驚くトシ兄い。

私がこんなことを言ったのがそんなに予想外だったのだろうか。

でも、ララさんには負けたくないのでトシ兄いから視線を逸らさない。

「・・・・・・・・ダメ？」

自分でも頬が赤くなっているのがわかる。

ララさんが来るまでは兄妹でずっと一緒にいれればいいと思っていた。

でもそれは私がトシ兄いのことを異性として好きだからそう思っていたのだ。

「わかったよ。けど、美柑もそろそろ兄から卒業しような？」

そう言えば昔、お母さんからトシ兄いと結婚してもいいと言われたけど、あれってどういうことなのかな。

兄妹じゃ結婚できないってことは、もしかして私とトシ兄いは。

「……うん、わかった」

兄からは卒業するけど、トシ兄いからは卒業出来そうにない。

だって私はトシ兄いが——結城トシアキが大好きだから。

くおまけく

ララさんが部屋に戻ったあと、トシ兄いと一緒にお風呂に入ることになった。

と言っても私がお願いしたことなのだけど。

「ト、トシ兄い、入るね？」

「ああ」

先にお風呂に入ったのはトシ兄いで、私は後から入ることになっていた。

流石と一緒に服を脱いだりすることは出来そうもなかった。

「お、おじゃまします」

ゆっくりドアを開けると湯船に浸かっているトシ兄いが私に視線を向けてくる。

「っ！？　ば、ばか！　タオルを付けろ！！」

私を見たトシ兄いが慌てた様子でそう言い放つ。

「えっ！？　でも、お風呂場でタオルを付けるのはマナー違反だつて・・・・・・・・」

小さいときに一緒に入ったときはタオルを付けなかったし、銭湯だとタオルを付けるのはマナー違反だったはずだ。

「それはタオルを湯船に浸けるのがマナー違反なんだよ！　身体に付けても問題はない」

「そ、そうなの？　あっ・・・・・・・・」

そう言われて改めて自分の身体を見降ろすと何も付けていない。

そう考えてしまうと一気に恥ずかしさが込み上げて来る。

「・・・・・・・・タオル、取ってきます」

脱衣所まで一度戻った私はタオルを身体に巻き付け、再び風呂場へ向かった。

その後の詳しいことはあまり覚えていない。

ただ、久しぶりにトシ兄と一緒に入ったお風呂は、明日から一人で留守番することの寂しさを忘れさせてくれるものだった。

第七話

『精霊』たちのおかげで台風が日本から逸れたため、無事に行われることになった臨海学校。

旅館に到着した俺たちはさっそく自分たちに宛がわれた部屋で浴衣に着替えた。

「んじゃ、さっそく風呂に行くか」

4人で1部屋のここでは俺と猿山、犬飼と雉島の4人が部屋のメンバーだった。

ちなみにウチのクラスは男子が16人、女子が16人の計32人である。

まったくどうでもいいことだとは思うが、部屋は4人ずつで計8部屋となっているのだ。

それで、同室の犬飼は着いた途端にゲームを始めたのでどうやら風呂には行かないらしい。

「ここは温泉だったよな？　楽しみだ」

「ん？　結城、お前そんなに楽しみだったのか？」

雉島がそう言って俺に話しかけてくる。

俺と話すのを最初は怖がっていたみたいだが、猿山が普通に話して

いるのを見ていて平気だと思ったらしい。

「ああ、温泉は好きだ。露天とかあったらもう最高だな」

俺としても敵意を持っていない奴に警戒するほどではないので、普通に学友として返事をする。

それに顔と名前を早く覚えてやらないといけないしな。

「おっ、わかってるなトシアキ。やっぱ覗きといえば露天だよな！」

「は？」

俺の言葉に反応したのは猿山で、興奮しているのか鼻息が荒い。

というか、そんな顔で俺に近づくなよ。

「「風呂といえば覗き！　覗きといえば露天！　だろっ！？」」

いや、『だろっ！？』とか言われても、俺は特に興味はないのだが。

というか雉島、お前まで猿山と一緒にあって何を言っているのだ。

「というわけで行くぞ！」

どういうわけか猿山と雉島に連れられて大浴場へと到着した俺。

まあ、風呂には入るつもりだったので別に構わないのだが、覗きをするために来たわけではないと言っておこう。

「はあああ……いい湯だ」

温泉に浸かりながら俺はそう呟く。

やっぱり大きい風呂、しかも温泉となれば格別だ。

「くっ、あともう少し……」

女子風呂との境界線となっている岩山を登っていた猿山がそう言っ
て一番上の岩に手を掛けていた。

大浴場に来てまだ間もないのにあそこまで登ったのか、素早い奴だ。

「仕方ない」

一緒に温泉に浸かっていた『精霊』たちをお願いして、女子風呂と
の境界線辺りに湯気を立ち上らせるようにした。

これで覗きこんでも全く何も見えないだろう。

「きゃあああ!! のぞきよ!!」

「なに？」

湯気の為、お互いが見えなくなっているはずなのに女子風呂の方が
ら叫び声が聴こえてくる。

まさか猿山たちの方が、湯気が立ち上るよりも先に顔を出したのだ
ろうか。

「こんなところに校長がいるわ!!」

と思ったが、どうやら犯人はあの校長らしい。

それより、どうやって女子風呂へ侵入したのか気になるところだ。

まさか、生徒が入る前から待っていたわけでもあるまい。

「まあ、いいか。校長がボコボコにされている音を聞けばあいつらも諦めるだろ」

案の定、ゆっくりと降りてきた猿山と雉島は静かに温泉に浸かり、二度と覗きに行くことはなかった。

その後、露天風呂を堪能した俺は上機嫌のまま部屋に戻ることが出来た。

反対に覗きに失敗した猿山と雉島はかなり落ち込んだようだったが、事が事なので慰めることはしなかった。

「さて! 今から肝試しのペアをくじ引きで決めます!」

相変わらず派手な服装で元氣よく話している我が校の校長。

しかし、顔が腫れあがっているところを見ると、先ほど女子から受けたダメージが残っているらしい。

「肝試しか・・・・・・・・・・」

高校生にもなって肝試しという行事を行うことに不思議を感じたが、一応全員参加行事なので参加することにした。

「各クラスの男女それぞれでくじを引き、同じ番号同士がペアになります！」

校長の言葉に従い、クラスの皆はくじ箱の前に並ぶ。

俺自身は相手が誰でもよかったので最後まで動かず、他のクラスメイトのペアになった奴らを眺めていた。

「おっしやああ！！　ララちゃんとペアだ！」

眺めていると猿山が嬉しそうに大声で叫んでいた。

他にも嬉しそうにしている男子が数人いる。

女子も女子で、相手の男子を見て嬉しそうに微笑んでいた。

「っと、俺の番か」

箱の底に残っていた紙を引き抜いて中身を確認する。

番号を確認した俺は未だペアがない一人の女子を探す。

「西連寺、引いた番号は5番か？」

俺は一人で周囲を見渡していた西連寺に声を掛ける。

「えっ!？ あ、うん。もしかして結城君も？」

ビクッと身体を震わせるも俺だと気付いたのか、安心した様子で引いたくじを見せてきた。

「ああ。 よろしくな」

俺も引いたくじを見せ、挨拶をしておく。

クラスメイトの女子で顔と名前が一致する相手はまだ少ないのだ。

「よ、よろしく」

そんな俺の態度が怖かったのか、オドオドした様子で俺の隣に並ぶ西連寺。

そうしていると肝試しが始まった。

俺と西連寺は5番だったので早めのスタートとなり、鳥居をくぐって歩き始めた。

「この一本道を500m進んだ所にある神社の境内がゴールだつてよ」

「.....」

唯一の明かりとなる提灯を俺が持ち、鳥居から続く一本道を歩く。

西連寺もペアなので一緒に進んでいるが、歩幅が狭くて随分と遅い。

「西連寺？」

「えっ！？　な、なに？」

振り返って声を掛けて見ると、先ほどと同じくビクツと身体を震わせる西連寺。

「・・・・・・・・もしかして、怖いのか？」

「じ、実は私、ダメなの・・・・・・・・オバケとか、ユウレイとか」

涙目になった西連寺はそう言って俺を見つめてきた。

ララといい西連寺といい、意外と女の子の涙目は普段との違いが可愛く見えてくるから不思議だ。

先ほど驚いていたのも、俺が怖いんじゃないかってこれからの肝試しが怖かったんだな。

「仕方ないな、ほら」

俺は提灯を持っていない左手を西連寺に差し出す。

「えっ？」

手を差し出された西連寺は俺の手と俺の顔を戸惑った様子で交互に見つめる。

「俺の手に捕まって目を閉じてろ。そうすればゴールに連れてってやるよ」

「えっと・・・・・・・・」

「まあ、俺みたいな男に触れたくないってんなら話は別だが」

何やら迷っている西連寺にそう言ってやる。

迷っている理由がそれなら流石の俺でも少し傷つくが。

「い、いいの？」

今度は俯いた状態で視線を上げて見つめてくる。

先ほどの涙目と重なって、見事な上目遣いだった。

「俺は別に構わない。ただ、さっき言ったように西連寺が嫌なら――」

「い、嫌じゃない！嫌じゃないよ！！」

俺の言葉を遮って西連寺の大きな声が辺りに響いた。

自分の大きな声が恥ずかしくなったのか、頬を赤くして俯いてしまう。

「つたく、仕方ないな」

いつまでたっても行動しようとしないう西連寺の右手を俺から繋いでやる。

「あっ……」

「嫌じゃないんだろ？ 嫌ならいつでも離していいからな」

「ううん、ありがとう」

俺の言葉に首を振って否定した西連寺はそのまま両手でギュツとしがみ付き、目を閉じた。

「まあ、一本道だから大丈夫だと思うが、コレも貸してやるよ」

「えっ？ あっ、クラシック音楽」

ここに来るまでのバスの中で話す相手がいなかった俺はずっと音楽を聞きながら眠っていたのだ。

その時の小型音楽プレイヤーを西連寺に貸してやる。

「一応、俺のお気に入りだから失くすなよ？ 音楽を聞きながら目を閉じてたらゴールしてるから」

それだけ言って、俺は止まっていた足を進めた。

先ほどから隣の林の中で先生が早く行けと指示しているのが気になっていたのだ。

おそらく、俺たちが止まっていた所為で後ろの奴らがスタート出来ないのだろう。

「・・・・・・・・・・ありがとう」

「ん？ 何か言ったか？」

先生に気を取られていた俺は西連寺が何を言ったのか、聴き取ることが出来なかった。

「・・・・・・・・・・」

俺の聞き返した言葉も、音楽を聞いて目を閉じている西連寺には聴こえなかったようで、無言のままゆっくりと足を進めている。

「まあ、いいか」

俺は特に気にしないことにして西連寺が転ばないように気を付けながらゆっくりと進んで行った。

途中、先にスタートしたクラスメイトたちが引き返してきたり、驚かす役をしている旅館の人たちに遭遇したが、俺は気にせずそのまま足を進めた。

西連寺も本当に音楽に集中しているのか、終始穏やかな表情のままゴールまで辿り着いた。

「ゴールおめでとう！ 今年の肝試しの達成者は今のところキミたちだけだ」

いつの間に移動したのか、スタートの位置に居たはずの校長が俺と西連寺を拍手で迎えてくれた。

後ろには旅館の人たちも数人いるのが確認出来た

というか、こんなにここに人が居て旅館は大丈夫なのだろうか。

「そうなのか。　だが、まだ居るかもしれないんだよね？」

「そうだね。　君たちが最初にゴールしたということだよ」

俺の言葉に律儀に返事をしてくれる校長。

しかし、俺は敬語を使っていないのだが、いいのだろうか。

「終わったらどうすればいい？」

「うん？　ここで友達たちを待っててもいいし、先に旅館に戻っても構わないよ？」

それだけ答えて、校長は旅館の人たちが集まっているテントへ向かって行った。

おそらく、あそこで色々と準備をしたり、何かあった時の為に備えているのだろう。

「西連寺、もう終わったぞ」

未だに目を閉じて俺の左腕にしがみ付いていた西連寺の肩を叩いて

教えてやる。

「えっ？ なに？ 結城君」

イヤホンを外して、俺の顔を見つめる西連寺。

「終わったんだよ、肝試し。ここがゴールらしい」

「そうなんだ・・・・・・あっ！ ご、ごめんなさい」

ゴールに到着して安心した西連寺は今の状態に気がついて慌てて俺から離れる。

「ここで友達待っててもいいし、旅館に戻ってもいいらしいけど、どうする？」

俺から離れた西連寺だが、何故だか頬が赤くなっていた。

風呂上がり以外へ出たから湯冷めでもしたのか。

「わ、私は里沙と未央を待ってるね」

西連寺の言う里沙と未央が誰なのかわからないが、友人を待つならそれで構わないだろう。

「んじゃ、俺は戻るな」

西連寺に背を向けて旅館の方へ向かって歩き出す俺。

その日は結局、他にゴールする者がいなかったようで、俺と西連寺

のペアが唯一の達成者だったらしい。

ちなみに途中で本物の幽霊が出たという噂が旅館の人たちの間で広まったが、未だに原因は謎のままらしい。

くおまけく

結城君が旅館に戻っていく背中を見つめながら私は自分の頬を押さえて俯く。

押さえた頬は熱く、きつと鏡で見たら真っ赤になっていることだろう。

「お化けが怖かったからってあんなこと・・・・・・・・」

歩いている間、ずっと結城君の腕にしがみ付いていたことを思い出してまた頬が熱くなる。

「・・・・・・・・そう言えばお風呂で未央が」

旅館に到着してすぐに入ったお風呂で未央が

【この臨海学校の肝試しで最後までたどり着いたペアは必ず結ばれてカップルになるんだって！】

と言っていた。

「わ、私と結城君がカップル……」

そう考えると夜風に当たって冷めてきた頬が再び熱くなる。

私は何回頬を熱くしているのдар、と考えていたけど、次々とリタイアしたクラスメイト達が集まってきたのでその思考は停止させる。

「春菜、どうだった？」

集まってきたクラスメイトの中に私が待っていた里沙と未央もいて、私を見つけた里沙が声を掛けてくる。

「うん、ちゃんとゴールできたよ」

「おお！　ということは、春菜はペアの人とカップルになるんだね！」

私の言葉に未央が目キラキラさせてそう言ってくる。

「そう言えば、春菜のペアって誰だった？」

「結城君だよ、結城トシアキ君」

私がそう答えた瞬間、里沙と未央のテンションが下がっていくのがわかった。

「ああ、結城ね」

「結城かあ。　春菜、大丈夫？」

「えっ？ 大丈夫ってなにが？」

一瞬なにを言われているのかわからなかったけど、気になったのですぐに聞き返してみた。

「だって結城、なに考えてるかわかんないし」

「こないだも、上級生の人と言いつ争っているのを見たって聞いたよ？」

私は同じ中学校だったので、結城君がどんな人なのかわかっていたけど、高校で初めて結城君に会ったらそういう風に見えるんだ。

「ううん、結城君は優しくて、凄く頼りになる人だよ？」

この前も貧血で倒れていた私を保健室まで運んでくれたし、それに今日も私の為に音楽プレイヤーを。

「あっ、これ、返すの忘れてた」

手に持っていた結城君の音楽プレイヤーを見て、思わず呟いてしまった。

「ふーん、春菜って結城のこと好きなの？」

しかし、そんな私の呟きは聴こえなかったようで、里沙は別のことを聞いてくる。

「ふえ！？」

そんな里沙の声に私は素っ頓狂な声を出しながら視線を音楽プレイヤーから慌てて二人へ移した。

というか、また顔が熱くなっている。

このままじゃ気付かれそうなので、顔を見せないようにして旅館を目指して走った。

「あっ、コラ、待て！」

「さっきの話、聞かせてよ！」

走って旅館に帰った私は里沙と未央の追撃を適当に答えてはぐらかした。

頬が赤かった理由は先ほど走った所為だということにしておいた。

第八話

二日目の臨海学校は朝から海で海水浴だった。

綺麗な砂浜に青い海、そして暑さの元凶となっている太陽。

そんな中、俺は一人立ち尽くしていた。

「……………遊んでばかりのような気がするのは俺だけか？」

一応、臨海学校なのだから勉強はしないまでも何か学ぶことをするのだと思っていたのだが、予想が外れたらしい。

「まあ、自然が好きな俺にとっては自由に動けるなら別にいいけどな」

久しぶりに見た海の『精霊』たちに軽く挨拶をしながら辺り見渡す。どうせなら日陰の涼しい場所でのんびりしたかったのだ。

「トシアキー！ こっちで一緒に遊ぼうよー！」

呼ばれたので声がした方に振り向くと、ララと西連寺の姿が見えた。西連寺が俺のことを下の名で呼ぶはずがないので、ララが呼んだのだろう。

「なんだよ、ララ。俺はゆっくり休も——」

「えへへ、どう？　可愛いでしょ？」

水着姿のララが俺の言葉を聞かずに自分の水着姿をアピールしてくる。

というか、それもペケの変身した姿なのだろう。

「どうせペケの変身したやつだろ？　それなら本物を着てる西連寺の方がよっぽど可愛いぞ」

やはり、ペケがどこからかコピーした水着より自分で着るものを選んだのであろう西連寺の水着の方が可愛く見える。

「えっ！？　わ、わたし！？」

俺が突然名前を出したことに驚いたのか、西連寺が顔を赤くしながら慌てている。

だが、よく考えると女子の水着を褒めると変な意味にとられないだろうか。

「むう、ペケの変身じゃあダメなの？」

慌てている西連寺の横では頬を膨らませたララが俺にそう言うてくる。

別にダメと言うわけではないが、やはり自分で似合うものを買うべきだと思っている俺はおかしいのだろうか。

「ダメじゃないが、西連寺と比べると見劣りしてしまうな」

もつとも、ララのように万人受けするような容姿であればどんなものを着ていても似合うとは思うが。

「あくまで俺個人の意見だ。他の奴に聞けば可愛いって返ってくるんじゃない？」

「もう、トシアキに言って欲しんだよ」

ララが俺を慕ってくれるのは嬉しいが、もともとは俺の発言が誤解を生んだのが原因だ。

もう一度キチンと話をしておくべきなのだろうか。

「あんな、ララ。そもそも――」

「きゃああああ！！ 水着泥棒よ！」

俺の言葉をかき消すようにして離れたところから悲鳴が上がった。

覗き事件といい、お化け事件といい、水着泥棒事件といい、問題多発しすぎだろ、この臨海学校。

「っと、こっちに来たか」

水中を素早く移動してきたヤツは俺たちの方へと向かって来ていた。

「ララ、西連寺、注意しとけよ。こっちに近づいて来てるぞ」

とりあえず、被害にあっているのは女子だけのようなので、目の前

にいる二人にはそう言うておく。

「う、うん・・・・・・・・」

「まっかせて！ 私が捕まえるわ！」

そう言っていたララだが結局、水着を盗られてしまった。

というか、今水着を盗ったヤツって。

「ラ、ララさん、大丈夫!?!」

傍にいた西連寺が心配そうにララに近寄って声を掛けている。

しかし、ララの水着はペケの変身したもので、すぐに元に戻っていた。

「うん。 大丈夫だよ、春菜」

振り返ったララの水着はキチンと元通りになっており、周りで様子を窺っていた男子たちが残念そうに肩を落とす。

そんな奴らを俺は放っておくことにして、水着を盗んだ犯人のもとへ向かうことにした。

「ちょっと、行ってくる。 お前らはここにいろ」

ララと西連寺にそう言い残して、俺は犯人が向かって行った岩場へと急ぐ。

「・・・・・・・・なるほど、そういうことか」

岩場に行ってみると、大きなイルカが砂浜に乗り上げて身動きがとれずにいた。

水着を盗んだ犯人はそのイルカの子供のようで、心配そうにコチラの様子を窺っている。

「安心しな、すぐに助けてやるよ」

イルカは頭の良い動物だ。

おそらく、人間の水着を盗んでここまで案内して親を助けて欲しかったのだろう。

「キュー」

俺の言葉の意味を理解したのか、嬉しそうにその場でとび跳ねた子イルカ。

流石に人一人の力ではどうしようもないが、俺には『精霊』がついている。

俺は『精霊』に協力してもらい、親イルカを海へ返してやった。

「んじゃ、気をつけてな」

遠くの海でこちらを見つめる親子イルカにそう言って手を振る。

「キュー！」

最後にお礼でも言ってくれたのか、親子イルカはそのまま海へと戻って行った。

それにしても、親子か。

「……まあ、いいか。丁度いい場所だし、ここで休むことにしよう」

岩場は人の気配がしない静かな場所で、丁度いい陰もあり涼しそうな場所だった。

俺はそこで今までの疲れを休めるためにゆっくりと眠りに着いた。

これは余談になるが、イルカたちが無事に返ったあとに校長が今まで盗られていた水着を発見して大喜びしていたらしい。

そこに盗られた水着を探していた女子に見つかり、再びボコボコにされてしまったそうだ。

海で課外授業という名の遊びを終えた生徒たちは旅館に戻って寝る準備をしていた。

風呂にも入り、美味しい夕食も食べ、俺も布団に入って眠ろうと考

えていた。

「明日で臨海学校も終わりかあ」

「思い返すと校長に振り回されてばかりだったよな」

同室の雉島と猿山の会話が俺の耳へと入ってくる。

しかし犬飼、お前はゲーム以外にすることはしないのか。

二人の会話に混ざろうともせず、布団に入ったままゲームをしている犬飼に視線を向けた俺。

「せめて最後に楽しい思い出の一つを残したいと思わないか？」

「確かに！ このまま終わるのは寂し過ぎる」

俺や犬飼を無視して話を続ける猿山と雉島。

犬飼に視線を向けていてもなにも反応しないので、俺は二人の会話に入ることにした。

「でも今からじゃ、寝て起きたら帰宅になるだろ」

「いや、まだやれることはある！」

かなりの大声で叫びながら俺に人差し指を向けた猿山はそのまま言葉が続ける。

「ララちゃん…….もとい、女子の部屋に遊びに行くのだ！」

俺に指を向けてまで何を言いだすのかと思えばどうでもいいことだった。

女子となら明日の帰りのバスにでも会話出来るだろうに。

そこまで考えた俺だが、肝試しの時に西連寺に貸した音楽プレイヤーをまだ返してもらってないことに気付いた。

「そうだな、行くか」

「「えっ？」」

俺がそう答えたことが余程驚いたのだろうか、猿山と雉島が揃って俺を見る。

明日帰るときに音楽プレイヤーが無かったら困るので、俺はそんな二人を放って部屋を出る。

「お、おい！ 待てよ、トシアキ！」

「お、俺も行く！」

俺の後を慌ててついてきた猿山と雉島。

そんなに女子の部屋に行きたかったのだろうか。

「ここだ」

女子の部屋を目指した俺だが、西連寺が何処の部屋に居るのかわか

らなかった。

猿山に尋ねたところ、ララと同室ということだったので俺は案内を任せたのだった。

「ララちゃん、起きてるかなあ」

「早く行くぞ」

女子の部屋の前で変なテンションの猿山を放っておいて扉に近づいた俺。

あんな奴の傍に居たら俺まで変な目で見られるに決まっている。

「おい！　そこに居るのは男子か！」

俺が扉の前に着いた途端、聴こえてきた怒鳴り声。

おそらく、後ろにいる猿山と雉島が見つかってしまったのだろう。

俺は扉の前まで来ていたため、近くまでこないと見つからないはずだ。

「げっ！　指導部の鳴岩だ」

「に、逃げろ！！」

猿山と雉島は先生の姿を確認したのか、慌てて元来た道に戻って行く。

俺は見つかってはいないが、このままここに居ると見つかってしま
うだろう。

「俺も逃げるかな」

考えていても仕方がないので、ここから逃げようとしたとき、目の
前の扉が静かに開いたのだ。

「ゆ、結城くん・・・・・・・・」

「西連寺・・・・・・・・」

目的の人物に出会えたのは良いが、このままでは見つかってしまう。

「コラー！ 待たんか！」

逃げた猿山と雉島を追いかけているのであろう先生の声が近くまで
迫って来た。

今から逃げだしてもおそらく間に合わないだろう。

「仕方ない、腹を括るか」

別に今で無くても明日の帰るときに返してもらえばよかったのだと
俺は思った。

早計な考えをして、行動に移してしまった自分自身に呆れてしまう。
こうなったら潔く怒られて反省でもしようか、と考えていたところ、
西連寺に腕を掴まれた。

「早く入って！ 見つかったちゃうわ！」

「おっ？ おう」

女子の部屋に入れて貰った俺は座りこんで、そのまま辺りを見渡す。

「あれ？ 他の女子たちは何処行ったんだ？」

「あ、うん。 みんなジュースを買いに行くって」

なるほど、それで他の女子の姿が見えなかったわけか。

ここまで来たのだから俺は早速本題に入ることにした。

「西連寺、悪いけど音楽プレイヤー返してくれね？ あれがないと明日のバスの中で暇になるからさ」

「あつ、そう言えばずっと私が持ってたよね。 ちょっと待ってて」

自分の鞆が置いてある場所まで戻った西連寺はそこから俺の音楽プレイヤーを取り出す。

「はい、あの時はありがと。 凄く助かったよ」

「そうか。 それなら良かった」

渡された音楽プレイヤーを笑顔で受け取った俺はそのまま立ち上がった。

「それじゃ、俺は戻るな。　いつまでも女子の部屋にいとマズイだろうし」

目的の物は手に入ったので、自分の部屋に戻って早く寝ようと俺は西連寺に背を向けて歩き出そうとする。

しかし、俺の浴衣が後ろに引かれているのを感じて振り返ると西連寺が袖を掴んでいた。

「西連寺？」

「あっ、その……今出てると、先生に会っちゃうと思うから」

どうやら西連寺は俺が先生に見つかって怒られるのを心配してくれたらしい。

気持ちは嬉しいがこのまま部屋に居るのも問題あるだろう。

「大丈夫だ、何とかなる。　もし見つかったとしても――」

「そうだったんだ、ララちい」

俺の言葉を遮るようにして、扉の向こうから女子の声が聴こえてきた。

ララの声も一緒に聴こえることからおそらく、この部屋の女子たちだろう。

「って、特に問題ないか。　後ろめたいことなんてしてないし」

そういう風に俺は考えていたのだが、西連寺は違ったらしい。

「結城君、早くこっちに!!」

慌てて俺の腕を取ると、布団の中に俺を押しこんでその布団を自らの膝に掛けたのであった。

「……何故、隠れなくちゃいけないんだ？」

俺の目の前は暗闇に包まれ、その中で西連寺の足だけがぼんやりと見える。

そんな中で俺は疑問を浮かべたが答えが返ってくるはずもなく、その間にララたちが部屋に入ってきて来てしまった。

「お、おかえりなさい」

ララたちが戻って来たのを見て、西連寺がその声を掛ける。

というか、この状況で俺が姿を見せたら色々と勘違いされるじゃないか。

仕方がないので黙って気配を消し、外に出られる機会を待つことにした。

「あれ？ 春菜、布団に入っちゃって、もう寝るの？」

「う、うん。 ほら、もう消灯時間だし」

「もう、そんなこと言って、夜はこれからよ?」

名前がわからない女子がそう言って西連寺に話しかけているようだ。上の状況がわからないので何とも言えないが、なかなか出れそうにない。

「?」

そう思っていると携帯が布団の中に入ってきた。

西連寺が文字を打ってくれており、俺へ伝えてくれようとしたみたいだ。

【みんなが寝静まったら外に出すからそれまでガマンして】

俺は別にそれでも構わないのだが、クラスの男子を自分の布団の中に入れることに抵抗は無いのだろうか。

「ねえ、ところで春菜さ」

「な、なに?」

今度は別の女子が西連寺に話しかけたようだ。

「春菜ってララちいみたいに結城のこと好きなの?」

「なっ、なに言ってるのよ!」

流石に俺自身も驚いてしまう。

まさか、本人の俺が居る所でそんな話題になるとは思っていなかったのだ。

「えっ？ そうなの春菜」

ララも興味があったのか、その話に首を突っ込んできた。

というか、俺がここにいるのだけど、聞いていても大丈夫なのか。

「さっきジュース買いに行ったときに聞いたんだけど、ララちいつて結城の婚約者らしいのよ」

厳密に言えば俺自身はそんなこと認めていない。

それと『ララが俺の婚約者』ではなく『俺がララの婚約者候補』になっただけだ。

「それで結城の家で一緒に住んでるらしいのよねえ」

「肝試し大会の時には聞きそびれたけど、今なら良いわよね？」

「な、何が？」

布団の中から話を聞いている限り、このままここに居るのは色々問題になりそうだ。

何とかして話を遮ろうと俺は布団の中で考える。

「肝試しの時に結城と何があったの！？ 変なことされたんじゃない

い？」

「そうそう！ 無口で何考えてるかわからない奴ほど、危険な考えをしてるんだよ」

俺が知らない女子二人が西連寺の傍に近づいてくる。

このままだと、西連寺の布団の中に居る俺は踏まれてしまうことになる。

「そんなことないよ」

そう答えたのは西連寺でも俺でも無く、話を聞いていたララであった。

「トシアキはね、皆のことを考えてくれる優しい人で、宇宙で一番頼りになる人だよ」

ララの言葉を聞いて他の三人は無言になる。

布団の中で声だけ聞いている俺にも一瞬、言葉を失うほど想いが伝わってきた。

ララは俺のことを本当にそういう風に見てくれているのだろう。

「な、なに！？」

「非常ベル！？」

そんな中、突然旅館内の非常ベルが鳴りだした。

ララを含めた三人は慌てて部屋の外へ出ていく。

「結城君！」

「ああ、サンキューな」

その隙に布団から抜け出した俺は部屋を出て、他の生徒とは反対方向へ走りだす。

ちなみに非常ベルは鳴ったが、実際には何も起こってはおらず。

年老いた先生が何かのボタンと間違えて押してしまったらしい。

そのおかげで俺は自分の部屋に戻ってくることが出来たので、とりあえず感謝しておく。

くおまけく

「今頃、トシ兄いは海で遊んでるのかなあ」

私はアイスを咥えながら、臨海学校に行ってしまったトシ兄いのことを考える。

出かけるときは笑顔で見送ったけど、やはり二日間一人でこの家にいると少し寂しく感じてしまう。

「まあ、明日には帰ってくるんだけどさ」

私以外誰もいないのに、思わず言い訳をするかのようにそう言葉に
してしまう。

「・・・・・・・・」

アイスを食べ終え、残った棒をゴミ箱へと捨てた私はふと、思い出
す。

「そういえば・・・・・・・・」

臨海学校に行く前にトシ兄が言っていたことを思い出した私は洗
面所へ足を運ぶ。

「あった！　これを使おうと♪」

目的の物を手に入れた私は、明日帰ってくるトシ兄の驚く顔を思
い浮かべて笑顔になるのだった。

第九話

臨海学校から戻って来たあと長かった夏休みも終わりを告げ、俺は今、教室で授業が始まるのを待っていた。

臨海学校の時にララが言っていたことを俺なりに考えて、真剣に向かい合ってみようと決めたのだ。

「まあ、俺のいい加減な発言が原因なんだけどな」

一人でそう呟いて苦笑した俺は西連寺と楽しそうに会話しているララに視線を向ける。

俺が興味のないような態度でいれば諦めるなり、幻滅するなりなると考えていたが、ララはチキンと俺のことは見ていてくれたらしい。

「俺も態度を改めないと、ララに失礼だな」

自分の考えがまとまったところで、チャイムが鳴り二学期最初の授業が始まる。

「はい、みんな席についてえ」

クラスの担任が教室に入ってきてそう声を掛ける。

あちこちで談笑していたクラスメイトたちは自分の席に戻り、授業を受ける体制になった。

「えー、二学期になっていきなりですがあ、転校生を紹介しますう」

ウチの担任は言葉の最後を妙に伸ばす癖があるのだろうか、かなり気になってしまう。

そう考えている間に一人の男子生徒が教室に入ってくる。

「レン・エルシ・ジュエリア君ですう、みんな仲良くするよーに」

「「きゃああああ!!」 美形よ!」

先生の紹介と共にクラスの女子たちが叫び声を上げる。

それにしてもまた宇宙人か、アイツにも『精霊』が寄りついてないな。

「やっと見つけたよ、ララちゃん。 ボクの花嫁……」

そんなことを考えている間にララの傍に移動した転校生はララの手を握ってそう声を掛けていた。

「一目でわかったよ、やはり――」

なんだか口説いているような言葉ばかりを口にする転校生に嫌気がさした俺は途中で意識から転校生という存在を外す。

まったく、次から次へとララの婚約者候補がこの地球にやって来ているのだろうか。

このままだと俺の平和な生活が宇宙人たちの所為で台無しになってしまう。

いっそのことデビルーク星に乗り込んでララの父親と殺りあうべきか。

「じゃあ、キミだ!」

頭の中で考え事をしていて他から意識を遠ざけていた俺に突然、転校生が指を向けてきた。

「・・・・・・・・」

だが、答えるのも面倒だった、というより関わりたくなかったので無言を貫く。

その後、担任の言葉もあって転校生も席に着き、授業は始まった。

「うぜえ・・・・・・・・」

授業が始まったのはいいが、何かにつけて転校生は俺に絡んでくる。

数学の問題を俺より先に答えるだの、体育の授業で俺より早く走るだの、正直に言って鬱陶しい。

別に答えるのも走るのも俺より早くていいのだが、その度に俺の名前を叫ぶのは勘弁してほしい。

「流石に、昼休みの飯を食う時ぐらいは大人しくしてるだろ」

そう思って飯を食おうと立ち上がる。

最近、俺は屋上で飯を食うのがお気に入りなのだ。

「あの、結城君いいかな？」

席を立ちあがったところで俺は声を掛けられた。

声がした方を見ると、西連寺が申し訳なさそうに俺を見つめている。

「ん？　どうかしたのか？」

「実は五時間目で使う資料を教室まで運んでおきたいんだけど、私一人じゃ運べそうになくて……」

そう言いながらチラッと黒板の隅を見る西連寺。

そこには日直の名前が書かれており、今日は俺と西連寺であった。

というか、また西連寺と日直なのか、一学期に続いて二学期も同じペアとは驚きだ。

「わかった。　今から手伝えばいいんだなっ!？」

俺が西連寺と話していると口にパンを咥えた状態で転校生が背中にぶつかってきた。

「きゃっ!？」

そのため俺は西連寺を押し倒す形になってしまい、倒れた拍子に西連寺の胸を掴んでしまう。

「見たまえ！ 結城君より早くご飯を食べたぞ！」

倒れた俺や西連寺を気にした様子もなく、そう言って自慢げに胸を張る転校生。

その態度に流石に関わらないようにしていた俺もキレてしまう。

「てめえ……人につかって、迷惑を掛けておいてその態度はなんだ？」

起き上がった俺は転校生へ向けて殺気をぶつける。

俺の怒りに反応してか、周りの『精霊』も慌ただしく動きまわる。

その所為で俺の周囲の机やイスがカタカタと震える。

「なっ、なんだ！ ぼ、ボクが悪いというのか!？」

俺の殺気を受けて話せる転校生は凄いと思う。

それか、最近俺が殺気を出すことがなかったため衰えているのか。

「西連寺、悪い。 その、身体に触れちまって、アレだったら気の済むまで殴ってくれても構わないから」

何か叫んでいる転校生を無視して、俺は後ろで倒れている西連寺を起こしながらそう言った。

手や肩ならいざ知らず、胸を触ってしまったんだ、それくらい仕方

ないだろう。

「う、ううん、大丈夫。　ちょっと、ビックリしただけだから」

西連寺は俺の手を取りながら立ち上がりそう言って許してくれる。

ただ、少し頬が赤くなっているのはおそらく公衆の面前での出来ごと
に恥ずかしがっているためだろう。

「そうか。　そう言ってくれると助かる」

西連寺が立ち上がってから俺は頭を下げ、今度はこんなことを仕出
かした転校生を見る。

「ひっ!?!」

つい睨んでしまったため、先ほどの殺気とも相まって転校生は怯え
てしまった。

だが、俺は許すつもりは全くないので、転校生の腕を掴んで引きず
って行くことにする。

「ララ、悪いが西連寺を手伝ってやってくれ。　俺はコイツと話が
ある」

「えっと、うん。　わかったよ」

いつの間にか人だかりが出来ており、その中にいたララにそう声を
掛ける俺。

ララに声を掛けたとき、ララを含めた周囲の女子生徒の顔が赤かったのは何故だろうか。

そんな疑問を頭に浮かべながら、未だに怯えている転校生を連れて俺は屋上へ向かった。

屋上へ出てきた俺はすぐさま、引きずっていた転校生を殴り飛ばした。

地球人ならば話をしただろうがコイツは宇宙人だ。

どんな力や能力を持っているかわからないので遠慮はしない。

もともと、見掛けだけの奴や地球人並みの力しかもってない奴もいるかもしれないが。

「ぐっ!？」

殴られた転校生はそのまま屋上の手すりに激突し、呻き声を上げた。

「とりあえず、俺にぶつかった分の仕返しはさせて貰ったぞ」

西連寺が許してくれたので俺からこれ以上コイツにすることはない。

もつとも、西連寺から殴られていたらその分俺がコイツを殴るつもりだったが。

「あと、俺より何でも早いのは結構だが、俺の名前をいちいち叫ぶんじゃない。付きまとわれているみたいで鬱陶しい」

それだけ言って俺は転校生に背を向ける。

このままだと五時間目の授業に遅刻してしまいそうだ。

個人的には別にいいのだが、連絡が家にいつてしまうと色々と困ってしまう。

「だったら・・・・・・・・」

「ん？」

転校生が小さく呟いた言葉に俺は立ち止まる。

本来なら聴こえないはずのその声は、後ろから襲撃されないようにと、『精霊』に色々と援護を頼んでいたので、俺の耳に聴こえてきたのだ。

「だったら、君はどうなんだ！　ララちゃんに付きまとって勝手に婚約者になり、今では次期デビルーク王だ！」

立ち上がった転校生はそう言って叫ぶ。

というか、いつの間にか俺から婚約者になったことになっているし、最有力候補にまで格上げされている。

「それは違う。俺から婚約者になったんじゃない、ララが俺を婚約者候補に選んだんだ」

振り返りながら俺は本当のことを教えてやった。

その後ろで五時間目の授業が始まるチャイムが鳴ったが、俺は気にせず言葉を続ける。

「それに次期デビルーク王なんて話は今、初めて聞いたことだ」

「そ、そうなのか」

真剣な表情で話す俺の言葉を信じたのか、どこかホッとした様子の転校生。

そして、そのことで調子を取り戻したのか、色々なことを話し出した。

自分はメモルゼ星の王族であること。

子どものころ、ララと結婚の約束をしたこと。

ララに相応しい男になって地球まで追いかけてきたことを説明してくれた。

「なるほどな。それで、俺にどうしろと？」

結局、話を全て聞いているうちにかなり時間が経ってしまったので、授業を諦めた俺はそう尋ねてみた。

俺に事情を話したと言うことは何かやってほしいことがあるのだろう。

「君に婚約者候補の座を辞退してほしい」

何を言うかと思えばそんなことだった。

俺自身としては特に問題ないが、婚約者として選んでくれたのはララなので、俺にはどうしようもない。

「さっきも言ったら、選んだのは俺じゃなくてララだ。俺がなんと言おうとララの気持ちが変わらない限りそれは出来ない」

「ならば、ララちゃんと親しくなるようなことは避けてほしい」

確かにララが俺の方へ寄って来ても冷たくあしらうことは出来る。

そして、それを繰り返していけばいずれは俺という存在を諦めることもあるだろうけど。

「悪いな、ララの気持ちを知ってしまった俺としては答えてやりたいたいと思ってる。だから、それは出来ない」

朝にも悩んだことだが、勘違いが原因とはいえ本当の俺を見てくれているララにそんな態度は出来ない、それは人として失礼な行為だと思う。

そして俺がそう言うのと転校生――レンは俯いたまま肩を震わせる。

「結城トシアキ！　やはり君はボクの敵だ！！」

そして突然、顔を上げたかと思うと、叫びながら俺に指を向ける。

その宣言の後に五時間目終了のチャイムが鳴り響くのであった。

結局、俺はその日の午後の授業に出ることはなかった。

五時間目終了のチャイムの後、レンは教室へと戻って行ったが、俺は戻る気にはなれなかった。

屋上で過ごしたあと、下校時間になってから教室へ戻り、今は家で休んでいる。

「・・・・・・・・」

リビングのソファで横になり、目を閉じながら考えていた。

ララのことは好きか嫌いかで聞かれると好きだと答えられる。

しかし恋人としてや結婚相手としてはと聞かれると答えを返す自信がない。

「トシアキ、何してんの？」

「ちょっと、考え事をな。　って、なんだ、その格好」

ララの声があったので目を開けてみると風呂上がりなのだろうか、バスタオル一枚を身体に巻いた状態で俺の顔を覗きこんでいる。

「今、美柑とお風呂入ってたんだよ、だからこんな格好なの」

「相変わらず警戒心がない奴だな、俺が襲ったらどうするんだよ？」

既にララのバスタオル姿は見慣れているため、少し困らせてやろうと軽い冗談を言ってみる。

「大丈夫だよ、トシアキはそんなことしないって信じてるし」

笑顔のまま、俺のことを信じていると言い放ったララ。

俺の冗談に全く慌てた様子もなく、特に考えもせずに答えたということは本心からそう思ってくれているのだろう。

「……………」

そう考えてみるとララのことが可愛く思えてくる。

今まで勝手に婚約者にされて迷惑だと思っていたが、これはある意味で幸せなことなんじゃないだろうか。

「ん？」

俺の無言の視線を受けても特に気にした様子もなく、可愛く首を傾げてみせるララ。

「……………なんでもない。湯冷めしないように気をつけろよ」

そんなララに俺はそれだけ言って自分の部屋へ向かうことにする。

なんだか急に恥ずかしくなってしまったのだ。

あんなに可愛い女の子が俺を信頼してくれている。

そんな事実になんぞ照れてしまう俺であった。

「あつ、トシ兄い。 お風呂空いたよ？」

自室へ戻ろうと廊下に出ると、今度は美柑が俺に声を掛けてきた。

先ほどのララのことを考えていた俺は美柑の声を聞いてそちらに視線を向ける。

「……………何、着てんだよ、美柑」

視線の先には風呂上がりの美柑がパジャマの代わりに俺のカッターシャツを着ていたのだ。

しかも、それは臨海学校へ行く前に処分してくれと頼んだモノだった。

「どう？ これ、私の新しいパジャマ。 トシ兄いは捨ててくれて言っただけ、勿体ないから再利用してみたんだ」

そう言ってシャツ姿のままクルリとその場で回転する美柑。

その時にシャツの下部分が捲れ上がり、綺麗な黄色が見えたことは黙っておくことにする。

「俺のシャツなんて嫌だろ？ 別に無理して再利用なんてしなくて

も」

「ううん、私が着たいから貰ったの。 再利用はただの言いわけ」

そう言った美柑は恥ずかしそうに頬を染める。

まさかの答えに俺のほうも恥ずかしくなってしまった。

「……そんな格好をするのは家だけだぞ」

「うん、わかってる。 トシ兄以外には見せないから安心して」

それだけ言ってパタパタとリビングの方へ走って行った美柑。

我が義妹がなかなか可愛いことを言ってくれる。

「ちょっと待て、俺は今何を考えた」

ララに続いて俺は自分の義理とはいえ妹までそんな目で見ているのか。

学校では西連寺の胸まで触ってしまうし、最近の俺はどうかしているのだろう。

「……早く寝よ」

その日は風呂にも入らず、自分の部屋へ戻ってすぐに布団をかぶることにした。

しかし、布団に入っても今日の出来事やララへの想い、それに自分

自身への自己嫌悪でなかなか眠りにつくことは出来なかった。

くおまけく

結城君が転校生のジュエリア君を連れて教室から出ていった後、クラスではちょっとした騒ぎになっていた。

「ねえねえ、見た？ さっきの結城君」

「うんうん、今まで無口で怖いイメージだったけど、委員長に謝ってるときとか格好よかったよね」

今までは無口で何を考えているかわからない人って皆思っていたみたいだけど、今回のことで結城君の認識が変わったらしい。

「は・る・な！」

「どうだった！？ どうなった！？」

そんなことを考えていると未央と里沙が興奮した様子で私に詰め寄ってきた。

「えっ？ どうなったって？」

「もう、決まってるじゃない。結城にム・ネ、触られたんでしょ？」

里沙の言葉で先ほどの記憶が蘇ってきて恥ずかしくなって俯いてしまう。

「べ、別にどうって……さっきのは事故だったし」

「でもでも！　その後の春菜の為に怒ってた結城はどうだった？」

今度は未央がそう聞いてくる。

確かにジュエリア君が結城君にぶつかって私も巻き込まれたけれど、結城君は私の為に怒ってくれたのかな。

「なんか、春菜の為に怒ってる感じだったよね？」

「そうそう、結城の奴も良いところあるじゃん」

里沙と未央の話を聞いてそうなんだと、私は少し嬉しく感じた。

あと、怒っていた結城君の後ろに居た時はとても安心できた気がする。

なんていうか、守ってくれるってことが凄く伝わってきたの。

その後、五時間目には二人とも戻ってくることはなかった。

六時間目にはジュエリア君は戻って来たけど、結城君は来ないまま授業が進んでいった。

私はそんな結城君のことを考えながら窓から見える白い雲をジッと眺めていた。

第十話

「さて！ もうすぐ待望の彩南高校学園祭！！ 実行委員になった猿山だ！」

普段からうるさい奴だと思っていたが、今日はいつもに増してかなりうるさい。

季節は秋に変わり、この学校でも文化祭が行われる季節になったようである。

その実行委員にいつの間になつていた猿山が準備のために担任に交渉してこんな機会を作ったらしい。

「この前のHRで皆に出してもらった物案だが、オバケ屋敷に演劇など、どれも普通過ぎてつまらない！」

普通でも別に構わないと思うのだが、猿山的に何か許せないものがあつたのだろう。

俺は俺で、絶対に他の人と同じにならないように書いたから問題ない。

もしも多数決になった場合、他人が選ばないような少数意見は却下されるだろうから。

「だがそんな中、俺と全く同じ考えをしている奴が一人だけ居ただ！」

猿山と同じ考えをする奴なんてこのクラスに居ただろうか。

俺は何も考えずに周囲に視線を向けてみる。

「ずばり！ 『アニマル喫茶』だ！ ウチのクラスはこれで行こうと思う！！」

「トシアキ、大丈夫？」

猿山の言葉を聞いた瞬間、俺は自分が座っていた椅子から転げ落ちてしまった。

近くの席に座るララが心配してくれたが、それどころではない。

まさか、俺が書いた意見がこうして行われようとしていることに驚いたのだ。

「アニマル喫茶あ？ なにそれ？ コスプレ喫茶みたいなもん？」

「ええええ、ヤダあ」

俺が椅子から落ちたことはララ以外のクラスメイトは気付くことはなかった。

もつとも、一番後ろの一番端に座っている俺より、教卓に居る猿山に視線が向かっているからであるが。

「反対意見は認めない！ 俺以外にもそう考えた奴がいるんだ！」

「誰だよ、ソイツ！」

「猿山と同じことを考えるってことはきっと、雉島ね！」

「俺はそんなこと書いてねえよ！」

なんだかクラスメイト対猿山の構図になってしまっているが、このままだと俺の名前が出されるのも時間の問題だ。

「いいか！ 時代はアニマル！！ 弱肉強食の時代！！！」

目をギラギラとさせながら演説を行う猿山に真面目な生徒が若干引いている。

それでも納得いかない者もいるようで、まだ反対しているようであった。

「ふっふっふっ、そう言っているのも今のうちだ。 こっちはあのトシー——ぐはっ!？」

俺の名前を出しそうになったので、俺はアルミで出来た筆箱を猿山に向けて全力で投げつけた。

突然倒れた猿山に、クラスメイトの視線が筆箱を投げた俺に集中する。

「……………うるさい、もう少し静かに話せ」

とりあえず視線を集めてしまったため、不機嫌な表情でそう言ってみる。

それを見たクラスメイトも俺から視線を外して、隣近所の友人たちと話始める。

どうやら見なかったことにしてくれるらしい。

「トシアキ、さっきからどうしたの？」

「いや、なんでもない。 なんでもないんだ」

まさか自分に被害が及ぶ危険性があるから猿山を黙らせたとは言えないため、とにかくウラにはそう言って教卓へ向かう。

教卓へ向かうと中身がぶちまけられた筆箱が猿山の額に乗っており、本人は完全に気絶していた。

「・・・・・・・・とにかく、中身を回収するか」

散らばったシャーペンや消しゴムなどを集めていると、入口に積み重ねた箱が幾つも置いてあるのを見つけた。

「ん？　なんだこれ」

気になった俺は積まれた箱を見てみる。

その箱の蓋の部分にはウチの女子生徒の名前と動物の名前が書かれていた。

「なるほど、猿山が考えそうなことだ」

俺が意見を書いたアニマル喫茶とは動物たちと触れ合いが出来るの

をイメージしながら書いたものだった。

しかし、猿山は女子生徒たちに動物のコスプレをさせて、接客する喫茶店をイメージしたらしい。

「まあ、本人が気絶してるし、関係ないか」

そう思っていると、後ろからララがやってきて俺と同じ箱に視線を向ける。

「あっ！ 私の名前が書いてある、これ私の？」

「いや、猿山が考えていたアニマル喫茶の制服だよ、別に着なくても——」

「みんなあ！ 一度コレ、着てみようよ！」

俺の話を全部聞かず、ララは他の女子生徒たちにそう言って声を掛け始めた。

最初は不満そうな顔をしていた生徒たちも、ララの言葉に乗せられ、女子生徒は皆で更衣室へ行ってしまった。

「……………とりあえず、猿山を起こしてもしもの時の楯にするか」

気絶している猿山に声を掛けて起こし、女子生徒たちが着替えに行っていることを伝えた。

「そうか、とりあえず着替えに行っただんな。これでクラスの半

分は味方になる」

何を自信にそんなことを言っているのかわからなかったが、女子生徒たちが戻って来た時にそれは理解できた。

「「「おおおおおー！ー！ー！」」」

クラスの半分である男子生徒たちが女子生徒たちの着替えてきた衣装を見て叫び声を上げたのだ。

女子生徒は皆、短いスカートに小さいエプロンを付け、頭やお尻に動物の耳や尻尾の飾りがついており、露出度が高い。

というか、ヘソが出ている奴とか胸の谷間が見えている奴とかいるけど校則的に大丈夫なのか。

いや、あの校長のことだ、多分何の問題もないことだろう。

「すげえ、いいじゃねえか！ 猿山！」

「ああ！ これこそが俺たちが求めたパラダイス！」

そう言いながら肩を組もうとしてくる猿山の手から離れ、俺は自分の席へ戻る。

女子生徒たちも衣装の可愛さと男子たちの反応を見て、やることに反対する者は居なくなっていた。

「っ！？」

女子生徒の中でただ、一人だけ恥ずかしそうに身体を隠している西連寺。

目が合ったと思った瞬間、彼女は頬を赤らめて俯いてしまった。

「おい、猿山」

楽しそうに騒いでいる首謀者を捕まえ、後ろの方へと連れていく。

「本当にやりたくない女子が居たらやらなくていいと言っとけ。
クラスメイトは見世物じゃないんだぞ」

「わかってるって！ でも大丈夫だと思うぜ？」

本当にわかっているのかとか、何が大丈夫なのかと色々と聞きたかったが、ララがこちらに来たので猿山を解放してやる。

「ねえ、トシアキ！ どう？ 私の格好！？」

近寄って来たララはそう言いながら俺の前でクルリと回って見せる。

「ああ、可愛いと思うぜ。 それはペケの変身じゃなく本物の衣装なんだろう？」

衣装としては露出度が高いが、ララが着ると何の違和感もなく可愛く見える。

「そだよ！ えへへ、トシアキに可愛いって言って貰っちゃった」

そう言って微笑みながら皆のいるところまで戻って行った。

別に俺が言わなくてもクラスの男子たちが言ってくれるだろうに。

「あ、あの、結城君」

「どうした？」

そう考えていると今度は名も知らない女子生徒が声を掛けてきた」

「わ、私、変じゃないかな？」

彼女はウサギの格好をしているショートカットの女の子であった。

肌も白く綺麗でウサギの格好が良く似合っている。

頬だけ赤いところもウサギを連想させていて本当に可愛く見える。

「ああ。全然変じゃない。可愛くて似合ってると思うぞ」

「か、かわっ!？」

俺の言葉を聞いた女子生徒は赤かった頬をさらに真っ赤にして俯いてしまった。

頭から湯気のようなものが出ているが、大丈夫なのだろうか。

「川? って、おいおい、大丈夫か？」

「っ!?!? ご、ごめんなさい!?!」

額に手をあてて熱を測ろうとしたところ、彼女は驚いて謝りながら皆のところへ走って行ってしまった。

その後の会話を聞いていると彼女の名前は白雪冬華という名前らしい。

「しかし……………」

こうして見てみるとこのクラスの子の可愛さはなかなかのものだと思う。

普段着ていない服装だからそう感じるのかもしれないが。

「どうだ、トシアキ」

「何がだ？」

そんなことを考えていると一度離れた猿山が再び俺のもとへとやって来た。

「とぼけるんじゃないよ。 アニマル喫茶、お前が書いたんだろ？」

「……………」

この前の投票では名前を書かずに案件だけを書いて提出したはずなのだが。

「俺が中学からの付き合いのお前の字を見間違えるわけないだろ。伊達に宿題を写させて貰ってないぜ！」

「そこは威張るところじゃないだろ」

そんな感じはしていたので、先ほども筆箱を投げたのだ。

というか、そんなことを言うならもう宿題見せてやらんぞ。

「しかし、トシアキは女に興味がないと思ってたが………仲間が増えて嬉しいぜ」

「勿論興味はある。ただ、俺の好みの奴が今までいなかったただだ」

とりあえずそういう風に言っておくとする。

もっとも、最近になって気になる奴らが出てきたのだが、そんなことは表情には出さない。

「そうなのか、ちなみにトシアキの好みって？」

「それより、実行委員。早く次のこととか決めないと先に進めないぞ」

答えたくないなので猿山にそう言って教卓へ行くように追い払う。

「ん？」

猿山を追い払った時に一瞬、俺は窓の外から視線を感じた。

そちらを見ると、木に登ってこちらの様子を窺う女子生徒がいた。

「見ているのは……このクラスか？」

視線が俺に集中しているわけではないので、放っておいても大丈夫だろう。

だが、あの時の男のように何かする可能性もある。

「……………一応、釘を刺しておくか」

俺は楽しそうにしているクラスメイトたちに気付かれないようにソツと教室から出て行った。

くおまけく

私は授業が行われている教室を抜け出し、木に登り目標がいる教室を覗き見た。

「沙姫様、どうやらこのクラスはアニマル喫茶というものをするそうです」

そこで主人である沙姫様の指示通り、目標がいるクラスの出し物を調べていた。

目標の人物というのは最近、この学園に転入してきたという一年のララ・サタリン・デビルークのことである。

彼女の動向を報告するため、私は持っていた小型無線機を使い沙姫様へ連絡した。

「何やらララという一年が、男子が大喜びしそうな衣装を着ています」

「なんですって!？」

私の耳元についているイヤホンから沙姫様の大きな声が聴こえて来る。

しかし、沙姫様は確か授業中のはずだが、大丈夫なのだろうか。

「それと・・・・・・っ!？　いない!？」

他にも少し気になることがあったので報告しようと再び教室を見たが、元凶である生徒の姿が消えていた。

やる気がなさそうで周りからも少し浮いていた男子生徒だが、確かに一瞬目が合った。

教室から離れた、しかも木の葉に姿が隠れているはずの私と視線が合うなどまず普通ではない。

「どうかしましたの？」

耳元から沙姫様の不思議そうな声が聴こえて来る。

「い、いえ。　なんでもありません」

報告しようと思っていた対象が消えてしまったため、慌てて誤魔化すことにした。

「そう？　なら、もう戻ってらっしゃい。　報告御苦労さま」

「はい、失礼します」

私はそう返事をして無線機の電源を切った。

覗き見るために使っていた双眼鏡をしまい、耳に付けていたイヤホンを外す。

「探していたのは俺のことか？」

そうして気を抜いた瞬間、目の前に逆さまになった男子生徒が現れた。

「きゃっ!？　えっ・・・・・・・・」

普段なら人の気配をよんで行動する私だが、任務を終えた後だったため油断していた。

驚いた反動で乗っていた木の枝から身体が落ちて行くのがわかってしまう。

「あっ、ヤバい」

そんなときなのに何故だか目の前に現れた男子生徒の声だけははっきり聴こえてきた。

状況が状況だったため、私は落ちた時の衝撃に備えて目を瞑る。

「悪い、驚かせるつもりはなかったんだ」

しかし、私が予想していた衝撃は一向に來ず、優しい感じの風と先ほど聞いたばかりの男子生徒の声が聴こえてきたのであった。

私はギュッと閉じていた目をゆっくりと開けてみる。

「あっ……………」

目の前には先ほどまで探していた一年の男子生徒が心配そうな表情をしてコチラを見つめていた。

そして、この目の位置から自分がどんな状態にいるのか想像し、頬に熱が集まってくる。

「は、放せ！　自分で立てる！」

「お、おい！？　暴れるな！　下ろすから、落ち着け」

ゆっくりと地面に下ろされた私は素早く彼から離れ戦闘態勢に入る。

私の視線に気づいた彼だ、何か武術を修めていてもおかしくはない。

だが、そんな彼は何もせずにその場で両手を上げて首を振った。

「……………助けてくれて感謝する。　私は二年の九条凜だ」

そんな様子を見せられてはコチラも警戒を解くしかない。

それに結果として助けられたのだ、礼は言わねばなるまい。

「俺は一年の……って言わなくても知ってるか。　どうやらさっきは俺を探してたみたいだし」

やはり私の視線に気づいていたらしい彼は、結局名を名乗らなかった。

もともと、天条院グループの情報をもってすれば簡単に調べがつくはずだ。

「気付いていたのか」

なので私は普通にそう返し、特に彼の名前を聞くことはしなかった。しかし、私は二年なのだが彼は年下ではなかったのだろうか。

「まあな。　それよりどうして俺たちのクラスを見てたんだ？」

別に言っても問題はないはずだが、沙姫様の許可なしに勝手なことは出来ない。

それに、彼が沙姫様に危害を加えないとも保障出来ないため迂闊なことは言えない。

「すまないが、それは言えない」

私がそう答えると彼は興味をなくしたのか、背を向けて歩き出した。

「んじゃ、いいや。それじゃあ、またな」

あまりの呆気なさに私はつい彼の背に手を伸ばしてしまふ。

しかし、結局声を掛けることなく、彼はそのまま校舎へと消えて行った。

「私は何をしているのだ………」

伸ばしたままの自分の右手を見つめ、私は一人でそう呟くのであった。

第十一話

「さあ、いよいよ彩南祭まであとわずか！ 各自、与えられた準備をしっかりやってくれ！」

実行委員の猿山の言葉にクラスの皆は準備のためにそれぞれの場所へ散って行く。

彩南祭が近くなってきたため、最近の授業は午前のみで昼飯を食べてからは放課後まで準備時間となっていた。

「というか、やはりこの高校は遊んでばかりじゃね？」

いくら文化祭のためとはいえ、一週間も前から午後の授業を準備時間にするとか今まで行ったことある世界でもなかったことだ。

もともと、この世界ではそれが常識なのかもしれないが、勉強時間をそんなに削る必要もないと思う。

「トシアキ、一緒に準備しよう？」

文化祭という行事を楽しみにしているのか、笑顔のままウラが声を掛けてきた。

俺自身、なにをすればいいのかわからなかったのでウラの提案はありがたい。

「ウラちゃん、こっちこっち！」

俺がララに返事をする前に猿山がララを別の場所へ呼んでしまった。

「トシアキにはもう、別の作業があるんだ」

「えっ、そうなの？」

俺に確認を取ってくるララだが、俺もそんな話は初めて聞いたのだ。

困惑している俺を放って、猿山はララを別の場所へ案内する。

「ララちゃんはむこうのチームに参加してくれ」

そう言ってララを別の場所へ連れて行った猿山は俺のもとへ戻ってくる。

「というわけでトシアキ、教室の飾り付け頼むぜ。 西連寺と」

「わかったよ」

そんな猿山に言われた準備を行うため、俺は一人で作業している西連寺のところまで足を運んだ。

「・・・やだなあ」

「西連寺」

近づいてみると、ため息を吐きながら作業をしている西連寺の声が聴こえた。

何やら悩んでいるようだが、とりあえず準備を手伝うために声を掛

ける。

「えっ！？ あっ、結城君」

「猿山に言われて手伝いに来た。俺は何をすればいい？」

猿山には教室の飾り付けをしてくれと頼まれたが、何をどうすればいいか俺にはわからない。

そこで最初から作業をしている西連寺に指示してもらおうと思ったのだ。

「えっと、この飾りを上に付けてくれる？」

「わかった」

西連寺から渡された飾りを椅子に乗って、教室の上へ付けて行く。

下から西連寺が次の飾りを渡してくれているので楽に付けることが出来る。

「ところで、さっきは何が嫌であんなこと言ったんだ？」

黙々と作業を行うのもなんなので、先ほど西連寺が呟いていた言葉の理由を聞いてみた。

「えっとね、本番の時に着る衣装がちょっと………恥ずかしいから」

本当に恥ずかしいと思っているらしく、頬を赤らめながら俯いた西

連寺。

仲のいい糸岡や沢田のように割り切ればいいと思うのだが、そう簡単にはいかないらしい。

「そうか。俺は可愛くて似合ってると思ったんだけどな」

前のお披露目の時に西連寺とは目が合ったが、その時も本当にそう思ったのだ。

「えっ!？」

俺の言葉に驚いて顔を上げた西連寺と視線が合う。

丁度、話を聞くためにしゃがんでいたのだから近い位置で見つめ合ってしまった。

「でも、本当に嫌ならそう言えよ？ 猿山には俺から言ってやるし」

だが、真剣味を出すために西連寺から視線を逸らさずそう言うってやる。

「う、うん。でも、大丈夫。頑張るから」

俺の真面目な表情を見たためか、西連寺もそう言って頷いてくれた。といっても、見つめ合うのが恥ずかしかったのか、頬を染めてしまい最後の声は小さかったが。

「あっ、飾り付け用の布がなくなっちゃった」

「俺が買ってくるから、少しの間頼むな」

なんだか俺と西連寺にクラスメイトの視線が集中してきたので、俺はその場を抜け出して教室を出た。

教室を出て見ると目の前に巻き髪の可愛い女子生徒が俺の行く手を塞ぐ形で立っていた。

「ちょっと、そのアナタ！」

避けて通るつもりだったが、声を掛けられては仕方がない。

俺は声を掛けてきた女子生徒の前で立ち止まった。

「二年B組、天条院沙姫！ この私が付き合ってもよろしくてよ？」

「本当か？ なら頼むよ」

まさか学年が違う先輩が俺たちのクラスの買い出しに付き合ってくれるとは思っていなかった。

何処の店が安いとか、品揃えが良いとか俺にはまったくわからないから正直助かる。

「ほーほっほっ！ どうやら私の魅力がわかったようですわね！」

「ほら、いいから行くぞ。先輩」

買い物に付き合ってくれと言っていたのになかなか動こうとしないので、先輩の手を引っ張って俺は歩き出した。

「ちょ、ちよつと、そんなに慌てなくても……………」

後ろで先輩の慌てた声が聴こえるが、俺は無視して進む。

校門を出たところで目の前に大きくて長い車が止まっているのを見つけた。

「大きいな……………こんな車、どこの金持ちが乗ってんだよ」

「お疲れ様でした、沙姫様」

俺が眺めていた車からこの前に出会ったポニーテールの女の子が出てきた。

そして、俺の隣にいる先輩に言葉を掛けて頭を下げる。

「お荷物をお持ちしますね」

さらに反対側のドアからは眼鏡を掛けた女の子が現れ、先輩の鞆を持つ。

「……………」

どこの金持ちの車かと思えば、まさかこの先輩の車だったとは思わなかった。

「どうかしたんですの？」

「いや、なんでもない」

俺が哑然としていたのを見て先輩が声を掛けてきたが、俺は平然を装う。

「ん？ 君は……」

ポニーテールの女の子が俺の存在に気付く。

確か、二年の九条凛と名乗った先輩だったはずだ。

「どうも、九条先輩」

「むっ？ 君は……」

九条先輩は俺の呼びかけで気付き、そして最近会ったことを思い出したようだ。

「あら？ 凛と知り合いましたの？」

「まあ、色々あってな……」

途中に天条院先輩がそう尋ねてきたので、俺は含みのある言い方をして誤魔化す。

九条先輩も俺の答え方に特別なことは何も言ってこなかった。

ただ、俺の天条院先輩への話し方が気に入らないようでコチラを睨

んではいるが。

「まあ、構いませんわ。ところで、何処へ行くんですの？」

天条院先輩は特に気にした様子もなく話題を切り替えてきた。

俺としては普通にコンビニでも構わないのだが、安い店が他にもあるかもしれない。

「ちょっとクラスの出し物で布地を買いに行きたいんだけど」

「そんなことですか？ 綾」

「はい、沙姫様」

俺の言葉を聞いた天条院先輩は眼鏡を掛けた女の子にどこかに電話を掛けさせた。

そして数分もしないうちに大型のトラックが二台ほど目の前に到着し、荷台が上下にパカッと開いていく。

「おっ？ おおおお！！」

最初は意味がわからず首を傾げていた俺だが、荷台が開き終わるとそこには綺麗な布地が多彩に整然と並んでいたのだ。

「さあ、好きなものを好きなだけ持って行きなさい！」

どうやら先ほどの電話でこのトラック二台を呼んだらしい。

確かに大きくて長い車に乗るほどの金持ちならこのくらい簡単なだろうけど。

「えっと、いいのか？」

「何も気にする必要はありませんわ！ お付き合いする殿方の為ならはお安い御用ですわ」

お付き合いする殿方って、俺のクラスに居るのだろうか。

だが、教室の前で待ち伏せし、さり気なく俺たちのクラスを手伝おうとしている所をみるときっとそうなのだろう。

「サンキュー、助かる。これで皆、喜ぶよ」

とりあえず、そのクラスメイトの代わりにお礼を言っておくことにする。

勿論、こんな言い布地を貰うのだから笑顔での対応だ。

しかし、今までクラスの奴らにあまり興味がなかったけど、今度から気にしておくことにしよう。

「あっ……こ、これくらい簡単ですわ」

先ほどから大きな声で話していたからか、興奮で顔を赤くして最後には声が小さくなっていく。

そんな天条院先輩を横目に、今使っている布地を手取る。

「それじゃあ、これを貰って行くな」

「え、ええ。構いませんわ」

どこか上の空状態の天条院先輩だが、俺の言葉にはキチンと返事をしてくれる。

「ありがたいな、天条院先輩。お礼はまたいつか必ずするから」

教室では西連寺も待っているだろうし、ララや猿山が暴走しないか心配でもある。

そんなわけで俺は必要な布地を手にもその場から立ち去ることにした。

「お、お待ちなさい!」

「ん?」

再び大きな声で天条院先輩に叫び呼ばれたので俺は立ち止まって振り返る。

「わ、私のことは沙姫とお呼びなさい」

ふむ、どうやら一連のやり取りで名前を呼んでもよくなったらしい。せっかくなので別世界で出会った少女にしたことを沙姫先輩にもしてみた。

「それでは沙姫先輩、このお礼は今度必ず」

彼女の前で跪き、右手を引き寄せて手の甲にソツと口づけをかわす。

そして、今度こそ教室に向けて足を進めたのであった。

教室に戻った俺は暇そうにしている西連寺のもとへ布地を持って行く。

飾り付け用の布地がないのだから何も出来ないわけだからな。

「西連寺、布地持って来たぜ」

「あつ、結城君。おかえりなさい、早かったね」

俺に気付いた西連寺は笑顔で出迎えてくれて、傍まで駆け寄ってきた。

「ちょっと色々あってな……」

「色々？」

この台詞は今日で何回目だろうか。

そんなことを考えながら西連寺に持ってきた布地を手渡す。

「ほら、コレ。これで作業できるだろ？」

「う、うん。でもこれ、凄く良い布地だね」

流石は沙姫先輩、文化祭に使う材料でも良い品物を渡してくれたよ
うだ。

やはりこのクラスに沙姫先輩の想い人がいるのだろうか。

「まあ、いいじゃねえか。早く準備してしまおうぜ」

「う、うん」

沙姫先輩の事情は話すことではないので俺は無理矢理話を打ち切って準備をするように促した。

西連寺もそれ以上深くは聞いてこなかったので、二人で飾り付けに取りかかることになった。

しばらく経った後、飾り付けを終えた西連寺は他のクラスメイトの手伝いをしている。

俺は何をしているかと言えば、沙姫先輩の想い人探しだ。

「・・・・・・・・」

もっとも、やることが無くなったので暇を潰すためにしているだけだ。

しかし、眺めていてもそれらしい人物は見当たらない。

俺は雉島、犬飼、猿山くらいしか話す男はいないのでよく知るわけもないのだが。

「・・・・・・・・帰るか」

皆が楽しそうに文化祭の準備をしている様子を見て、この世界の俺だったらあの中に入っていたのかと考えてしまう。

今の俺が楽しんでも構わないのだが、ここにいる皆に申し訳ない気がする。

なぜなら、俺は本当の『結城トシアキ』ではないのだから。

くおまけく

私は彼が去って行った背中を見つめてしばらくその場に佇んでいました。

我に返ったのは凜と綾に呼ばれたからです。

「沙姫様」

「沙姫様？」

始めは綾からの呼びかけ、二度目は凜が私の顔を覗きこむような形で声を掛けてようやく気付きました。

「えっ、あつ、な、なにかしら？」

「彼が戻ったため呼び付けたトラックは撤退させました」

「そ、そう………」

綾からの報告に私は頷くだけにとどめます。

それにしても、先ほどから彼の笑顔が頭から離れませんわ。

「沙姫様、お車へお乗りください。今日はこれから先生方とのお食事会があります」

凜はメモ帳を見つめながら私のスケジュールを教えてくださいます。

先生とのお食事会と言っても、お父様が参加出来なくなったから変わりに行くだけのものなのですけど。

「そう言えば凜、彼の名前はなんていうのかしら？」

最初は彼のクラスに転入してきたララ・サタリン・デビルークとかいう人物が私を差し置いて学園で一番魅力がある生徒だと聞いたので調べたのがきっかけでした。

彼女の婚約者である彼を私が誘惑すれば彼女より魅力があると証明できるだろうと考えていたのです。

「はっ、彼の名前は結城トシアキ。 彩南高校一年の生徒です」

「結城、トシアキ様……」

廊下でトシアキ様を呼びとめたときは何とも思っていませんでした。でも、ララという人物に勝つため、私はトシアキ様と付き合うことにしました。

返事をくれたときは彼女に勝ったという気持ちが大きく、つい彼の望み通りに物資を渡したのですけど。

「・・・・・・・・」

車に乗り込んだあと、綾と凜も共に乗り込みます。

そして静かに発進した車内で私はあの時の笑顔を思い出します。

去り際に触れたトシアキ様の手と唇の感触もまだこの手に残っています。

「トシアキ様・・・・・・・・」

お父様、お母様。

私、天条院沙姫は年下でもどこか頼りになる殿方に恋をしてしまったようです。

第十二話

彩南高校の文化祭、彩南祭当日。

俺たちのクラスには沢山の客が押し掛けていた。

といっても客は男性客ばかりなのだが。

「いらっしやいませ！ アニマル喫茶へようこそ！！」

そう言いながら客を出迎えるのは露出度の高い動物のコスプレ衣装を着たウチのクラスの女子たちだ。

しかも、入口付近にはララ、靱岡、沢田、西連寺とかなりレベルの高い女子を配置している。

「猿山が考えそうなことだな」

配置や役割を決めたのは勿論、実行委員の猿山だ。

男子は裏方に徹しており、列の整理や飲み物や食べ物物の準備を行っている。

ちなみに俺はというと。

「君を注文する！！」

「「さすが弄光センパイ！ いきなり口説きにかかってるぜ！！」」

「悪いが、ウチのメニューには店員なんて載ってないんだよ、先輩」
こういう客や店員に執拗に声を掛ける迷惑な客の排除が仕事だった
りする。

「ん？ げっ！？ お前は、結城！？」

「ナンパなら他でやってくれ」

俺の顔を見て表情を引きつらせた先輩の首根っこを掴み、出口へと
案内する。

「「さすが弄光センパイ！ いきなり撃沈させられたぜ！！」」

「アンタたちもだよ」

先輩を廊下へ放り出した後、叫んで迷惑な取り巻き二人も廊下へ放
り出す。

少しはこの室内の騒がしさもマシになっただろう。

もつとも、女子の衣装に興奮している男たちが色々とうるさいが、
店員に迷惑を掛けていないので俺は何もしないことにする。

「ゆ、結城君、その、ありがとう」

ウサギの格好をしている白雪がそうお礼を言ってくれる。

「気にするな、これが俺の仕事だ。 また困ったことになったら俺
を呼べ、一応見回ってはいるが、何かあってからじゃ遅いしな」

「う、うん。それじゃあ、私は戻るから」

「おう、頑張れよ。白雪」

白雪は慌てた様子で席に着いたばかりの客のもとへ注文を取りに行った。

俺は引き続き室内の見回りを継続するためあちこちに視線を向ける。

「トシアキ、交代の時間だぜ」

「おう、わかった」

猿山の指示が出たので、俺は教室の裏スペースへ引っ込むことにする。

クラスメイトの鞆や休憩時に読んでいたであろう雑誌が散らばっている。

「まったく、休憩するのは自分たちだけじゃねえんだぞ」

俺は一人でそう呟きながら自分の座るスペースを確保し、傍にあった雑誌を手を取った。

「お疲れ様、結城君」

そんな俺の所に西連寺が飲み物を持って来てくれた。

「サンキュー」

「アニマル喫茶、思ったよりも楽しいね」

俺が受け取ったジュースを飲んでみると西連寺がチラリと喫茶スペースを見ながらそう言った。

最初と違って、着ている黒ネコの衣装は恥ずかしくなくなったらしい。

「楽しめてるならよかったじゃねえか」

「うん。最初は恥ずかしくてイヤだったけど、慣れて来ると楽しくなったの」

そう言いながら俺の目の前で猫のポーズを取る西連寺。

確かに、慣れてしまえばそんなに気にならないのかもしれない。

猫耳と尻尾もなかなか似合っており、本人も気に入ったのなら良いだろう。

「そういや、休憩って俺だけなのか？」

「そうだと思うよ？ 結城君、朝からずっと当番だったから皆と時間ズレてるんだよ」

確かに俺は朝からずっと休憩はなかったが、他の皆は交代していたらしい。

「猿山の奴、俺だけこき使いやがったな」

「ん？ 呼んだか、トシアキ」

俺の言葉に返事をしたのは傍に居た西連寺ではなく猿山だ。

どうやらタイミング良くこっちに顔をだしたらしい。

「俺だけ休憩時間がなかったことを西連寺に聞いてたんだよ」

「悪いな、トシアキは一人で教室をカバー出来るからかなり助かってたぜ」

交代の時間を忘れていたわけではなく、知っていて俺を長時間働かせたらしい。

これは一度、拳で語り合う必要があるかなと考えていたのだが。

「そういや、トシアキ。 お前にお客さんだぜ？」

「客？」

拳で語り合うのはもう少し後になりそうだ。

しかし、俺に客とは珍しいこともあるものだ。

学校内には特に知り合いは居なかったように思ったのだが。

「やっほー、トシ兄い。 来たよ」

「み、美柑!？」

猿山の後ろから顔を覗かせたのはなんと妹の美柑であった。

確かにこの学校の文化祭は土曜日だから学校は休みなんだろうけど。

「トシ兄いの働いてる姿を見たかったんだけど、もう終わった感じ？」

「今は休憩中だ。　また働くこともある………のか？」

俺自身のシフトを聞いてなかったので、傍にいる西連寺に聞いてみる。

「えっと、確かあったような………」

「おう、トシアキは一時間後から最後まで入ってるぜっ!？」

当たり前だが西連寺は知らなかったようで猿山が変わりに答えてくれた。

が、結局俺の休憩時間は一時間しかないという事実には、持っていた雑誌を投げつけてやった。

「痛いだろ!　トシアキ!!!」

「うるさい!　なんで俺の休憩時間が文化祭中に一時間しかねえんだよ!!!」

というわけで、結局拳で語り合うことになった俺と猿山。

「で、俺はあと一時間休憩らしいけど、美柑はどうする？」

勿論、俺が猿山をボコボコにして適当な位置に寝かしてある。

西連寺も喫茶の方が忙しくなったため俺と猿山のことを気にしつつも戻って行った。

「トシ兄いはどこも回らないの？」

「ああ。最後まで働かされるなら今のうちに身体を休めておきたいからな」

そう言いながら俺は壁に背を預ける。

とりあえず、残りの時間で眠っておこうと考えたからだ。

「じゃあ、私もここにしようかな」

「それならば美柑ちゃん！ この衣装を着てみないか！！？」

美柑の呟きを聞いた猿山が突然、起き上がってアニマル喫茶の衣装を持ってきた。

「……………高校生のサイズじゃ、美柑は着れないだろう」

「ふっふっふっ、こんなこともあろうかと美柑ちゃんのサイズに合わせて……………へぶっ！？」

不穏な発言をした猿山にはそこらへんにあった鞆をそのまま投げつけてやった。

というか、他人の妹のサイズを知っていると犯罪だろうが。

「と、トシ兄はどう思う？」

猿山が倒れた拍子に落とした衣装に視線を向けながらそう聞いてきた美柑。

その質問は他人のサイズを知っていた猿山についてなのか、その衣装が美柑に似合うのかという意味なのか。

「……………美柑は可愛いし、似合うんじゃない？」

とりあえず、俺と視線を合わせていないことから後者であると判断して答えておく。

「かつ、かわっ!？」

「川? まあ、いいか。俺は寝るから、ゆっくりしていけよ」

俺はそう言ったあと、目を閉じてそのまま意識を暗闇に沈めるのであった。

「おい、トシアキ。交代の時間だぜ」

俺が目を開けて最初に見たのは笑顔が眩しい猿山の顔だった。

というか、何故そんなに満面の笑みなんだお前は。

「あ、ああ。 ん？ 美柑はどうした？」

俺が眠るまで傍にいたはずの美柑の姿がない。

確か、俺の働いてる所を見てから帰ると言っていたような気がするんだが。

「それより早く行ってくれ、これでも三十分遅れさせてやったんだからな」

そう言われては仕方がない。

俺は立ち上がろうとして、膝の上に置いてある自分の鞆に気付く。

「鞆なんて抱いたまま寝たか？」

自分の鞆を見つめながらそう呟く。

しかも、チャックが微妙に空いていたので中身を確認するために開いた。

「ぶっ!？」

そこには先ほどまで美柑が着ていた服とスカート、それから水色の下着が入っていたのだった。

「なんで美柑の服が・・・・・・・・まさか!？」

俺は眠る前にあったやり取りを思い出しながら、とりあえず表の喫茶スペースへと足を進めた。

「なっ!？」

喫茶スペースに行ってみると、予想していたが、それを上回る光景が広がっていたのである。

「いらっしやいませ! アニマル喫茶へようこそ!！」

豹のララ、リスの沢田、猫の西連寺、狐の粂岡、ウサギの白雪はま
だわかる。

同じクラスメイトでもっとも衣装が似合っていた五人だからだ。

だが、なぜだか犬の美柑と虎の沙姫先輩、牛の凜先輩と鹿の綾先輩
がいた。

「・・・・・・・・」

「あっ、トシ兄い」

俺が出てきたことをいち早く美柑が気付き、こちらに駆け寄ってくる。

その様子を見ると、確かに飼い主を見つけた忠犬に見えなくもない。

「えへへ……どう？ 似合う？」

「あ、ああ、似合ってるけど、なんで？」

予想していた通りに美柑は猿山が容易した衣装を着ていたのだ。

確かに犬の姿は似合っているのだけど、わざわざ手伝う必要はないと思うのだが。

「トシ兄いの働きっぷりを見るまで暇だったからお手伝いしたんだよ」

その気持ちは嬉しいが、まだ小学生の美柑にこんな格好をさせるのはどうかと思う。

衣装を用意した猿山は後でもう一度ボコボコにしておくことにしよう。

「トシ兄いもその衣装、似合ってるね。その、か、カッコイイよ」

ちなみに俺が着ている衣装は動物とは全く関係ない真っ黒なスーツである。

一応、監視員としての服装なんだが、一部の女子からの要望でコレになったらしい。

「ああ、ありがとう」

とりあえず褒められたので、お礼に俺は美柑の頭を撫でておくこと

にする。

その際に頭に着いた犬耳がピクピクと動いた気がしたが、深く考えないことにしよう。

予想を上回った原因でもある三人の方へ俺は足を進めた。

「沙姫先輩たちもありがとうございます。飾りの布地に続いて、手伝ってもらって」

「も、問題ありませんわ」

美柑に続いて、上級生で自分たちのクラスの出し物もあるのに手伝ってくれてる先輩たちにお礼を言うておく。

やはり、このクラスに先輩の想い人がいるのだろう。

「ゆ、結城のその衣装もなかなかのものだな」

沙姫先輩の連れである凜先輩も俺の衣装を褒めてくれる。

「一応、付属のアイテムもあるんですけど、流石にこれはつけられなくって」

今朝、衣装を渡されたときに一緒に渡されたのだが、使わずに胸ポケットにしまっている。

「どうしてですか？」

同じく、沙姫先輩の連れである綾先輩が不思議そうに尋ねてきたの

で、俺は実際に付けてみせた。

「流石にこれはマズいでしょう？」

その付属アイテムとはサングラスであった。

真っ黒なスーツにサングラスを室内で付けてる人間なんか近くに居てほしくないだろう。

「・・・・・・・・」

俺の目の前に居る綾先輩はジッとコチラを見つめたまま何の反応もしてくれない。

「・・・・・・・・先輩？」

「はっ！？ あっ、その、えっと！！」

何やら赤くなりながら慌てた様子で手をブンブンと振る綾先輩。

「う、ごめんなさい！！」

そして、そのままの姿で走り去ってしまった。

「綾！？」

「ちょ、ちょっと！ どうかしまして！？」

凜先輩と沙姫先輩も綾先輩の後を追って教室から出て行った。

もちろん、アニマル喫茶の衣装を着たままで。

「・・・・・・・・大丈夫かな」

恩がある先輩たちのことが心配だが、仕事があるため追いかけるわけにもいかなかった。

仕方がないので、美柑に執拗に声を掛けている客のもとへ歩いていく。

「ウチの妹に何か御用ですか？」

「ひっ！？ な、なんでもありません！！」

そう言えばサングラスを付けたままだったと客に声を掛けてから気付いたのだった。

その後は何事もなく、無事に彩南祭は終了して俺は美柑と共に帰宅するのであった。

くおまけく

トシ兄いが眠ったあと、私は猿山さんが落とした衣装を手取る。

衣装はかなり露出度が高く、着るのは恥ずかしいと思っていたのだけど。

「トシ兄いが可愛いって・・・・・・・・」

先ほど言われた言葉を思い出すと自然と頬が赤くなってしまう。

トシ兄いの働く姿も見なかったことだし。

「暇を潰すだけでもんね。別に衣装を着た姿をトシ兄いに見て貰いたいわけじゃないんだからね」

この部屋には眠ってるトシ兄いと気を失っている猿山さんしかいないので、別に声に出す必要じゃなかったが、つい言ってしまったのである。

「着替えはここですとして・・・・・・・・」

そう考えてから鞆を顔にぶつけられて倒れている猿山さんを見る。

「・・・・・・・・えいっ!」

残っている他の鞆を全て猿山さんの顔の部分に全て乗せる。

これで猿山さんが起きても見られることはない。

「トシ兄いには・・・・・・・・べ、別に見られても問題ないし」

兄妹だから問題ないはずだ。

家族なんだから別に見られても大丈夫だよね。

「うう・・・・・・・・ちよつと、胸の部分が苦しいかも」

猿山さんはトシ兄いと中学から一緒に私と面識があったけど、さすがにピッタリのサイズは作れなかったようだ。

「よし、着れた！」

露出度が高いので下着は外して服と一緒に畳んで置いた。

そしてその服をトシ兄いの鞆の中に入れておく。

「さすがにこのままここに置いておけないからね」

私の服が入った鞆を眠るトシ兄いの膝の上に置いて、私は表へと向かっていくのであった。

第十三話

「あれ？ ララは？」

いつものように美柑に起こされた俺は寝起きのまま美柑に玄関でそう尋ねた。

ちなみに最近では起きて朝食を作っていたが、文化祭が終わってからやっていない。

「大事な用があるって出かけたよ？ 今日学校も休むって」

ララが学校を休むとは珍しいこともあるものだ。

デビルーク星から家出して来てこの星の学校を楽しんでいたと思っていたのだが。

「珍しいこともあるんだな」

「ララさんも忙しいんだよ、きっと。じゃあ、行ってきます」

靴を履き終えた美柑はそう言い残して学校へ出かけて行った。

俺も遅刻しないように素早く準備を整えて家を出る。

「あれ？ アイツ、結城だよな。隣にララちゃんがないような」

「なんか、今日は休みらしいぜ」

周りからの視線が俺に集中しているのがわかる。

確かに最近はララと一緒に登校していたが、俺とララがセットになっているわけではない。

「おはよう、結城君」

周りの男子たちの会話を聞きながら通学路を一人で歩いていると、前から声を掛けられた。

声の相手を確認すると西連寺がコチラに歩み寄ってくる。

「おう、西連寺か。おはよ」

俺は挨拶を返しながら学校へ向かう歩みを少し緩める。

西連寺も俺の隣に並び、一緒に学校へ向かって歩き出す。

「ララさん、今日はどうかしたの？」

「ああ、なんか用事があって朝早く出かけたみたいだな」

俺が美柑に起こされた時には既に居なかったので、おそらくそうなのだろう。

「そうなんだ……」

西連寺はそう返事をして、そのまま黙ってしまう。

俺も話題となることが特に思いつかなかったなのでそのまま無言で歩

き続ける。

「あ、あの、結城君！」

「ん？」

先ほどの会話の時より大きな声で西連寺に呼ばれたので、立ち止まって振り向いた。

「これを・・・・・・・・」

振り向いた俺に西連寺は少し大きな目の紙袋を手渡してきた。

それを受け取った俺は何なのか確認するため、中身を取り出した。

「ジョウロか？」

大きくて水が沢山入りそうなシルバーのジョウロが中に入っていたのだ。

「うん。前に結城君、自然が好きって言ってたから、家でも植物とか育ててると思って、その・・・・・・・・迷惑だった？」

手を目の前で弄びながら、上目遣いで俺の様子を窺う西連寺。

「い、いや・・・・・・・・嬉しいよ。サンキューな、西連寺」

なかなか可愛い仕草に俺は少し取り乱してしまったが、悟られないように笑顔で礼を述べる。

「・・・・・・・・よかった」

俺の笑顔で感謝の気持ちがキチンと伝わったのか、西連寺も笑顔で返してくれた。

その後はいつもと同じように学校で授業を受けて放課後に帰宅する。

そう言えば、学校で白雪からズボンのベルトを貰った。

聞いた話によると、デザインが気に入って購入したが男物だったらしい。

俺的には気に入ったものなら男物も女物も気にしなくてもいいと思うのだが。

本人は気になったらしく、俺に渡してくれることになったのだ。

というわけで鞆の他にジョウロとベルトを別の袋に入れて家にたどり着いた。

「・・・・・・・・」

家にたどり着いた俺だが、玄関のドアの前で立ち尽くしていた。

前にもこんなことがあったような気がするが、深く考えないことにする。

「玄関に三人・・・・・・・・いや、四人か」

この時間帯に家に居る人間は美柑だけのはずだ。

仮にララが戻っていたとしても後の二人の説明が付けられない。

「まさか、父親と母親がいるんじゃないだろうな」

まだ見ぬ両親が居るかもしれないという可能性に俺は少し焦ってしまふ。

もし、俺が本当の『結城トシアキ』ではないとバレたらどうなるのか。

「……………考えても仕方ねえ、行くか」

腹を括って玄関の扉を開け放つ。

「トシアキー！ー！ 誕生日おめでとー！ー！！」

玄関に入った瞬間、ララが満面の笑みを浮かべて俺に抱きついてきた。

慌てて俺は受け止め、先ほどのララの発言を思い出す。

「おっと……………誕生日？」

「やっぱり忘れてたんだね、トシ兄い」

俺の困惑した顔を見た美柑がそう言って呆れた表情を浮かべる。

「今日はお前の誕生日だろ？」

その呆れた表情を浮かべる美柑の隣で額に鉢巻きをした大男がそう言った。

もしかして、もしかすると、この人物が『俺』の父親なのか。

「………そういえば」

俺自身の誕生日は四月四日なのだが、『俺』の誕生日はどうやら今日らしい。

とにかく、それらしく振舞っておけば何とかなりそうだ。

「ねえ、トシアキ。私、プレゼント用意したんだよ」

「プレゼント？」

その単語で思い出したのは今日の西連寺と白雪からの貰い物だ。

もしかすると二人とも、今日が『俺』の誕生日だと知っていたのかもしれない。

「ララ様はトシアキ殿へのプレゼントを探すために今朝早くから出掛けられていたのです」

デビルーク星の王室親衛隊長であるザスティンが横からそう教えてくれる。

どうやら玄関で感じていた気配はこの四人だったようだ。

そうなるとうやうや話題に出ない母親の存在が気になるのだが。

「プランタス星にだけ咲くレアな花なんだよ。どうしてもトシアキにプレゼントしたくって」

照れた様子でそう言ってくれるララに嬉しさを感じながら、レアな花に少し興味が湧く。

「庭に置いてあるから早く見て！」

「ああ………」

ララの後を付いて窓から庭へ出ると今朝にはなかった巨大な花が咲いていた。

というかこれは花なのか。

なにやら手のような枝と花のような顔があるように思えるのだが。

「どう？ トシアキ。可愛いお花でしょ？」

「………そうだな」

世の中には変わった動物も存在するのだから植物もあってもおかしくはない。

見たところ、この世界の『精霊』からも受け入れられているので特に害はないだろう。

あとは俺の気持ちの問題だ、花として見る気持ちの問題だけだ。

「プレゼント、ありがとな。　　ララ」

「うん！」

俺の感謝が伝わったようでララは嬉しそうにそう返事をしてくれた。

その後は俺とララ、美柑に親父、それからザスティンと共に美柑が腕によりを掛けて作ってくれた夕食を美味しく頂いた。

後、余談になってしまいが、夕食を食べている途中に郵便物が届き、中には天条院グループ系列の店で割引が効くシルバーカードと男物の香水、そして何故か小太刀が入っていた。

「先輩も誕生日知ってたんだな。　　けど、何故に小太刀？」

自室のベッドで横になりながら俺は呟く。

今度、会ったときにお礼を言っておかないとな、と考えている内に俺は眠りに付いたのであった。

『俺』の誕生日から数日が経過したある日のこと。

ララと一緒に通学路を歩いているのだが、何やらララの様子がおかしい。

いつもならば、楽しそうに笑みを浮かべながら話しかけてくるのだが、今日は静かにスタスタと歩いているのだ。

「・・・・・・・・別に静かに登校するのが嫌な訳じゃないんだけどな」
嫌なわけでは勿論ない。

ないのだが、いつもと違うことに少し調子が合わないのだ。

「やっほー、ララちい。 おっはよー！」

別の道から声を掛けてきたのは沢田である。

隣には仲の良い西連寺と粂岡の姿もある。

「おはよう。 結城くん、ララさん」

「おう、おはよ」

「おはようございます。 春菜さん、里沙さん、未央さん」

俺も挨拶を返して再び歩き出そうとしたところで思わず足を止めてしまった。

ララの挨拶がいつもの元気な挨拶ではなく、どこか他人行儀な挨拶だったからだ。

「さ、行きましょう。 遅刻してしまいますよ？」

驚いて足を止めてしまったのはどうやら俺だけではないらしく、西連寺も糸岡も沢田もララの言葉遣いに驚いていたようだ。

だが、ララはそんな俺たちを気にすることなく、そう言って足を学校へ進めた。

「・・・・・・・・なにかあったのか？」

先に進むララの後ろ姿を見つめながら俺は小さくそう呟いた。

怪我なら治せないこともないが、病気では俺にはどうしようもない。

原因がわからなければ手の出しようがないからだ。

怪我なら目に見えている傷を塞いだりすることは出来るのだが。

「ああ、ララちゃん！ 今日君は美しい！！」

再び違和感を覚えたのは休み時間の時であった。

実験室での授業が終わり、教室へ戻っている途中にレンがララへ近づいていく。

「その美しさはまさに宇宙の宝石！ いや、神の芸術だよ！！」

前に屋上で宣言されてからレンはララによく話しかけるようになっていた。

もっとも、ほとんどララの感心を掴んでいる所は見かけなかったが。

「っ!」

傍で様子を窺っていると、ララが突然顔を赤らめて俺の後ろへ身を隠した。

「ララちゃん!」

「やだ……恥ずかしいからやめてください」

俺の後ろから顔だけを出して、本当に恥ずかしそうな表情で訴える。そのララの言葉にショックを受けたようで、レンは泣きながら廊下を走り去って行った。

「……やっぱ、何かあるな」

そう確信した俺は次の授業が始まるのを無視してそのままララを屋上へ連れ出す。

「なんでしょう、トシアキ……お話って」

屋上の手すりに背を向けたララは俺の方へ身体を向けて俺が連れ出した訳を聞く。

しかし、俺とは目を合わそうとせず、視線は下に向いたままであった。

「なあ、ララ。今日のお前……」

そこまで言った時、後ろから楽しそうに『精霊』たちに身体を押さ

れるのを感じた。

と言ってもそんなに強いものではなく、あくまで風が吹く程度であったが。

「あっ・・・・・・・・」

だが、そんな程度でも布生地は簡単に揺れてしまう。

ララの制服のスカートが先ほどの風でフワッと浮いてしまったのだ。

「っ!？・・・・・・・・見ました？」

まさしく風のイタズラによってララのスカートの中身が見えてしまう。

ララは慌ててスカート押さえたが、俺の目にはしっかりと桃色が見えてしまっていた。

「あ、ああ。悪い」

「もう、トシアキのエッチ」

普段、裸でベッドに潜り込んできたり、風呂上がりにバスタオル一枚で歩きまわる奴の台詞には聴こえなかった。

だが、いつもと違うギャップに俺もなんて言っているのかわからなくなってしまう。

「・・・・・・・・」

いつもならちゃんと服を着ろ、と注意することはできるのだが、両手で頬を押さえて恥ずかしがるララを見ていると言葉が何も出てこない。

これが婚約者としての自覚を促すテクニックだとしたら俺は完全にやられてしまった感じだ。

「トシアキ？」

俺が何も言わなくなったのが気になったのか、顔を覗き込んでくるララ。

いつもと変わらない行動だが、俺の心臓はいつもより大きく鼓動する。

「ラ、ララ。 お前・・・・・・・・」

「どうやら彼女、『コロット風邪』のようね」

突然、背後から声が聴こえ俺は慌てて振り向いた。

こんな近くにいるのに気配を感じられなかったのは俺が平常心でいなかったからか。

それとも、背後からの声の主が俺より実力者なのか。

「・・・・・・・・アンタは？」

後者であることを警戒して、ララを庇う様にしながらそう問いかけ

る。

「私は保健教諭の御門よ。 あとはこの星の人間ではないってことも言ったほうがいいかしら」

この星の人間ではないということは、ララと同じで宇宙人か。

彩南高校の保健の先生は宇宙人だったってことか。

「なるほどな。 で、『コロット風邪』ってのは？」

「微熱に伴って性格が全く別人に変わってしまう症状が現れるの」

全く別人に変わるね、確かに今までの行動を思い出すと思い当たる。 試しにララの額に手を置いてみると若干、熱があるように感じられる。

「確かに微熱がありそうだな。 で、治す方法は？」

「コレをあげるわ。 私が調合した風邪薬よ」

俺は紫色の液体が入った小瓶を手渡される。

「本当なら報酬を貰うところだけど、カワイイ生徒からお金は貰えないからね」

「……………ありがとうございます、御門先生」

この薬が本当に効くのかどうかはわからないが、宇宙のことまで俺

はわからない。

ここは宇宙人である御門先生の言っていることを信じることにした。

「別にいいわよ。それじゃ、お大事にねお姫様。それと王子様」

そう言い残して屋上から御門先生は立ち去って行った。

その後に受け取った薬をウラに飲ませ、数時間後にはいつものウラに無事戻っていた。

ともかく、風邪が無事に治ってよかったと俺はソツと胸を撫で下ろすのであった。

くおまけく

屋上へ出た私は目的の生徒たちを見つける。

一人はデビルーク星の第一王女、ウラ・サタリン・デビルーク。

もう一人はその王女に認められた結婚相手、結城トシアキ。

調べたところ、結城トシアキの方はこの星、地球生まれの地球育ちで特に何か有るわけではなさそうなのだけれど。

「どうやら彼女、『コロット風邪』のようね」

私の発言に驚いたようで、警戒するような視線をコチラへ向けてくる。

その一瞬でお姫様を背中に庇う判断力はなかなかのものね。

「・・・・・・・・アンタは？」

コチラは知っているけど、アチラは私を知らないようね。

もつとも、この星の人間に存在を隠しながら生活するのが私たち宇宙人だしね。

知らないのは当然ね、それにしてもこの子の殺気は凄いわね。

「私は保健教諭の御門よ。 あとはこの星の人間ではないってことも言ったほうがいいかしら」

変に揉め事を起こして困るのはコチラなので私は包み隠さず話す。

どうやら少しは警戒を解いてくれたようで、話方もそれとなく変わっていく。

それにしてもこの子の殺気は下手な大人なら簡単に気を失ってしまうわね。

さすが、お姫様を選んだ相手ってことかしらね。

「別にいいわよ。 それじゃ、お大事にねお姫様。 それと王子様」

最後にそう言い残して私は屋上から出て行く。

本当は授業中だから教室へ戻りなさいと言いたかったけれど、彼の情報収集も出来たから特別サービスにしておきましょう。

今度からは薬の代金を請求しても払ってくれそうだし、今のうちに良い付き合いをしておくことにしましょう。

外伝2（前書き）

外伝なので少し短めですがご了承ください。

外伝2

「トシアキのバカーーー!!」

私はトシアキに向かってそう怒鳴ってから部屋を飛び出した。

トシアキを楽しませようと私の発明品を部屋で使ってみたら調子が悪くて爆発してしまった。

幸い、素早く気付いたトシアキが対処してくれたから怪我はなかったのだけだ。

「・・・・・・・・あんなに怒ることないのに」

トシアキの部屋から飛び出して来た私は川辺に座り込んでそう呟く。確かに部屋がめちゃくちゃになったけど、私はトシアキの為を思っ
てやったのに。

「ララさん？」

「あっ、春菜・・・・・・・・」

川辺で座っている私に声を掛けてくれたのは友達 of 春菜だった。

学校が休みなのに制服を着ているけど、何かあったのかな。

「どうかしたの？　こんなところで座って」

「春菜こそ、どうして制服着てるの？」

「私はテニス部の練習があったから、その帰りなの」

確か学校には部活という集まりがあつて、その種類によっては放課後や休みの日にも活動していたような気がする。

「そうなんだ……」

「ララさんはどうしてここに？」

私の質問に答えてくれたので、やっぱり私も答えるべきだと思うけど。

「……ねえ、春菜。今日、春菜の家に泊めてくれない？」

春菜の質問には答えず、私は春菜にそうお願いしてみる。

やっぱり、トシアキに怒られて家を飛び出したなんて恥ずかしくて言えないよね。

「えっ、あ、うん。大丈夫だよ。それじゃあ、行こっか」

結局、春菜の聞いてきたことには答えていないのだけけれど。

私が答えられないことだと思ってくれたのか、春菜は嫌な顔一つせずに私を連れて歩き出してくれた。

春菜の家に着いた時にはもう日が暮れていて、そのまま晩御飯の時間になった。

「この巨大しじみ美味しい！」

「ララさん、それはハマグリだよ」

このしじみはハマグリって名前なんだ。

私はハマグリをお箸で掴みながら考えを巡らす。

やっぱり、地球にあるモノの名前を覚えるのは難しいかも。

「しっかし珍しいねえ、春菜がウチに友達を連れて来るなんて」

そんなことを考えていると、料理を作ってくれた春菜に似た女の人
がこっちにやって来た。

「ララちゃん、だっけ？ この子、友達少ないから仲良くしてあげ
てね」

「春菜は私の大切な友達だから仲良しだよ」

「あら、そう！ よかったねえ、春菜」

私の答えた言葉に嬉しそうにした女の人は春菜と楽しそうに話し始
める。

話を聞いているとどうやらこの人は春菜のお姉ちゃんみたい。

そのままご飯を食べ終えた後は春菜の部屋に移動して色々と話をし
た。

「あれ？　これって・・・・・・・・」

話しているときにタンスの上に飾ってあった写真立てを見つけた。

そこには今の制服とは違う服を着た春菜と一緒にトシアキも写っている。

「あっ！　そ、それは中学の時のクラス写真だよ」

「へえ、春菜とトシアキって同じ中学だったんだ」

中学っていうのは高校の前に勉強をしていた場所。

私の知らない昔のトシアキを春菜は知ってるんだ。

「こっちの写真は・・・・・・・・トシアキがトロフィー持ってる」

「それは中学のクラス対抗リレーの時の写真だよ」

トシアキはクラス写真の時は端っこで不機嫌そうな顔で写ってるのに、リレーの時の写真は真ん中で笑っていた。

「その時は結城君がアンカーでバトンを貰ったときには最下位だったんだけど、最後にトップでゴールしたの」

そう言えばトシアキって普段はヤル気がなさそうだけど、何かの拍子で凄く真面目になるよね。

その時のトシアキってちょっとカッコいいなっているんだけど、こ

の時もそうだったのかな。

「そのリレーの点数でクラスが逆転優勝になって……あの時はカッコよかったなあ」

「っ!？」

春菜が最後に呟いた言葉を聞いて、ドキッと胸が熱くなる。

やっぱり、私が思ってたように春菜もその時はそう感じたんだ。

「二人とも、お風呂沸いたわよ？」

「どうする、ララさん。先に入る？」

春菜がそうやって聞いてくれたけど、私としては春菜と一緒に入りたい。

やっぱりお風呂は一人で入るより、皆で入ったほうが楽しいもんね。

トシアキは全然、一緒に入ってくれないけど。

「ううん、春菜と一緒に入りたい」

「えっ!？ 私と？」

私のお願いに驚いていた春菜だったけど、結局一緒に入ってくれることになった。

「……………ねえ、春菜」

「な、なに？」

シャワーを浴びていた春菜に私は湯船に浸かりながら呼びかける。

私の呼びかけに春菜は少し驚いた様子でコチラに視線を向ける。

「トシアキって私といってもつまんないのかなあ」

「結城君？」

春菜とお風呂に入っていることもあって、普段なら誰にも言わないようなことを聞いてみる。

「トシアキってあんまり笑わないでしょ？　もしかして楽しくないのかなあって」

「……男の子の考えてることは私にはよくわからないけど」

春菜はそう言いながら椅子に座って身体を洗い始める。

「でもね、それは別にラウさんと一緒に居るのがつまらないってわけじゃないと思うよ？」

私は湯船に浸かりながら春菜の話す言葉に耳を傾ける。

「だって、結城君は中学からそんな感じだったし。むしろ、今の方が楽しそうにしているように見えるけどなあ」

身体を洗いながらそう言った春菜の表情は私からは見えなかったけ

ど、なんだか悔しそうな表情をしているような気がした。

でも、私としても中学時代のトシアキのことを知っている春菜が羨ましく感じる。

「……なんか、春菜の方が私よりトシアキのことを見てるみたいだね」

「えっ！？　べ、別にそんなことないよ？　偶然、そう感じたただけだから」

春菜の方がトシアキのことを見てるっていうことは春菜もトシアキのことが好きなのかな。

私はもちろん大好きだけど、全然トシアキのことわかってなかったんだ。

「ねえ！　春菜！！　もっと中学の時のトシアキのこと教えて！」

「えっ、うん！」

もっともっとトシアキのことを知って、トシアキが楽しいことや嬉しいことを知ろう。

そうすればきっとトシアキも私のことをもっと好きになってくれるはずだから。

くおまけく

春菜の家に泊まってトシアキの色々なことを聞いた。

今から家に戻って、昨日のことをトシアキにちゃんと謝らないと。

「よう、家出娘。もう、気は済んだか？」

春菜のウチから出たところで突然、そう声を掛けられた。

驚いて視線を向けると、壁に背を預けてコチラを見つめるトシアキの姿があった。

「えっ、ト、トシアキ？」

「おう。探したぜ、ララ。いきなり家を飛び出したら心配するだろうが」

こっちに近づいてくるトシアキの顔はなんだか怒っていて、私は反射的にギュッと目を閉じてしまう。

「ふえっ!？」

「まったく、家出してウチに来て、そこからまた家出なんかすんなよな」

トシアキは私の頭の上に手を置いて乱暴にかき乱した。

ちょっと痛かったけど、トシアキが心配してくれたことが伝わってきた。

「う、うん。　ごめんなさい・・・・・・・・」

「ほら、帰るぞ」

相変わらずの表情でトシアキは先に歩き出す。

でも、後ろ姿をジッと見てみると所々汚れていたりして私を探してくれていたことがわかる。

「うん！」

そんなトシアキの姿を見て私はとても嬉しくなり、先に歩くトシアキの腕に飛び付いた。

飛び付いた時は怒られたけど、その後は何も言わずにそのまま家まで帰ってくれた。

第十四話

とある休日、俺は一人で街中を歩いていた。

ようやくクラスの奴らの顔を覚え、親父にも俺と『俺』の違いに気付かれなかった。

そんなことで心に余裕が出来たので自分が住んでいる街を見て回ることにしたのだ。

「やっぱり、何処の世界も人間の文化だったら似たようなものなんだな」

俺はこことは違う世界で育ったため、自然が多い方が好きなのだが。

「まあ、こんな世界も悪くないな」

一人でそう呟きながら歩いていると、視線の先に懐かしい物を発見した。

「おっ、たいやきじゃねえか。久しぶりに食べるかな」

前に居た世界の公園で初めてたいやきを食べたときには驚いたものだ。

なんせ、アンコとカスタード以外にカレーやチーズといった種類があったからだ。

もっとも、その屋台もメニューには載っていなかったので頼まない

と作ってくれなかったが。

「へい、いらっしゃい！ 何味にしましょうか？」

「とりあえずアンコとカスタードを五個ずつと、チーズとカレーを頼む」

店の前に立つと丁度、たいやきを焼いていた店員が声を掛けてくれた。

俺はメニューに載っている二種類とは別に載っていないものも頼んでみる。

「へい！ えっ？ チーズとカレーですかい？」

「ああ」

俺の注文を聞いた店員が景気良く返事をした後、驚いたように聞き返してきた。

確かにメニューに載っていないものを注文したら聞き間違いと認めて確認はするよな。

「わかりやした！ けど、お客さん。よくその二つがあるってわかりましたね？」

「つて、あるのかよ!？」

思わず突っ込みを入れてしまった。

まさかこの世界にもチーズ味とカレー味のたいやきがあるとは思わなかった。

もつとも、この世界でも注文を受けてから作るようなので数十分待つことになったが。

「まあ、数十分でこの味が食えるなら別に良いけどな」

アンコとカスタードのたいやきを袋に入れてもらい、俺はカレー味のたいやきを頬張りながら街中を歩き出す。

「ん？」

歩いていると視線を感じたので、ソチラの方へ俺は顔を向ける。

「フ、フェイト？」

「？」

前の世界に居た義妹の姿がそこにあったので、俺は思わず名前を呼ぶ。

しかし、本人ではないため、似ている彼女には首を傾げられてしまった。

「そりゃそうだよな。いくらなんでもここに居るわけねえし」

カレー味のたいやきを口に入れ、俺はチーズ味に手を付ける。

けれど、先ほど俺が間違って名前を呼んでしまった彼女からの視線

はずつと感じる。

「・・・・・・・・もしかして、たいやきが珍しいのか？」

義妹の方はたいやきの存在を知っていたが、全く別人の彼女は知らないのだろう。

俺のような知らない人に声を掛けられ、その人が変な物を食べていたら気になるに決まっている。

「えっと、たいやき食うか？」

間違って名前を呼んでしまった罪悪感もあった俺はコチラへ視線を向け続ける彼女にそう話しかけた。

ちなみに彼女に渡したたいやきは普通のアンコのたいやきである。

「・・・・・・・・地球の食べ物が変わっていますね」

モグモグと可愛らしく口を動かしながらたいやきを食べた彼女はそう呟いた。

「地球？」

彼女の発言に疑問を抱いた俺だが、彼女は何も答えずに俺の両肩にそれぞれ手を乗せる。

「あなたが、結城トシアキ・・・・・・・・」

「そうだけど、なんで俺の名前を知って・・・・・・・・っ!？」

彼女の言葉に返事をした後、肩に乘せられていた手がゆっくりと下がっていき、細くて白い手が獲物を切り裂く鋭い爪に変化した。

「っ!？」

「あっぶねえ……もう少しで切り裂かれる所だったぜ」

変化したその手で脇腹を裂かれそうになったので、咄嗟に反応して彼女の腕を掴んだのだった。

「…………ある方からあなたを抹殺するように依頼されました」

俺の手を素早く振り払った彼女は数歩下がってそう話してくれる。

というか、俺はついに命を狙われるまでになったのか。

今までは話や脅しで済んでいたのだが、どうやらそうはいかないらしい。

「恨みはありませんが、消えて貰います」

彼女の手は鋭い爪から今度は腕ごと大きな刃物に変化した。

ここで戦ってもいいが、他の人間に迷惑がかかりそうなので、俺は彼女に背を向けて走り出した。

俺の命を狙ってるのなら必ず追って来るだろうから、俺は何も言わずに走り続けた。

走り続けて向かったのは山にあるひと気のない神社だ。

そこにたどり着いた俺は振り返り彼女の姿を確認する。

「ちよろちよと逃げ回らないでください」

彼女は背中から生えた翼で飛んでおり、そのまま俺の向かい側に着地した。

地面に足を付けた後、背中から翼が消えたので俺は首を傾げる。

「別に逃げていたわけじゃないが……お前は鳥人か何か？」

「いえ、私は全身を自在に変化させる能力——変身能力をもつ暗殺者です」

暗殺者と言った彼女は身体を変化させることが出来るらしい。

しかし、そんなことなど今はもはやどうでもいいことだ。

「そうなのか……くっくくっく」

「何がおかしいのですか？」

俺はもう、彼女の言葉に答えている余裕なんてない。

なぜなら、久しぶりに身体を思いっきり動かして殺り合いが出来るんだからな。

「なんでもねえよ。 さて、殺り合おうぜ！」

今までは彼女からの攻撃だったので、今度は俺から攻撃することにした。

右手を上げて下に振り下ろす——手刀と呼ばれる行為をその場から動かずに行う。

「？」

確かに、距離が開いているので俺の行動は全く意味がないものに見えるだろう。

それが普通の反応なのだから、彼女が首を傾げているのもわかる。

「でも、俺は『魔法使い』なんだよ」

「っ!？」

突然、彼女の黒い服が裂けてそこから覗いた肌から血が出てきた。

そう、先ほどの俺の動作で風の『精霊』を彼女に向かって飛ばし、刃となって襲いかかってもらったのだ。

「なるほど、あなたも何か能力を持っているんですね。なら、手加減はしません」

「へっ、望むところだぜ！」

それから数時間が経ったようにも、数分しか経っていないようにも感じられた。

こんなに相手に集中し、時間感覚は薄れるほど戦ったのは本当に久しぶりだ。

お互いが傷付き、傷付け合い、気がつくとも最初の立ち位置へと戻っていた。

「あなたはプリンススを脅迫し、デビルーク乗っ取りを企てる極悪人だと聞きました。やはり、実力も備わっていますね」

「ん？ ちょっと待て、それは誤解だ。俺からララに近づいたんじゃないくて、ララが俺に近づいてきたんだぞ？」

また変な所で誤解が生じているようなので彼女の発言を訂正しておく。

「……ですが、理由はなんであれ、依頼されれば何でも始末する。それが私、『金色の闇』の仕事です」

なるほど、この金髪の可愛らしい暗殺者の名前は金色の闇というのか。

もっとも、可愛いのは姿だけで殺しの実力は充分に理解出来たんだ

けどな。

「何をやっているんだもん、金色の闇！ そんな相手にどれだけ時間をかけているんだ！」

しばらく戦いを中断していると、いつの間にか上空に変な機械が浮いていた。

アレが噂に聞く宇宙船なのだろうか。

その機械から光が射し込み、その光の中心に何者かが現れた。

「ジャジャーン！ ラコスポ、只今参上！ だもん！！」

「・・・・・・・・」

登場の仕方に呆れてしまった俺だが、ラコスポという人物の姿に驚いてしまう。

「結城トシアキ！ お前の所為でララたんがボクたと結婚してくれないんだもん！」

「いや、俺の所為って言われてもなあ・・・・・・・・」

俺はあまりの小ささに驚いてしまったのだ。

こんな奴があのだらと釣り合うのかと聞かれると聞かれた全員が首を横に振ることだろう。

「金色の闇！ お前も何やってるんだ！ 予定では結城トシアキを

とつくに始末しているはずだろう!!」

「ラコスポ、丁度よかった。私もあなたに話があります」

金色の闇も俺から意識を外し、依頼人と思われるラコスポに話しかける。

今が好機と言えそうなんだろうが、そういう手は真剣勝負をした相手にするものではないので俺も大人しくしていることにする。

「結城トシアキの情報、あなたから聞いたものとかかなり違うようですが」

そこまで言った金色の闇はチラリとコチラに視線を向け、何かを確認してから再びラコスポへ向き直る。

「目標に関する情報は嘘偽りなく話すように言っただけです。まさか、私を騙したわけではありませんよね？」

「な、なんだもん、その目は！　ボクたんは依頼主だぞ!!」

俺の位置からは金色の闇の表情は見えなかったが、ラコスポは怯えるように後ろへ数歩下がった。

「くっ、こうなったら……出て来い！　ガマたん!!」

再び上空に浮かぶ変な機械から光が射し込まれ、また光の中心に何かが現れる。

「……………って、カエルか？」

現れたのはとても大きく大きなカエルだった。

だが、特に脅威は感じられない。

「さあ、ガマたん！ お前の恐ろしさを見せてやるもん！！」

ラコスポの言葉を切掛けに大きなカエルは金色の闇に向かって何かを吐きだした。

しかし、俺と本気で戦える金色の闇は素早くその何かを避ける。

「なっ！？」

「ふ、服が！？」

俺は驚きの声を上げ、金色の闇も自分の姿を見て驚いているようだった。

大きなカエルの吐きだしたものを避けた金色の闇だが、跳ねたものまでは避けられなかったらしく、服にあったってしまった。

すると、その服にあたった部分が溶けてしまい白い肌がそこから覗く。

「ガマたんの粘液は都合よく服だけ溶かすんだもん！ だからボクたんのお気に入りなんだもん！！」

その発言を聞いているとかなりの変態思考の持ち主のようだ。

これは俺も戦いに参加するべきなのかと考える。

「そんな不条理な生物、認めません！」

俺が考えている間にも金色の闇は戦闘を継続しており、腕を刃に変化させて大きなカエルに切りかかる。

しかし、粘液が纏わりついた長い舌は上手く切れないようで、金色の闇はそのまま吹き飛ばされてしまった。

「くっ！」

「よっと、大丈夫か？」

吹き飛ばされた金色の闇を抱きとめてやり、そう問いかける。

しかし、粘液によって溶かされた服から覗く白い肌が眩しくて直視することが出来ない。

「い、いやぁー！」

金色の闇は長い髪を拳に変化させ、抱きとめていた俺を殴り飛ばした。

「へぶっ!？」

切られるよりはマシだが、助けた相手にそれはないだろう。

「スキありだもん！ 金色の闇、全裸決定だもん!!」

俺の方へ意識を傾けていたため、大きなカエルから吐き出された粘液は金色の闇に向かって一直線に飛んでくる。

「しまっ・・・・・・・・」

「させるかよ。爆ぜろ」

金色の闇の目の前で小規模の爆発が起こり、飛んできた粘液を吹き飛ばした。

勿論、俺が『精霊』の力を使って、爆発を起こしたのだ。

さすがに敵とはいえ、年頃の女の子を全裸にさせるわけにはいかない。

「まったく、大人しく見てりゃ調子に乗りやがって」

金色の闇に殴り飛ばされていた俺はそう言いながらラコスポと大きなカエルに向かって歩き出す。

その途中で全裸にはならなかったが、露出度が高くなってしまった金色の闇に上着を掛けてやる。

「あっ・・・・・・・・」

「さて、お仕置きの時間だぜ？」

身体に『精霊』を纏った俺はもはや目では追えないほど早く動ける。

カエルを何度も殴り付けたあと、上に乗っていたラコスポも一緒に

殴っておく。

そして下から風の力で吹き飛ばし、上空に浮かんだままの変な機械へぶつけてやった。

すると変な機械が爆発して、ラコスポはどこか遠くへと飛んで行ってしまった。

「……………どうして敵である私を助けたのですか？」

少しやり過ぎたかなと反省していた俺の背に金色の闇がそう話しかけてきた。

「もともと悪いのはアイツだろ？ それに依頼主がいなくなればもう俺の命を狙わなくて済むからな」

俺はそう答えを返して微笑む。

すると、金色の闇は俯いて俺の上着でギュッと身体を隠すような仕草をする。

「それにこれ以上、可愛い子に命を狙われるのは困るからな」

「か、可愛い……………私が、ですか？」

沈黙に耐えきれなかったので、そう言って場を和ませようとしたのだが、金色の闇から思った以上の反応が返ってきた。

「あ、ああ。それがどうかしたか？」

「いえ、そんな風に言われたのは初めてなので……」

照れてしまったのか、今度は頬を少し赤らめて俯いてしまった。

しかし、よく考えると俺は金色の闇から仕事を奪ってしまう形になった。

依頼主をどこかに飛ばしてしまったので、依頼料を取ることが出来なくなっただろう。

「なあ、金色の闇。お前に依頼をしたいんだが、いいか？」

せめてものお詫びとして今度は俺が依頼主になってコイツに依頼料を支払ってやるとしよう。

あまり高いと払えなくなってしまうが、そこは交渉でなんとかするかな。

くおまけく

私は金色の闇、名前はありません。

今までもこれからこの名前で呼ばれることでしょう。

今回の目標はなかなかの強敵でした。

「……………結城トシアキ」

前回の依頼主から聞いていた情報では地球人でデビルーク星のプリンセスを脅している極悪人だと聞きました。

「・・・・・・・・」

そこまで考えて私は、彼に貰った上着をギュッと握りしめます。

先ほど彼に依頼された内容は私を驚かせるものでした。

「まさか、暗殺者に護衛を頼む人がいるなんて思いもしませんでした」

そう、彼は自分の身を守ってくれと依頼してきたのです。

今まで人を暗殺してきた私にとって誰かを守ることが出来るとは思えませんでした。

【同じだろ？ 自分の力を殺すために使うか守るために使うかの問題だ】

そう彼に言われ、私はその依頼を受けることにしました。

近くに居た方がいいと言われましたが、私自身の心の整理の為、遠慮しました。

今はこの少し離れた位置から彼——結城トシアキを見守るのが私の仕事なのです。

第十五話

「トシアキ！ 早くしないと遅刻しちゃうよ！！」

彩南高校の予鈴を聞きながら俺は先に走しりだしたウラの背を見送る。

ウラは楽しみにしている学校での生活の為に走ってるのだろうが、俺は別にどうでもいい。

「……………朝から本当に元気だなあ」

鞆を担ぎながら俺はトボトボと歩いて門を潜った。

新学期ならば風紀委員が居そうなものだが、今回は特に問題もなく学校内へ入ることが出来た。

「ん？」

学校に入ってから視線を感じたので、辺りを見渡してみる。

「……………おっ！」

見渡してみると、校舎の屋上で黒い衣装を身に纏った金髪の少女を発見した。

視線が合ったのを確認した後、俺はここに来るように彼女に向かって手招きをする。

「なんですか、結城トシアキ」

変身能力で白い翼を羽ばたかせながら俺の目の前に降り立つ金色の闇。

前回の戦いの後、俺のことを護衛するように依頼したのだ。

「ほらこれ」

「？」

俺は鞆の中から包みを取り出し、彼女の手の上に乗せる。

金色の闇は手の上に乗っている包みと俺に視線を交互に向けながら首を傾げた。

「それは弁当だよ。今日の昼飯に食ってくれ」

「……………毒でも入っているのですか？」

「なんてこと言うんだよ。一応、俺が腕によりを掛けて作った自信作だぜ？」

人がせっかく早起きして作った弁当に対してなんて言い草だ。

今日はララと美柑にも同じ弁当を渡している。

その時に彼女の顔も思い浮かんだので一緒に作ってみたのだ。

「そうですか」

相変わらず表情を変えずに手に乗せた弁当をジッと見つめる。

するとその場で包みを解き、弁当を食べ始めた。

「おいしい、昼飯用に作ったのに今食べるのかよ」

「・・・・・・・・やはり、地球の食べ物は変わっていますね」

俺の呆れた言葉に返事をするかのように弁当を口に含んだ後に彼女はそう言った。

つまり、俺が腕によりを掛けて作った弁当はそんなに美味しくなかったということだ。

「ですが、こういう変わった食べ物も悪くありません」

「えっ？ お、おい！」

落ち込んでいた俺の姿を見てそう言ってくれたのか、本心からそう思っていたのかわからなかった。

結局、金色の闇はそう言ったあとに再び白い翼を羽ばたかせてどこかへ飛んで行ってしまった。

「・・・・・・・・まあ、いいか」

弁当は受け取ってもらえたし、そのまま持って行ったので食べてはくれるだろう。

結果的によかったと、そこまで考えた所で始業のチャイムが聴こえ、俺の遅刻が確定してしまうのであった。

こうなってしまったては急いでも仕方がないので、俺はゆっくり校舎へと向かう。

上靴に履き替えようと靴箱を開けると大量の手紙が落ちてきた。

「・・・・・・・・マジかよ」

最初は女の子からの手紙かと少し期待したのだが、よく見るとどれもそんな様子はない。

なぜなら、手紙にカッターの刃が仕込んであったり、文字が赤く染まっていたりしているからだ。

俺はそのうちの一枚を取り、中身を読んでみる。

【直ぐにララちゃんと別れるんだ!!】

内容が内容だったため、俺は気にせずに傍にあったゴミ箱へ捨てる。

カッターの刃がついている危ない物や文字として読めないようなものも一緒に捨てておく。

【月のない夜は気を付けろ、俺はお前を狙っている】

【陽のあるうちは歩けると思うな、俺たちはお前を監視している】

「・・・・・・・・つまり、月のある夜は歩いても大丈夫なんだな」

全ての手紙を読み終え、くだらない結論に達した俺。

もっとも、素直に手紙の内容を守るつもりもないのだが。

「ん？」

上靴を手にとった俺はまだもう一枚、手紙が残っていたことに気付く。

この最後の一枚は綺麗な封筒に入っており、文字も普通に読めた。

【屋上で待ってます】

「……………いや、いつだよ」

思わず手紙に突っ込みを入れてしまった。

この手紙を何度読み返してもそれしか書いていない。

差出人も時間帯もわからないままだ。

昨日、俺が帰るときに靴箱には何もなかったので入れたのならばその後だ。

「昨日の放課後の話じゃねえだろうな」

どうせ遅刻が確定してしまっているので、俺は教室へは向かわずに屋上へ向かう。

もし、昨日から待っていたのならば、と考えての行動だったのだが。

「……………誰もいないな」

既に一時間目の授業が始まっており、屋上には誰の姿もなかった。

仕方なく俺は落下防止用のフェンスの傍まで行き、腰を下ろす。

「いつの時間帯かわからないから仕方ないよな」

俺以外には誰もいないのだが、授業をサボる言い訳を呟きながら目を閉じる。

風が心地よく吹いており、この分だと気持ちよく眠れそうだ。

俺はそこまで考えている内に意識が遠のいていくのを微かに感じていた。

「んっ、ん？」

俺の傍で言い争う様な声が聴こえて来たので閉じていた目を開ける。

まったく、せっかく気持ちよく寝ていたのに邪魔をしたのは誰だよ。

「――だから、あなたに用はないの。そこを退いて」

「どのような理由があらうと、彼は私の依頼主。ここを通すわけにはいきません」

俺が開けた目に最初に飛びこんできたのは、金色の闇の背中だった。背が小さい彼女だが、俺は座っている状態なので少しその背中が大きく見える。

「もう！ トシアキ君は私が手紙でここに呼んだの！ だから、私には会う権利があるんだよ」

そして、金色の闇の対面側に立つ女の子がどうやら手紙の差出人らしい。

金色の闇の背から顔を覗かせて見てみたが、俺が初めて見る生徒だった。

「手紙でここに……やはり、彼を襲うために呼び出したのですね」

どうやら彼女は眠っている俺が襲われそうになっていると勘違いしているらしい。

確かに護衛をするように頼んだが、まさか本当に傍で守ってくれるとは思わなかった。

「よっ、金色の闇。色々とサンキューな」

「起きたのですか、結城トシアキ。あなたはいついかなる時でも警戒しておくべきです」

いつまでも座っているわけにはいかないので、俺は起き上がって彼女の肩をたたく。

俺が隣に立ったのに気付いた金色の闇はそう言って注意してくる。

確かにララの他の婚約者候補から命を狙われていればそう思うのかもしれないが。

「警戒っていつてもなあ。いざとなったら助けてくれるんだろ？」

「っ！」

そう言いながら彼女に向かって微笑む。

俺と戦える実力者が護衛してくれているのだから何も心配なんてしていないのだ。

「……………知りません。それから彼女はあなたに用があるそうです」

プイツと俺から視線を外した金色の闇は先ほどまで言い争っていた女の子に視線を向けた。

そんな彼女に俺は苦笑しながら、初めて顔を会わせるであろう女の子に視線を向けた。

「えっと、初めまして、でいいよな？」

「うん、初めまして。でも、私はずっとトシアキ君のこと見てたんだよ？」

そう言われても俺にはそんな記憶はない。

ある程度離れていても視線を感じられる自信はあるのだが、彼女のような女の子からは覚えがない。

「私の気持ちを伝えたくて……でも、チャンスがなくて」

「気持ちって？」

俺がそう聞き返すと、彼女はチラリと俺の隣にいる金色の闇に視線を向けた。

どうやら、他の人には聞かれたくない話らしい。

「悪い、金色の闇。少し外してくれないか？」

「……依頼人からの願いなら構いませんが、いいのですか？
彼女があなたの命を狙ってないという保障は有りませんよ？」

今の会話を聞いて俺は金色の闇は立派な仕事人だと考えてしまった。

俺が依頼した『護衛』という仕事をキチンとこなそうとしている姿が立派に見える。

今まで暗殺しかしてこなかったというのが嘘のそうに感じられたの

だ。

「そう言ってくれるのは嬉しいが、俺の強さは知ってるだろ？ 問題ないさ」

「……………わかりました。あなたがそう言うのなら」

俺の言葉を信じてくれたのか、金色の闇は白い翼を変身能力で出現させて少し離れたマンションの上に降りたった。

なんだかんだ言って俺のことは見守っていてくれるらしい。

「なんか、トシアキ君って凄いね。あの『金色の闇』にあそこまで言えちゃうんだもん」

今の言葉から察するにどうやら彼女も宇宙人らしい。

しかし相手は女の子、流石にララの婚約者関係ではないと思うのだが。

「この前はごめんなさい。 レンが迷惑をかけて」

「ん？ もしかして、兄妹かなにかか？」

ここでも思いもよらないクラスメイトの名前が出てきた。

以前、ララに自分をアピールするために色々絡んできたレンの知り合いらしい。

「えっと、兄妹っていうか、なんていうか……………」

どうも話にくい事情があるようなので俺は特に何も聞かず、話の続きをするように視線で促す。

「メモルゼ星の王族として謝罪します、本当にごめんなさい」

メモルゼ星が何処にある星なのかは知らないが、彼女も王族の出のようだ。

つまり、その知り合いであるレンも王族なわけで。

「そうか。 君・・・・・・・・っと、名前をまだ聞いてなかったな」

「あっ！ ごめんなさい。 私はレンっていいいます」

俺の言葉に慌てて名前を覚えてくれる彼女――レン。

そんなレンの今までの様子を見ていて、悪い奴ではないと判断した。

「レンの謝罪は確かに受け取った。 王族としての謝罪なら受け取らない方が失礼だしな」

本当なら本人の口からそう言った言葉を聞きたかったが、仕方ない。

俺自身も王族の出なのでこういったやり取りは初めてではないのだ。

もつとも、その仕事の殆どは王であった父親がずっとやっていたのだが。

「そう言えば最初に言ってたレンの気持ちって、もしかしてこのこ

とか？」

身内の不始末の為に頭を下げるルンの行動に感嘆しつつ、そう尋ねた。

もし、そうならば話は終わりということになり俺は帰ろうかと思っていた。

「えっと、そうじゃなくて……」

ルンは急に頬を赤らめ、俯きながら一人で小さく何かを呟いた。

顔を上げた彼女の瞳は決意で固まっており、閉じていた口をゆっくりと開いて言葉を発する。

「……あなたのことが好きです。私と付き合ってください」

突然の告白に少し驚いた俺だが、ララには結婚したいと言われたこともある。

「理由を聞いても良いか？」

そのため、すぐに落ち着きを取り戻した俺はその理由を尋ねてみた。そもそもメモルゼ星の王族が地球の一般人にそんなことを言っているのか。

と、そこまで考えた所でララもデビルーク星の王女であったことを思い出した。

「私、レンに対して本気で怒っているトシアキ君を見て、一目惚れしたの!!」

あの教室で思わず殺気を出してしまった時のことか。

しかし、その時の出来事は教室にいたクラスメイトしか知らないはずだが。

「他の人の為に怒る優しさ! レンを睨んだときに表情! もう、カッコよくって!!」

「そ、そうか………」

その時の俺のことを力説するルンに少し苦笑気味の俺。

確かに好意を持たれたことは嬉しく思うが、俺はまだルンのことを知らない。

「その気持ちは嬉しいけど、俺はまだルンのことをよく知らない。だから残念だけど………」

そこまで言った所で突然、目の前の『精霊』が暴れ始めた。

その様子から何かを伝えてくれようとしているのがわかるが、内容までは理解できない。

「くしゅん!」

『精霊』が暴れたことが原因で風が起こり、ルンの鼻が刺激された

のか、彼女は可愛らしいクシャミをする。

すると、先ほどまでいたルンの姿が消え、女子の制服を着たレンが現れた。

「・・・・・・・・」

「ルンの奴、少しはボクの気持ちも考えてくれよ」

俺が無言で見つめているのを知ってか知らずか、涙目になりながらレンは自分の姿をみてそう呟く。

「くっ！ 結城！！ ララちゃんだけでなく、もう一人のボクであるルンの心まで奪うとは」

俺の視線に気付いたのか、コチラを睨みつけながらそう言ったレン。

だが、男であるレンが女子の制服を着てそんな風に言っても雰囲気
が台無しだ。

「許しがたい！ 許しがたいが、今日は勘弁してやろう！！」

俺の呆れた表情が効いたのか、それだけ言い残して慌てて去って行くレン。

おそらく、女子の制服を早く着替えたいのだろう。

それにしても、また新しい宇宙人と関わりを持ってしまった。

これでまた面倒事が増えるかもと心配する俺であった。

くおまけく

私はクシャミをしてしまったことによって周りが暗い闇の中にポツンと佇む。

「もう！ もう少してトシアキ君からの返事を聞けたのに！！」

思わずレンの意識に向かってそう怒鳴ってしまう。

一応、レンが見た光景は私も見えるのだけど、レンは制服を着替えるために既に屋上から立ち去ってしまった。

「本当はクシャミ程度じゃ、入れ替わることなんてないのになあ」

レンがララを追いかけて地球に來た所為で身体が少しおかしくなってしまった。

さっきもトシアキ君が何か言ってたけど、クシャミを我慢しようと意識をソチラへ向けていたので全くわからなかった。

「せっかく告白したのに……………」

答えを聞けなかったのは残念だけど、おそらく断られていただろう。

あのララの婚約者候補になっているくらいだし、他からも告白されているかもしれない。

「でも、いいもん！ 私、負けないから！！」

今はレンが表に出ているけど、今度私が出たときにまた告白してみよう。

それでもダメだったら、振り向いてもらえるまで頑張る。

メモルゼ星の王族はデビルーク星の王族なんかに負けないんだから。

第十六話

授業が終了し、後は帰宅するだけになった放課後。

俺は鞆を担ぎながら欠伸をして、今日一日を振り返る。

「ふわあああ………ようやく放課後か。短いようで長いよなあ」

振り返ると言っても特に何もなく、ただいつもと同じような感じだった。

そう言えば、一緒に帰るララの姿が見えないが、何処に行ったのか。

「まあ、アイツも人気あるし、誰かに告白でもされてんのかな」

そんなことを考えつつ、俺は靴を履き替えて外へ出る。

「ん？ あれは先輩たちだよな」

沙姫先輩といつも傍に控えている凜先輩に綾先輩の三人が何やら校門前で立ち止まっていた。

様子を見ているとどうやら小さな子どもが一緒にいて何やら話している。

しかし、あの子どもこの距離から俺の見る限り全く隙がない。

「………何か嫌な予感がするな」

近づいてみればその違和感に気付くかもしれないが、また変なトラブルに巻き込まれそうで躊躇してしまう。

「先輩に迷惑かけられないし、とりあえず行くか」

そう思って歩き出した矢先、沙姫先輩が背負っていた子どもが胸を触り始めた。

それも、たまたま触れてしまった感じではなく、アレはもはや揉んでいる。

「そこまでにしておけ」

ちよつとムカついた俺は凜先輩や綾先輩のスカート捲り始めた子どもの首根っこを掴み上げる。

「おっ!？」

「大丈夫ですか、先輩」

俺の存在に気付いたらしい子どもが驚きの声を上げているが、俺はそんなことを気にせず先輩たちに声を掛ける。

「う、うむ。助かったぞ、結城」

「あわわわ、あ、ありがとうございます!」

落ち着きを取り戻した凜先輩と俺が声を掛けて余計に混乱してしまった綾先輩。

「沙姫先輩も大丈夫ですか？」

「え、ええ。ありがとうございます。トシアキ様」

ようやく俺に気付いた沙姫先輩はどこか恥ずかしそうに俺から視線を逸らした。

「？ とりあえず、こいつは俺が叱っておきますから、許してあげてくださいませんか？」

俺の言葉に凜先輩と綾先輩の視線が沙姫先輩へと向かう。

どうやら二人とも沙姫先輩の判断に従うつもりのようにだった。

「沙姫先輩、いいですか？」

「そ、そうですわね。トシアキ様がそこまでおっしゃるのでしたら」

まだ俺と目を合わせてくれない沙姫先輩だったが、俺の願いは聞いてくれたようだ。

「ありがとうございます。こいつは俺しっかり言い聞かせますんで……」

「うむ？ 結城、先ほどの子どもがいないぞ？」

凜先輩に言われてから手元を確認してみると、しっかり掴んでいたはずの子どもの姿が消えていた。

「・・・・・・・・」

俺自身も手の力を弱めた記憶もないし、いなくなった気配も感じなかった。

やはり、先ほど感じた嫌な予感が当たっていたみたいだ。

「すみません。俺、探しに行きますんで、これで！」

このままあの子どもを放っておくとまた何か仕出かしそうなので探しに行くことにする。

何か言いたそうにしていた沙姫先輩には悪いと思ったが、俺は女子生徒の悲鳴が聴こえた場所へと走り出すのであった。

悲鳴が聴こえた場所にたどり着くと、そこはまさに地獄と化していた。

「フハハハハ！ もませろー！ー！！」

「いやあああ！」

「ぎゃああああー！！」

先ほどの子どもがテニスコートにいる女子生徒たちの胸を手当たり次第に触りまくっていた。

「…………いや、あれは触るじゃなくて、揉みしだくだな」

自分で呟きながら言いなおしてみたが、それで事態が収まるわけもない。

女子テニス部の顧問の先生は気を失っているようで役に立ちそうにないので俺がなんとかしなくてはならないようだ。

「仕方ないか」

あの子どもの行動を止めるために『魔法』を使おうとした俺だが、視界に西連寺たちが入ってきた。

というか、沢田や粂岡もテニス部だったのか。

「いい女、発見！」

俺が少し視線を逸らした間に、先ほどの子どもも西連寺たちの姿を見つけたようだ。

今まで触っていた女子生徒たちのもとを離れて一直線に西連寺へ向かう。

「チューしてえ……………ぐえっ！」

西連寺に向かって飛びついたその手前で再び俺は子どもの首根っこ

を掴む。

本来ならば西連寺に抱きつけたのであろうが、今は俺の手元でぶら下っている。

「ったく、油断も隙もねえ子どもだな」

「ま、またお前か。この俺様に気配を感じさせないとはなかなかやるな」

今度は逃がすわけにはいかないので、視線をこの子どもから放さないようにする。

「お前も。俺に気付かれずによく逃げることができたな」

「ケケケ、俺様にとっては朝飯前よ」

どうやら話は通じるようで、これ以上逃げようとはしない。

俺は傍で呆然としていた西連寺たちに声を掛けたあと、子どもを連れて屋上へ向かった。

屋上はあまり人がいないので、聞かれない話をするには適しているのだ。

「あれ？ トシアキ、どうしたの？」

屋上への扉を開けると、目の前にはキョトンとしたララと真剣な表情のザステインがいた。

帰るときに姿が見えないと思ったら、こんなところにいたのかララ。

「「よう、ララ」」

俺が声を掛けたのと重なるようにして、手元にいる子どもも同じようにララに呼びかけた。

「ん？　なんでお前、ララのこと知って・・・・・・・・」

「パパ!？」

声が重なったことに俺が驚いていると、ララも驚いた声でそう叫んだ。

というか、『パパ』ということはこの子どもはララの父親でデビルーク星の王様。

「・・・・・・・・なんっ、だとっ!？」

この子どもがデビルーク王だという事実には驚きつつも、隙がなかった様子だと思い出されてどこか納得していた。

「トシアキ殿、このお方こそ銀河を束ねる我らが主、ララ様のお父上なのです」

先ほどまでララと会話していたザステインは傍によって来て跪きながらそう教えてくれる。

「そういうことだ、結城トシアキ」

ザステインが頭を下げ、ララが驚いているなか、堂々とした態度で
そう言った子ども――デビルーク王。

「俺がデビルーク王、ギド・ルシオン・デビルークだ」

他者を威圧するような殺気を振りまきながらそう名乗ったギド。

もつとも、俺の手に首根っこを掴まれてぶら下っている状態が全て
をぶち壊しているのだが。

「ララ。俺が何のために地球に来たか、ザステインから聞いている
な？」

「・・・・・・・・」

どうやら先ほどララとザステインが話していた内容はこのことらしい。
い。

親子の会話に俺が混ざるのもどうかと思ったので、踵を返して立ち
去ろうとする。

勿論、掴んでいたギドの首根っこは離れている。

「俺の後継者、つまりお前の結婚相手が正式に決まった。あいて
は結城トシアキ、お前だ」

屋上から立ち去ろうとしていた俺の背中にギドの言葉が押し掛かる。

「・・・・・・・・そんな簡単に決めていいものではないだろう」

「別に簡単に決めてねえよ。お前の報告は常にザスティンから聞いてんだ」

突然、当事者にさせられてしまったので、俺は立ち去ることを諦めギドの正面へまわる。

「貧弱な地球人に跡を継がせるのは不安もあるが、ララの意味とお前の先ほどの立ち振る舞いを見て決めた」

確かにララは俺と結婚するという話をずっと続けていた。

勿論、そのこともザスティンからギドへと話がいつてるだろう。

「立ち振る舞いね、俺は大したことをしたつもりはないが？」

「ふん！ 力を押さえているとはいえ、この俺様に気付かれずに二度も行動を止めたんだ。それは誇ってもいいことだぜ」

ギドの上から目線の言葉に俺は少しイラついてきた。

「それに前に言ってたろ、地球に来たら話をしようかと」

そう言った途端、ギドの立っていた場所から四方に亀裂が走る。

そして、俺に対してぶつけられる凄まじい殺気。

「なるほど、つまり話とはそういうことか」

声色は冷静なようでも俺の内心は期待と喜び、そして楽しみで乱れていた。

ギドの態度にイラついていた俺としては丁度いい。

この前に戦った金色の闇と同等……いや、それ以上に興奮してきた。

「結城トシアキ！ あなたは一体何をしているのですか！」

名前を呼ばれたので視線を向けると、金色の闇が戦闘状態で俺の隣に立っていた。

勿論、敵意を向けているのは俺に殺気をぶつけているギドに対してだ。

ちなみにザステインはララを背後に庇うようにして離れた場所にいた。

「ほお、暗殺者の金色の闇か。　なかなかいいモノを持っているな」

流石に一つの星の王ともなると金色の闇のことは知っているらしい。

「だろ？　だが、こいつはもう暗殺者じゃねえ。　今は護衛者だぜ」

俺はギドの言葉を訂正しながら、殺気とともに受けている金色の闇の頭をポンポンと叩いてやる。

「な、なにをするのですか」

「緊張を解してやろうと思ってな。　あと、コイツの相手は俺がするから邪魔するなよ？」

どこか嬉しそうにそう言ってくる金色の闇に笑みを向けながら俺はそう言った。

しかし、俺の言葉を聞いた今でも彼女は傍を離れようとはしない。

「私の受けた依頼はあなたを護衛することです」

「護衛主の命令だぞ？」

俺の傍で共に戦おうとしてくれていることは嬉しく思うが、まだ彼女には荷が重いだろう。

「その場合は最初の依頼に支障がない程度の命令ならば実行します」

つまりは引く気は全くないってことだな。

ほんとに、受けた依頼に忠実な仕事人だ。

「それじゃあ、殺り合うか」

俺と金色の闇、そしてギドが戦闘態勢に移行しようとした時、間にララが立ちふさがった。

「パパ。私、トシアキとは結婚しない」

そして、その言葉を言い放った瞬間、今まで襲って来ていたギドの殺気が霧散していくのがわかる。

そのことに一番安堵していたのは金色の闇のようで、彼女は緊張が

解けたのか、その場で気を失って倒れてしまった。

「結婚しないだど!？ 俺様がせっかくお前の意思を優先して・・・」

「それでも!」

ギドの言葉を途中で遮ったララは話を続ける。

「それでも私は、トシアキの気持ちを無視してまで一方的に結婚しても嬉しくないの」

「・・・・・・・・・・」

ララの言葉に俺もギドも返す言葉がなかった。

というか、ララはそんなことを思っていたのか。

今までの態度ではそんな素振りとは全く見せなかったというのに。

「トシアキ、私ね。 なんとなく気付いてたんだ。 トシアキは私と結婚したいと思っていないことに」

「・・・・・・・・・・そうか」

そこまで気付いていながらあれほど俺に対してアピールをしていたのか。

なんだか、ララの凄さが改めてわかったような気がする。

「それでもトシアキは優しいし、一緒にいると楽しいから今のままでもいいと思ってた」

「でも、やっぱり駄目だね。私はトシアキを振り向かせたい、振り向いてもらえるように努力したいの」

「だからパパ、結婚のことはもう少し待ってて。私、頑張るから」

ララの長い告白を聞いた俺たちは皆、静まり返っていた。

金色の闇はまだ気を失っており、ザスティンは感動したのか涙を流している。

ギドも何か思うことがあるのか、俯いたまま黙っている。

かく言う俺自身もストレートな告白に結構ドキドキしてたりするのだが、表情には出さない。

「・・・・・・・・わかった」

ようやくギドが言葉を発した。

「ララ、お前の考えはわかった。そこまで考えているのなら俺はもう何も言わん」

「うん、ありがと。　パパ」

どうやらギドはララの好きにさせるつもりらしい。

そのあと感動して泣いているザスティンを連れてギドは立ち去って

行った。

ララに聞いた所によると、地球の大気圏に停めてある宇宙船へ戻ったらしい。

「ねえ、トシアキ」

屋上には俺とララ、そして気を失ったままの金色の闇が残っていた。とりあえず俺は金色の闇の頭を膝の上に乗せてやることにした。

「ん？」

ララに呼ばれた俺は顔をララの方へと向ける。

彼女は屋上から夕陽で染まっていく校庭を見降ろしていた視線を俺の方へ向けた。

「絶対に『好き』って言わせてあげるから、覚悟してね」

そういう風に不意打ちで言われた俺の顔はきつと赤くなっていることだろう。

自分でも頬が少し熱を持っているのが理解できるのだから。

とりあえず、俺はこの赤いのは夕陽の所為だと言いながらその場を誤魔化すのであった。

くおまけく

パパとザステインが居なくなったあと私はトシアキと二人きりになった。

金色の闇っていう可愛い子がいたけど、気を失っているので数には入れないことにする。

けど、トシアキったらこの子と何処で知り合ったんだろ。

そんなことを考えながら私は夕陽でそ染まっていくな校庭を眺めていた。

本当はトシアキの顔をまともに見ることが出来ないくらい緊張している。

あんなこと思ったことも言ったことも初めてだった。

でも、好きって気持ちは本当だからパパにもキチンと言えた。

今度はトシアキに言う番だもんね。

「ねえ、トシアキ」

私は校庭に向けていた視線をトシアキに向けた。

すると、トシアキが気を失っている金色の闇って子に膝枕をしていた。

そうだね、ここはパパがデコボコにしちゃったから優しいトシアキはきつと彼女の為に枕になってあげたんだね。

羨ましいなあ、私もしてもらいたいと考えたけど、言葉にはしなかった。

だって、他に伝えたいことがあったから。

「ん？」

私の呼びかけた言葉に振り向いたトシアキの目をしっかりと見つめて、言った。

「絶対に『好き』って言わせてあげるから、覚悟してね」

本当に覚悟してね、トシアキ。

私は他の誰にも負けないくらいトシアキのことが大好きなんだから。

第十七話

窓から差し込む日の光を受け、今まで眠りについてた俺は顔を顰めた。

「んっ、眩しい……………」

今日から学年が一つ上がって新学期が始まるのだが、身体は居心地がいい布団から出たくないようだ。

「まあ、いいか……………」

新学期ということよりも自分の欲求に素直に従うことにした俺は日の光を浴びないように布団を深くかぶる。

「トシアキ！ 今日から二年生になるね、早く学校に行こうよ！！」

部屋の扉を開け放って侵入してきたララは朝から元気がいいようだ。

だが、残念ながら俺にとっては二年生になることでは元氣になれない。

「……………俺は今日、行かない」

わざわざ誘いに来てくれたララには悪いが、今日はそんな気分ではない。

なにが悲しくてこんな居心地のいい布団から出なければいけないのか。

「えっ？ トシアキ、学校に行かないの？」

俺の言葉を聞いて急に静かになったウラは何か迷う様な仕草をして結局、部屋から出て行った。

「これで静かになったな」

ウラが部屋から出て行き、安心してもうひと眠りしようとしたとき、ドタドタと騒がしい足音が聴こえてきた。

「トシ兄い！ 学校行かないって何言ってるの！ 早く布団から出る！！」

次に俺の部屋に侵入してきたのは義妹の美柑であった。

彼女は部屋に入るなりそう言って、俺の布団を引きはがす。

「もう、去年もそんなこと言ってたよね。まさか今年も言うなんて思わ……………」

俺から布団を引きはがした美柑は呆れた様子で話していたが、突然言葉を止めたと思うと顔を真っ赤にしてしまう。

「ん？ ああ、そういうことか」

最初は疑問に思っていた俺だが、今の自分の状況と年頃の義妹を思い浮かべて納得した。

「気にするな、これは朝の生理現象だ。 だいたい、去年一緒に風

呂に入ったときには……ぶっ!？」

俺は最後まで言いきることが出来ず、美柑が投げつけてきた布団に埋もれてしまう。

「き、気にするなって無理に決まってるでしょ!？ それに前の時は大きくなかったもん!！」

後者の怒る理由が納得いかないが、とりあえず埋もれた状態から脱出する。

「と、とにかく早く起きてご飯食べてよね! いつまでも片付かないから」

俺が布団から顔を出した時には既に扉を閉めるところであり、美柑の背中しか見えなかった。

そして、そのままトントンと階段を下りて行く音が遠ざかっていく。

「……………起きるか」

もう既に居心地がいいとは言っていられる状態ではなくなったので、俺は起き上がり制服に着替えることにした。

結局、朝食を食べるときには美柑はまだ怒っていて機嫌を直すのに時間がかかってしまうのであった。

始業式にはなんとか間に合い、今は新しくクラスメイトが変わった教室で辺りを見渡していた。

半分くらいは見知った顔が揃っているが、もう半分については全然わからない。

「はぁ・・・めんどくせえ」

もう一度、クラスメイトを覚えなければならぬと思うと、自然とため息を吐いていた。

「なにため息吐いてんだよ、トシアキ」

俺の後ろから声を掛けてきたのは中学から一緒だったという猿山だった。

男子で話せる相手が居るのは喜ばしいことだと考えていると、急に視線を感じた。

「ん？」

視線を感じた方を見ると、初めて見る黒髪の女の子がコチラを凄い視線で見つめていた。

いや、アレは見つめているというより睨んでいるが正しいだろう。

初めて見る顔なので特に何かした覚えはないのだが、何かしてしま

ったのだろうか。

「どうかしたのか、トシアキ」

「いや、なんでもない」

猿山に再び声を掛けられ、視線をソチラに向けてそう答えたあとに再び彼女の方をしてみる。

しかし、その時には彼女は俺の方を見ていなかったので、詳しい話を聞きに行くことができなかった。

「ちょっと、いいかしら」

などと考えていたが、放課後になるなり向こうの方からコチラにやってきたのだ。

「いいけど、手短にな」

最初から敵意をむき出しにしている奴に対して付き合ってやる義理はないのだが、今日は予定がないので話は聞いてやることにする。

「あなたが結城トシアキ、であってるわね？」

「そうだよ。　そういうアンタは？」

「古手川唯、元一年B組のクラス委員よ」

その元クラス委員が俺に何の用があるのかと疑問に思いながら、話の続きを待つ。

「去年は西連寺さんが甘かったから問題視されてなかったようだけど、私が同じクラスになった以上、そうはいかないわ」

「去年に俺がなにかしたか？」

隣のクラスだった奴にそんなことを言われるようなことをした覚えはない。

ないのだが、知らない間に何かしていた可能性があるため聞いておく。

「とぼけないで！ 私、聞いたのよ。あなたが暴力事件を何件か起こしていることをね」

そう言われてみれば確かに何回か起こした覚えがあった。

しかし、理由もなく一方的に起こしたわけではない。

「そうか……で、理由や原因は聞いたのか？」

「いえ。私も話を聞いたただだったし、その時にはもう終わったことだったから」

つまり、コイツは俺がそういう事件を起こした『悪い奴』に見えていたわけだ。

別に『良い奴』になるために生きているわけではないが、理由も知らないのに一方的に言われることに少し怒りを覚える。

「直接見たわけでも、理由を聞いたわけでもなく、暴力を起こしたら悪い奴か」

「そ、それは……でも、暴力はいけないわ！　もっと他に解決する方法があったはずよ！」

「それはお前の考えだろ、俺には俺の考え方がある」

確かに争いや暴力は悪い解決方法かもしれないが、それらを使わなければいけない時もある。

俺はそういう風に考えているので、どうやら古手川とは見解が違らしい。

「ちょ、ちょっと！」

別にわかってもらう必要性も感じなかったので、俺はそのまま教室から出て行くことにした。

それから何度か教室で古手川から視線を感じることがあったが、特に会話をすることもなくそのまま日々が過ぎて行くのであった。

「なに？　家庭訪問だ？」

「うん。でも、お父さんが漫画の締めきりが間に合わないから急に帰って来れないって」

ある日、学校から帰ってくると美柑が電話を持ったまま玄関に立っていたので事情を聞いてみるとそういう答えが返ってきたのだった。

「仕事が忙しいからって俺とは違う実の娘のことを放っておくなよな」

「ちょ、トシ兄い」

靴を脱いだ俺は美柑の頭をクシャクシャと少し乱暴に撫でまわしながら先ほどの発言を誤魔化す。

危うく美柑に余計な心配をさせる所だったと反省しながらリビングへ向かう。

「でも、いないものは仕方ない。別の日に変えて貰うしかないな」

「うん。でも、もう何回も日にち変えて貰ってるから……………」

俺が先ほどクシャクシャにしてしまった髪を整えながらソファへ腰を下ろした美柑。

「じゃあさ、トシアキが変わりにしたらいいじゃん、家庭訪問」

先に帰宅し、ポテチを食べてリラックスしていたララが美柑の横からそう言った。

「「えっ？」」

俺と美柑の声が重なり、お互いで顔を見合わせる。

確かに俺も家族で一応、兄としての立場ではあるが、問題はないのだろうか。

「俺は別に構わないが……」

そう言いつつ美柑を見ると、似合わない腕組をしながら考えて頷いていた。

「お父さんも帰ってこないし、仕方ないね。 トシ兄い、お願いしていい？」

「……わかった」

家庭訪問される美柑自身が納得したのなら俺としては別に問題ない。

帰って来ない両親が変わって俺が美柑のために頑張ることにしよう。

そういう結論が出てしばらくすると、美柑の担任の先生が訪ねてきた。

「あ、あの！ こんにちは！ 私、美柑ちゃんの担任の新田晴子です」

「こんにちは、いつも美柑がお世話になってます。今日は父親が仕事でいないため兄である私が変わりをさせて貰います」

とりあえず、美柑の担任なのでなるべく丁寧に対応し、家の中に入
って貰う。

俺が挨拶をした時に少し残念そうにしていたのが気になったが、そ
のまま客間へ案内する。

客間では俺と先生が向かい合って座り、俺の右隣に美柑、左隣にラ
ラが座っている。

というかララは別にいなくてもいいような気がするんだが。

「あの、そちらは？」

「えっ？ 私？ 私はトシアキの婚約者です！」

やはり先生もララが存在が気になったのか、それとも家族以外に美
柑の学校でのことを話すのを躊躇ったからなのか。

尋ねられたララはララで、笑顔で嬉しそうにそう答えていた。

「そ、そうなんですか。若いのに凄いのね……」

先生は何やら感心した様子だったが、このままでは話が進みそうに
ないので、俺から話題を切りだしていくことにする。

「それはそうと、先生。美柑の学校での様子はどうですか？」

「そうですね、美柑ちゃんは頭もよくて落ち着きのある良い子です
よ。クラスの皆からもとっても信頼されています」

「へえ、そうなんだ。 美柑」

かなり褒められていたので確認するように美柑を見てみると、嬉しそうに胸を張っていた。

義妹が褒められて俺自身も嬉しくなって隣の美柑の頭を撫でておく。

「ふふっ、兄妹仲が良いんですね」

そんな俺たちの様子を見て、先生も微笑みながらそう言ってくれた。それからしばらく先生と話をしていたが、美柑は問題もなく優等生であるらしい。

スポーツや勉強も平均以上で友達もたくさんいるようだ。

ただ、家事を行っているため放課後に友達と遊ぶことが少なく、先生としては心配らしい。

「私は大丈夫だよ？ 家事も好きだし、友達とは学校で遊んでるから」

美柑はそう言っていたが、小学生に家のことを全てやらせてしまうのも考えものだ。

まったく家にいない両親もそうだが、俺も美柑を手伝わなくてはいけないと考えさせられた家庭訪問だった。

くおまけく

新しい学年になってクラスメイトも半分は入れ替わった。

私が確認している限り、このクラスには要注意人物がいる。

「・・・・・・彼ね」

自分の席に座ったままの彼は何をするでもなく、ただ教室を見渡していた。

最初は知り合いを探しているのかとも思ったのだけれど、彼は一通り見てため息を吐いたのだ。

「っ!？」

彼の噂は色々と聞いていた。

去年から彼は先輩との喧嘩や、学校外での暴力事件を数件起こしている。

そんな彼がため息を吐いたということは、このクラスに喧嘩相手が居ないと思ったからだわ。

「私が同じクラスになったからには問題なんて起こさせないわ」

そう呟きながら彼を見ていると突然振り返り、私と視線を交わす。

警告の意味も込めて、私は視線を逸らさず、ジッと彼を見つめる。

そんな時、彼は友人に呼ばれて私から視線を逸らした。

「・・・・・・・・やっぱり、一度注意しておくべきよね」

そのまま私は授業が始まるまで彼になんて言うって注意するべきか考え込むのだった。

そして放課後になり、私は彼に声を掛けることにした。

だけど、結局彼は私の言葉を聞き入れずに教室から出て行ってしまった。

「でも、彼の考え方はやっぱり間違ってるわ」

彼は私の考え方と自分の考え方が違うと言っていた。

一度、彼が起こした事件のことを調べてみようかしら。

思い立った私はすぐに行動に移す。

去年の出来事なので覚えている人は少ないかもしれないけれど。

彼の考え方を正すため、まずは彼のことを理解しなくてはならない。

そのために私は行動を開始するのであった。

第十八話

「きゃあああああ!？」

「落ち着け、西連寺。ただのネズミだ」

俺の隣を歩いていた西連寺が急に叫び声を上げたため、俺は原因を教えてやる。

訳がわからないモノが怖いなら、訳がわかるモノだと教えてやれば少しはマシになるだろう。

「大丈夫？ 春菜」

「う、うん。 なんとか……」

一番前を歩いていたララがコチラへ戻って、叫んでいた西連寺を心配する。

「別に大したこと起きないよね」

「やっぱり、ただの噂なのかもね。 幽霊って」

一番後ろにいた昀岡と沢田がそう話しているのでわかるように、俺たち五人は幽霊を探しに旧校舎にやって来ている。

昼休みに幽霊騒ぎがあったと女子たちの間で話題になり、本当かどうかを放課後に確かめに来たというわけだ。

「じゃあ、もう戻るか？　今はまだ大丈夫だが、夜になればここも暗く……」

そこまで言った所で、俺は隣の部屋にいる気配に気がついた。

足音も聴こえたため、他の四人も誰かが居るということに気付いたようだ。

「き、聴こえた？」

「う、うん……」

先ほどまで普通に話していた昀岡と沢田も緊張してきたのか、静かな声に切り替えている。

西連寺はララの腕を掴みながら目を閉じ、プルプルと肩を震わせていた。

「……」

近づいてきた足音は扉の前まで来ると一時的に止まってしまう。

そして、足音の代わりに扉を勢いよく開ける音が響き渡った。

「……って、金色の闇かよ」

「結城トシアキ、このようなところで何を？」

開け放たれた扉から現れたのは元暗殺者で護衛者こと金色の闇であった。

彼女は驚いた表情をしながらもトコトコと傍にやって来る。

「きゃー、可愛い!!」

と、俺の傍へたどり着く前に目の色を変えた沢田に抱きしめられていた。

「ほんと、綺麗な髪。　凄くサラサラしてる」

粂岡も金色の闇の髪を触りながら、感心しつつ羨ましそうに見つめていた。

「ねえ、トシアキ。　この娘、誰なの？」

「そうよ、結城！　こんなに可愛い子と知り合いなんて何をやったのよ！」

そういえば俺以外では金色の闇のことを知らなかったのだ。

しかし、ララの質問はわかるんだが、なぜ沢田に怒られなければならないのだろうか。

「こいつは『金色の闇』って名前であつとした事件で知り合ったんだよ」

ララになら宇宙人について言ってもいいが、流石に西連寺たちがいる前では言えないのでそう言うておく。

「ふーん、じゃあ、ヤミちゃんだね！」

今まで俺は金色の闇と呼んでいたが、ララが言ったヤミという方が呼びやすい。

なので、俺も今度からはそう呼ぶことにしよう。

「・・・・・・・・何かいます」

俺がそんなことを考えていた間に、沢田と糸岡の傍から離れて俺の前まで移動していたヤミ。

彼女がそう言いながら俺の前に来たということは未知の存在から俺を守るために移動してくれたようである。

「サンキューな、ヤミ」

「・・・・・・・・・・こんなときに頭を撫でないでください」

丁度、目の前にヤミの頭があったのでお礼を言いつつ、その頭を撫でてやる。

「あなたたち！　ここは校則で立入禁止のはずでしょ!？」

ヤミが警戒していた方から大きな声で怒鳴りつつ現れたのは古手川であった。

「あはは、ちょっとビックリしちゃった」

「ほんと、私も驚いちゃった」

糸岡と沢田も突然大声で怒鳴られて驚いたようだが、相手が人だとわかると安心したように談笑を始める。

「西連寺さん！ クラス委員のあなたがいながら……」

そう言いながら近づいてくる古手川だったが、俺たちの傍まで寄って来た瞬間、床が大きな音を立てて割れ、下の階へ落下することになった。

「つと！ 危なくない程度に保護を頼むぜ」

沢田と糸岡、西連寺と古手川の落下速度が緩くなって静かに下へ着地する。

ヤミとララ、俺は持ち前の運動力で負担がかからないように地面に降り立つ。

「……あれ？ 痛くない」

「ホントだ」

不思議がっている四人には悪いが、俺の正体を明かすわけにはいかないのだから振りをする。

「そんなことより、さっきみたいなこともあるから出るぞ。 危なくて怪我でもしたら大変だからな」

俺はそう言いながら歩き出すが、誰も後ろに付いてこようとしない。仕方なく俺は振り返ってみると、皆が俺のことを見たまま固まって

いた。

「な、なんだよ？」

「いやあ、結城がそんな風に考えてくれてるのが意外でさあ」

「うんうん。ここに来たのもララちいに連れてこられたからと思
ってただけど……」

確かに女の子だけでは何かあった時に危険だと思い、ララに付いて
いく形でこのグループに混ざったのだ。

「えっ？ 私は何もしてないよ？」

つまり、今回はララに連れられてではなく自主的に付いてきたとい
うわけだ。

「いいから行くぞ！ 付いてこないならもう知らん」

粂岡や沢田、それに古手川からの視線が少し優しいものに変化して
きた気がしたが、俺は構わずにそのまま通路を進んでいく。

そんな俺の様子を見て女の子たちは笑いながらもキチンと付いてく
るのであった。

「というわけで、もう一度戻って来たわけだが」

あれから一度外へ戻り、皆が帰るのを確認してから俺は再び旧校舎へとやって来ていた。

偶然出会ったヤミや古手川の他にも気配を感じていたためである。

しかも、敵意や悪意の類だったため流石に巻き込むわけにもいかなかったのだ。

「巻き込むか……結構気に入ってるのかもな、この世界も」
自分の考えに対して色々と思うところがあつたが、今は目の前のことと集中する。

「アイツのために頑張るか。　　っと、そろそろ戻ってくるかな」

「結城トシアキ」

俺の呟きと共に現れたのは金色の闇ことヤミである。

彼女には旧校舎の周りを見に行ってもらい、他に異常がないか確認して貰っていたのだ。

「おかえり。　　どうだった？」

「はい、特に異常は見当たりませんでした。　　ただ、やはり建物の中から時々視線を感じました」

さすがに裏の世界で生きていたヤミである。

俺と同じように他人の気配や自分に向けられる視線を感じられるようだ。

「そっか。俺だけだったら間違いの可能性もあったが、ヤミも感じたんなら……」

「はい、この建物に何かいます」

二人揃って覚悟を決めた所で旧校舎に向けて足を進めた。

先ほど落ちてしまった穴まで辿り着き、再び飛び降りる。

着地した俺たちは背中合わせに周囲を警戒し、何も異常がないことを確認した。

「つと、さすがだぜ、ヤミ。俺との相性いいじゃん！」

「……私は今まで一人でしたから、あなたが私に合わせてくれたのでしょうか？」

確かにその通りなのだが、即席のコンビにしては悪くないと思う。

つまり、それほど相性がいいという意味で言ったのだが。

「っ！？」

突然、ヤミの髪が刃物の形に変わったのを見て、俺の発言で機嫌を損ねたのかと心配していたのだが。

「本？ それに椅子や靴まで……………」

どうやら俺の背後から飛んできていた物を代わりに切り落としてくれていたらしい。

流石に刺されることはないと思ったが、それでも驚いたことには変わりない。

「いや、マジでビックリしたんだけど……………」

「もっと警戒してください、結城トシアキ。 そんなことでは……………」

俺に説教するように話すヤミの後方にある、落ちてきた穴の傍から視線を感じた。

しかし、ヤミは俺の方を見ていて気が付いていないようだったので、俺が代わりに攻撃しておく。

「きゃっ!?!」

穴の傍を『精霊』の力である風の刃で攻撃すると、そこから人が落ちてきた。

「って、ララ。 お前、何してんだよ」

落ちてきたのは先ほど西連寺たちと一緒に帰ったはずのララで、今度は上手く着地出来ずに尻もちをついていた。

「だってえ、気付いたらトシアキがいないし、探しに戻ってきたらヤミちゃんここに入って行くし、気になって」

好奇心の強いララのことだから、また旧校舎に調べに行くと言ったら付いて来そうだったので何も言わずに帰らせたんだが。

「まあ、仕方ないか。その代り、危なくなったら逃げろよ？ お前は一応、お姫様なんだからな」

付いて来てしまったのならば仕方ない。

ララに何かあった時にギドに何を言われるかわかったものじゃないが、ララ本人の意思を尊重して、とか言えば何とかなるだろ。

「愚かな奴らめ、大人しく出ていけばよかったものを……」

そんな声が聴こえてきたのは突然だった。

建物から響いて聴こえたその声はどうにも人のものとは思えない。

ヤミ、ララ、俺の三人があちこちに視線を向け、声の主を探していた。

「っ!？」

死角から現れた触手によってヤミが捕まってしまい、壁を破壊してソイツは現れた。

「ぐははは！ 思い知らせてやるわ!!」

一つ目でタコのように手足となる触手が八本生えている巨大生物が現れたのだ。

やはりこの旧校舎に何か居たという事実と、今まで見たことない生物に対しての驚きで動きが止まってしまう。

「ヤミちゃん！」

ララの叫ぶ声でハッと我に返った俺はヤミに自力で脱出できないか尋ねる。

彼女の変身能力は髪でも可能なので身動きが取れなくても何とか出来るだろうと考えていた。

「ヤミ！ お前一人でなんとかなりそうか！？」

「すみません。私、こういうニルニルしたのが苦手で・・・」

今にも気を失いそうな弱々しい声で返事をしてきた。

どうやら気を失いそうになるくらいに苦手らしい。

「きゃっ！？ 放してよ！！！」

俺がヤミと会話している間に巨大生物の触手がララの身体を捕まえたようだ。

しかし、女の子ばかり捕まえているが、奴は女にしか興味がないのか。

「最後はキサマだ！」

「っと！　そう簡単に捕まるかよ」

どうやら捕まえる順番に特に意味はなかったらしい。

俺を捕まえようとしてきたので、とりあえずバックステップで回避する。

「くっくくっ、逃がさないぜ」

「ここも通さねえよ」

何処から現れたのか、両側から別の生物たちがゾロゾロと歩いてくる。

半魚人や狼男など、人のように二本足で歩いているが顔や身体が人とは違う。

「ぐははは！　これでお前も終わりだ！！」

目の前にいる巨大生物が四本の触手を使って攻撃してきた。

「本当にこの世界に自然があってよかったよ。　じゃないと・・・
・・・」

迫って来ていた四本の触手が俺の身体に触れる前にズタズタに切り刻まれる。

「えっ？　ぎゃああああ！！」

「俺が『魔法』を使えないからな！」

四本の触手を失った巨大生物は痛みのためか、捕まえていたヤミとララを放して暴れている。

「ひっ！？　に、逃げろ！」

「アイツは化物だ！！」

ゾロゾロと集まっていた生物たちも仲間がやられているのを見てか、怖気づいて逃げ出そうとする。

「逃がさないけどな」

ヤツらが逃げようとした道が地面から出てきた土の壁に遮られる。

勿論、これも俺が『精霊』の力を借りて行っていることだ。

「さて、次の誰は相手だ？」

逃げ場を失い、恐怖で怯えている生物たちをどうしてくれようかと思考を切り替えた。

「あらあら、何の騒ぎかと思えばあなたたちだったのね」

「あっ、御門先生」

ララの言葉で俺は誰がやって来たのか知り、攻撃の思考を中断して

手を止める。

「ミカド？」

「あの、有名なドクター・ミカド!？」

どうやらこの生物たちは宇宙人だったらしい。

話を聞くと、宇宙でリストラになって住む場所を探している内にここにたどり着いたようだった。

「ふふふっ、あなたたち、この子たちに手を出してよくそれだけで済んだわね？」

「「「えっ?」「」」

御門先生は俺に切り刻まれた巨大生物の手当てをしつつ、微笑みながら話す。

「デビルークの姫と殺し屋の金色の闇!？」

今まで相手にしていたのがどのような人物だったのか、知らなかったらしい。

銀河を統一した王の娘や殺し屋に自分から手を出す奴はいないだろう。

「それに、この子は最近有名のデビルーク王の次期後継者よ? 他の有力な候補者を次々と撃退してるんだから、切られるだけで済んでよかったわね」

いつの間にギドの次期後継者になったんだよ。

さすが銀河を統一した男、ララのためにそういう噂を一瞬で広めやがったな。

「こ、殺さないで………」

「ごめんなさいい！ 許してくださいい！！」

俺たちのことを聞いてか、宇宙人たちはみるからに怯え出して泣きながら謝ってきた。

「やだ、そんなことしないよ」

謝られているララは笑いながら否定していたが、ザステインの耳に入れば現実になっていた可能性もある。

「とにかく、これで無事に解決か」

ここに居た宇宙人については御門先生に任せることにして、俺は胸を撫で下ろす。

皆から少し離れた位置に置いてあった椅子に腰を掛けながら、誰もいない隣に話しかける。

「これで静かになるだろ？」

「はい、ありがとうございます。 トシアキさん」

そこには薄らと浮かぶ着物をきた女の子の姿があった。

彼女はここに住んでいる幽霊で、最近は宇宙人たちが住みついて静かに過ごせなかったらしい。

「そういや、名前を聞いてなったな」

「申し遅れました。私、この地で四百年前に死んだお静といいます」

こうしてまた新しい知り合いが増えた。

この世界に来てから色々な経験や体験ができて満足している俺だった。

くおまけく

私の名前はお静。

ここで四百年くらい幽霊をやっています。

いつもは静かで良い場所なのですが、最近は変わった人たちが住んでしまい、静かに眠ることができなくなりました。

「いいから行くぞ！ 付いてこないならもう知らん」

そんな言葉を言いながらコチラにあるいて来きたのは人間とは違う

感じがする人でした。

「ん？ お前、幽霊か？」

「ひゃい！？」

なんと、まだ外が暗くないこの時間帯に私のことが見えているなんて驚きです。

「しかし、本当に居たんだなあ、幽霊って」

彼は全く気にした様子もなく、そのまま通り過ぎて行こうとしていました。

「ま、待ってくださいい！」

慌てて私は彼の横に並びながら必死に話しかけます。

どうして私の姿が見えるのかということ。

変わった人たちが住みついて静かに眠ることが出来ないこと。

話してるうちに出口まで来てしまったので、私はここで止まります。

一応、この地で死んでしまったのでここから出ることが出来ないのです。

「じゃあ、なんとかしてやるよ。 また来るから、しっかり見とけよ？」

「あの、お名前は……」

夕陽を背にそう言った彼の顔はとても綺麗で、見惚れてしまいました。

意識を総動員してなんとかその言葉だけ口にします。

「俺？ 俺は敷島トシアキ。 『魔法使い』さ」

それから数時間後に私の悩みを解決してくださったトシアキさん。

これで静かに眠れるようになったのですが、私の頭から彼の姿が消えてくれませんでした。

また、会えますようにと願いながら、久しく静かになったこの場所で私は眠りにつくのです。

第十九話

「おっ、美味そうなもの飲んでるじゃん。美柑に貰ったのか？」

去年、ララが誕生日プレゼントとしてくれた花が俺の帰宅をジュースを飲みながら歓迎してくれた。

ちなみに花の名前はセリーヌと名付けている。

花のような顔と枝のような手があるし、俺と意思疎通も『精霊』を通して行えるため名前をつけたのだ。

「ただいま……ん？」

俺も早く冷たい物を飲もうと思い、玄関の扉を開ける。

すると、玄関には見たことがない靴が綺麗に揃えて置いてあった。

「客人か？　けど、今は美柑しかいないはずだし……」

しっかりしている美柑のことだから知らない人を家に入れたりはないはずだ。

と、言ってもこんな靴を履く人物は俺の知る限り、美柑の担任の先生しか思い浮かばない。

「と、トシ兄い！　大変だよ！！」

俺の声が聞えたためか、美柑が慌てた様子で玄関に姿を見せた。

「大変って、今来てる客人が何かしたのか？」

慌てている美柑とは反対に俺はいつもと変わらない速度で靴を脱ぐ。

「そうじゃないけど、とにかく早く来て!!」

「お、おいっ!？」

靴を脱いだ俺の腕を引っ張って、美柑と俺はリビングへ向かう。

リビングのソファにいた女性はなかなか綺麗な人で、リラックスしながら美柑が入れたであろうコーヒーを飲んでいた。

「あら？ トシアキじゃない、お帰り♪」

俺と目が合った女性はそう言いながらカップを机に置き、笑みを浮かべる。

その瞬間、俺の名前を親しげに読んだこととリビングで寛いでいる姿を考えて答えを導き出す。

「……母さん、いつ帰って来たんだよ」

「ついさっき。ちょっと日本で仕事があったから、あまりゆっくりは出来ないけど」

どうやら俺の答えは正解だったようで、この女性は『俺』の母親にあたる人らしい。

家にいないと思っていたが、日本という単語が出たことから他の国で仕事をしているようだ。

「親父に連絡は？」

「急な仕事だったから連絡は出来てないの。あっちの仕事の邪魔しちゃ悪いしね」

そう言いつつソファから立ち上がり、俺の傍にやってくる。

「？」

その行動に不思議を感じつつ、親が相手なら警戒することもないと思っていたのだが。

「もう！ トシアキったら、知らない間にカッコよくなっちゃって！！」

「お、おいっ！？ なにして！？」

傍まで寄って来たかと思うと、突然俺の身体を抱締め始めた。

女性特有の良い匂いと胸の柔らかな感触が俺の思考を一時的に奪う。

「ちょっと、お母さん！ トシ兄いが困ってるでしょ！！」

そんな俺の姿を見かねた美柑が身体を張って引きはがしてくれた。

「あらあら、美柑ったら相変わらずトシアキにベツタリなのねえ」

「べ、別にそういうわけじゃ……」

何やら微笑ましいものを見るような眼で美柑を見つめる母親。

その視線を受けて、頬を少し赤らめながらも満更でもない様子の美柑。

「……じゃあ、俺は部屋に居るから」

そんな家族の良い雰囲気壊すわけにはいかないため、俺は自分の部屋に戻ろうと踵を返す。

「あ、そういえばトシアキ。美柑から聞いたけど、宇宙人の子が居候してるんだって？」

「ん？ ああ、そうだけど……」

「ただいまー！」

「お、おじゃまします」

俺の声を遮るようにして、噂のララが帰って来たようだ。

西連寺の声も聞えたということは、遊びにでも来たのだろうか。

「ちょうど帰ってきたようだ」

「そうみたいね」

ララや西連寺をおいて自分の部屋に戻るわけにもいかないので、俺

はりビングに残ることにした。

気を利かせた美柑が玄関まで出迎え、二人をここまで連れて来てくれた。

「トシアキのママ、初めまして！　ララです！」

「えっと、西連寺です」

「むっ!？」

やって来た二人が挨拶をすると同時に立ちあがった母親は真剣な表情で二人に近づいていく。

「お、おい、なにして……………」

俺の声が聞えてないのか、母親はララと西連寺の周囲を歩き回り、様々な角度から見つめだす。

「ちょ、ちょっと!？」

「きゃっ!？」

そして、今度は二人の身体を隅々まで触り、掴み、揉み、始めた。

拳句の果てには着ている制服にまで手をかけ始めたので流石に止めに入る。

「凄いわ！　二人とも将来はモデルにならない!？」

「いいから落ち着け」

目の色を変えて二人に迫る母親の頭をコツンと殴り、ソファに座らせる。

「モデル？」

「お母さんはファッションデザイナーなんだけど、モデルのプロデュースもやってるんだよ」

ララの質問に美柑が答えているのを横から聞いて、俺はなるほどと納得する。

ファッションデザイナーで外国に居るということは結構有名なのではないだろうか。

自分の母親の仕事を今知った俺は感心しつつ、西連寺に視線を向けた。

「悪いな、西連寺。　こんな母親で」

「う、ううん。　大丈夫だから」

「あら？　ひょっとして……」

俺と西連寺が会話している様子を見ていた母親がそう言いながらコチラに近づいてくる。

「おい、母さん。　流石に二回目は本気で怒るぞ？」

「ち、違うわよ。西連寺さん？ ちょっといいかしら」

俺の言葉に慌てて首を振りながら西連寺だけを連れて少し離れる。

二人が何を話しているのか聞こうと思えば聴けるが、流石に悪趣味なのでそういうことはしない。

「わ、私！ 急用を思い出したので帰ります！！」

そして母親に何か言われたのか、突然顔を真っ赤にして走って帰ってしまった。

「・・・・・・・・何言っただよ」

「ふふふ、人気者なのね。少し妬けちゃうわ」

俺の質問には答えず、意味深な笑みを浮かべる母親。

そのすぐ後にまた外国に仕事へ行くということで空港まで見送りについていった。

「じゃあ、またね。 あっと、美柑」

「なに？ お母さん」

離れた位置で呼ばれた美柑は何の疑問も持たず、母親のもとへ向かう。

何やら言葉を交わした後、先ほどの西連寺のように顔を赤くして戻って来た。

「ララさん、お母さんが呼んでる」

「えっ？ 私？」

呼ばれたことに首を傾げつつもララは母親の所へ向かって行く。

「何を話してんだ？」

「えっ！？ いや、べ、べつに何でもないよ！？」

俺の顔を見て慌てた美柑の様子で、どうやら俺には聞かれたくなかった話らしい。

「……まあ、いいけどな」

そう言っている間にララも戻って来て、母親は最後に大きく手を振って飛行機に乗り込んで行った。

「ララは何を言われたんだ？」

「えっと、頑張れって」

俺にはその言葉の意味がよくわからなかったが、隣で聞いていた美柑にはわかったらしい。

言われた本人もわかってないようだったが、応援されたのなら頑張るだけだとララは最後に微笑んでそう言ったのであった。

「いらっしやいませ！」

元氣そうな店員の声を聞きながら俺たちがやって来たのは街中にある一軒の店であった。

「服だけじゃなくて下着まで売っているのか、この店は」

女性物の服や下着類が売っている店なので俺には場違いなのだが、
粂岡や沢田に連れて行かれたヤミを放っておくわけにもいかないの
で仕方ない。

「ヤミヤミ！ こっちこっち！！」

店内の商品を物珍しそうな目で見ていたヤミを色々な服を抱えた粂
岡が呼んでいる。

そもそもここに来る原因となったのが、ヤミの服装についてだった
のだ。

「じゃあ、まずはこれに着替えてね」

「はぁ・・・・・・」

粂岡が持っていた服をヤミに手渡し、ヤミは言われるがままに試着
室に入って行った。

学校の帰りにヤミに出会い、たまたま彼女が読んでいた本が母さんの書いたファッション雑誌だったのだ。

そこから、ヤミの服装はいつも変わらないという話になり、それを聞いた昶岡と沢田がここに連れてきたというわけである。

「・・・・・・・・どうですか？」

今までの過程を思い返している内にヤミの着替えが終わったようなので見てみる。

「おお、似合ってるな」

いつもツイーンに纏めている髪を下ろし、帽子をかぶっているのが似合っている。ドクロの入ったハーフパンツと組み合わせてボーイッシュで可愛い。

「じゃあ、次はこれ！ 今度はこっちね！！」

今度は沢田に渡された衣装を持って再び試着室へ戻るヤミ。

「・・・・・・・・こんな感じですか？」

沢田に渡された衣装はいつもと同じような黒い衣装なのだが、ゴスロリの感じが出ており、それもまた似合っていた。

「ふむ、それもなかなか」

「それじゃあ、次いつてみよお！」

再び昀岡が持っていた衣装をヤミに渡し、試着室へと押し戻す。

というか、お前らいつの間にそんなに服を持って来ていたんだ。

「でもやっぱり、ヤミヤミは可愛いから何着ても似合うよねえ」

「うんうん！　こんなに可愛い子が身近にいたら色々コーディネートしてあげたくなっちゃうよね！」

昀岡と沢田がそう話しているのを後ろで聞きつつ、ヤミに似合う服を選ぶ二人のセンスも良いんじゃないかと俺は考えていた。

ちなみに俺の服への感想は女性陣の盛り上がりによってかき消されていた。

そんな感じで一時間ほどヤミは色々な服に着替えて、最後には今風のミニスカートにヒールを履いた女の子になって店を出た。

「あの、本当にコレを頂いてもいいんですか？」

結局、昀岡と沢田がヤミの服や靴を買ってやることになった。

ちなみにヤミの元々着ていた服や靴などは紙袋に入れ、俺が持っている。

「いいいいいよ！　ヤミヤミにプレゼント!!」

「ほら！　結城も何か言ってあげなよ！」

糸岡も沢田も楽しそうにヤミの服を選んでいたので買ってもらったのはそれでよかったのだろう。

「いつもの服でも可愛いけど、その服も凄く似合っていていいと思うぞ」

「そ、そうですか。ありがとうございます」

いつもと着ている服が違うからだろうか、照れている様子もまた違って見える。

「おっ、カワイイ子がいっぱいいるじゃん」

「ねえ、ねえ、君たち。俺らと遊ばない？」

とそこへ声を掛けてきたのは大学生くらいの男たちだった。

糸岡と沢田、それからヤミと可愛い三人を目当てに声を掛けてきたのだろうか、相手が悪かったとしか言いようがない。

「やめとけ、痛い目を見ることになるぞ」

三人を庇う様に前へ出た俺はそう言って声を掛けてきた男たちに睨みを利かせる。

「あ？ 何だデメエ」

「喧嘩売ってんのか？」

声を掛けていたことを邪魔されたのに苛立ったのか、俺の胸倉を掴

み上げる。

俺の睨みも大して意味がなかったようなので実力行使しかないと考えていたのだが。

「その人は私の依頼主、手出しは許しません」

俺の後ろからヤミがそう言って前に進み出てきたのだ。

「お、おい、やめとけて今のお前は……」

「はぁ！？ 何言ってるの？」

「手を出したらどうなるわけ？ おチビちゃん！」

いつもの動きやすい服装ではないので俺はヤミを止めようとするが、男たちが俺の声を遮って騒ぎ出す。

結局、ヤミの変身能力で男たちは数分で騒いでた口を閉じることになった。

「……………まあ、結果はこうなるよな」

ボコボコにされて倒れている男たちを見ながら俺はため息をついた。

そして、男たちをそうしたヤミに視線を移す。

「だからやめとけていったら？」

「……………」

ヤミのスカートが先ほどの出来事で大きく破れてしまったのだ。

俺はとりあえず、持っていた紙袋をヤミに渡してやる。

「すみません。せっかく頂いた服ですが、やはり私にはいつもの服が合っているようです」

「ヤミヤミ……」

粂岡と沢田にそう言って頭をさげ、紙袋を持ってその場から去って行った。

その後ろ姿を俺たち三人は眺めていることしかできなかった。

くおまけく

私は結城トシアキたちと別れたあとすぐにビルの屋上へと上りました。

勿論、変身能力はなるべく人目につかない場所で行います。

そうしないと結城トシアキに怒られてしまいますので。

「……着替えますか」

私はビルの屋上で周りから見えない所を探し、そこで紙袋に入って

いた服に着替えます。

「やはり、これが落ち着きます」

着ていた服を紙袋へ仕舞うとき、ふと彼の表情を思い出します。

初めて知ったこの星での服の文化。

初めて着たこの星の衣装。

初めて感じたこの星の衣装を着たときに褒められた嬉しさ。

「・・・・・・・・ですが、なかなか捨てたものでもありませんね」

この服は破れてしまいましたが、この服を着たときの彼の微笑みがいい思い出になるので置いておくことにします。

次に新しい服を着たときに彼がどんな顔を見せてくれるか楽しみにしながら、私は今日も仕事に戻ることになりました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9047r/>

魔法使いのToLOVEる

2011年11月15日15時52分発行